

名越ヶ谷遺跡 (No.231)

大町六丁目 1506 番 11 の一部地点

例 言

1. 本報告は、鎌倉市大町六丁目 1506 番 11 の一部において実施した名越ヶ谷遺跡（鎌倉市 No.231）の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は平成 25 年 4 月 15 日から同年 5 月 31 日にかけて、個人専用住宅の建設に伴う国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査の対象面積は、40.7㎡である。
3. 発掘調査体制は、以下のとおりである。
主任調査員 押木弘己（鎌倉市文化財課 臨時的任用職員）
調 査 員 岡田慶子（鎌倉市文化財課 臨時的任用職員）
作 業 員 伴 一明、安藤宗幸、大塚尚城、佐藤忠秀、石黒 清
（公益社団法人 鎌倉市シルバー人材センター）
整理作業参加者 押木弘己、岡田慶子（鎌倉市文化財課 臨時的任用職員）
4. 本報告の執筆と編集は、押木が行った。
5. 本報告で使用した写真は、現地・出土遺物とも押木が撮影した。
6. 本報告では世界測地系（第Ⅸ系）の国家座標軸に基づく測量成果を掲げたが、平成 23 年 3 月 11 日以前に打設された鎌倉市 4 級基準点を基に測量・作図したため、座標値は東日本大震災後の地殻変動に対応した補正值となっていない。
7. 本調査に係わる出土遺物および各種記録類は、鎌倉市教育委員会が保管している。本調査地の略称は市教育委員会の統一基準に従って「NG1301」とし、出土品への注記などに使用した。

凡 例

1. 挿図の縮尺は、遺構・遺物ともに図中に表示している。
2. 本書中に記載した国土座標値は、世界測地系（第Ⅸ系：東日本大震災後の補正前）に基づいている。
3. 挿図に示した方位標は座標北（Y軸）で、真北はこれより 0° 09′ 25″ほど東に振れている。
4. 遺構挿図中の水系高は、海拔値を示す。
5. 出土遺物の年代観は以下の文献を参考としたが、筆者が各所見を理解し切れていない部分もある。
 - ◆かわらけ・遺物全体の様相：宗臺秀明 2005「中世鎌倉の土器・陶磁器」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～資料集』
 - ◆輸入陶磁器：太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡 X V—陶磁器分類編一』
 - ◆瀬戸窯製品：藤澤良祐 2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院
 - ◆常滑・渥美窯製品：愛知県 2012『愛知県史』別編窯業 3 中世・近世常滑系

目 次

第一章 遺跡の位置と歴史的環境	73
第二章 調査の方法と経過	75
第1節 調査に至る経緯	
第2節 調査の方法	
第3節 調査の経過	
第三章 基本土層	76
第四章 発見された遺構と遺物	78
第五章 調査成果のまとめ	86

挿図目次

図1 調査地点位置図	74	図4 1(現地1f面)面全体図	79
図2 調査区配置図	75	図5 I区の出土遺物	80
図3 調査区壁断面図	77	図6 II区の出土遺物	81

表 目 次

表1 出土遺物カウント・計量表	82	表2 出土遺物観察表	84
-----------------	----	------------	----

図版目次

図版1	87	2. I区1面下の堆積層(南から)	
1. 調査地近景(南から)		3. I区1面上の堆積土(南から)	
2. I区調査風景(北から)		4. II区1面(1c面・東から)	
3. I区中世層検出状況(北から)		5. II区1面(1c面・北から)	
4. I区中世層上の堆積土(北東から)		6. II区1面(1c面)炭検出状況(北から)	
5. I区1面(1f面・北から)		7. II区1面(1c面・西から)	
6. I区1面(西から)		図版3	89
7. I区1面下トレンチ(上層・北から)		1. II区1面(1c面下部・北から)	
8. I区1面下の堆積土(南東から)		2. II区1面(1d面・北から)	
図版2	88	3. II区1面(1d面)上遺物出土状況	
1. I区1面下トレンチ(下層・北から)		4. II区1面(1e面)上遺物出土状況	

5. I区1面(1f面)上遺物出土状況	7. II区1面下トレンチ(下層・南東から)
6. I区1面(1f面・西から)	図版5…………… 91
7. I区1面(1f面・北から)	1. II区I面下の堆積土(西から)
図版4…………… 90	2. II区北壁の堆積土(南から)
1. II区1面(1f面)遺構掘削後(北から)	3. II区I面下の堆積土(東から)
2. II区1面(1f面)遺構掘削後(東から)	4. II区I面下トレンチ(最下層・北から)
3. II区1面(1f面)上遺物出土状況	5. II区1面下の堆積土(南から)
4. II区1面下トレンチ(上層・北から)	6. II区1面下最下層(22・23層)遺物出土状況
5. II区1面下トレンチ(下層・北から)	図版6 出土遺物…………… 92
6. II区1面下トレンチ(下層・北から)	

第一章 遺跡の位置と歴史的環境

名越ヶ谷遺跡 (No.231) は鎌倉市の南東部に位置し、県道鎌倉・葉山線の北東側、逆川流域の奥深い谷戸内低地に占地し、東西 1km、南北 800 m の広がりを持つ。東方の国指定史跡「名越切通し」方面へ抜ける東西筋を主谷とし、遺跡南西端の県道に接する付近で市街の沖積平野に開けている。主谷からは大小の支谷が樹枝状に延び、主なものには松葉ヶ谷・山王ヶ谷・花ヶ谷といった名が付されている。

今回の調査地点は、県道から 700 m ほど東に入った逆川右岸 (北岸) の小支谷開口部に立地している。河岸の市道からは一段高い造成平場となっており、現地表面の標高は約 17.2 m を測る。

本遺跡地では現在までに 27 地点で発掘調査が実施されている。主谷の開口部付近に集中しているが、個人住宅の建設に伴う調査が大半であり、まとまった面積の調査例は少ない。安国論寺の北、松葉ヶ谷の開口部では老人保健施設の建設に伴って 1056㎡ が調査され、13 世紀～14 世紀代の遺構面 3 枚が確認されている。最下層の第 3 面では両岸に柱穴を伴う東西溝が調査区を横断し、その両岸に多数の掘立柱建物・ピットが重複して分布している。13 世紀前半～後半に位置付けられ、3 面の中でも 3 時期以上の遺構変遷が捉えられている。続く 2 面でも調査区を横断する東西溝が延び、併走する道路の南側溝と報告されている。道路・溝を挟んで礎石建物や掘立柱建物、井戸といった遺構が整然と分布している。調査区の北東部では門遺構から玉砂利敷きの通路が北に向かい、その東側には囲炉裏や専用井戸を併設する小規模な土台建物を取り付き、台所的機能が考えられている。また、213cm (7 尺) 間隔で十字の指示線を刻んだ礎石建物は類例が少なく、当時の土木・建築工法を知る上で貴重な情報をもたらした。出土品には輸入陶磁器に優品が目立ち、こうした遺構・遺物の様相から、武家屋敷または寺院であった可能性が指摘されている。2 面の年代は、13 世紀後半～14 世紀中頃とされている (滝澤・宮田 2003)。

今回の調査地近くでは、図 1 - 地点 2・3 で個人住宅の建設に伴い 21㎡ と 28㎡ の調査が実施されている。地点 2 では中世で 4 枚の遺構面が確認されており、遺物様相から 13 世紀中葉～14 世紀初頭の年代幅で変遷を遂げたようである。出土かわらけの約半数を手づくね成形品が占めている点は、次章以降で報告するように本地点より早い段階で土地利用が進んだことを想起させる。(汐見・小泉 2004)。本地点の 100 m 西にあたる地点 4 では 182㎡ が調査され、5 枚の中世遺構面が検出されている。このうち 13 世紀後半～14 世紀初頭の第 3・4 面では直交する 2 条の土塁が順次築成され、これらで遮蔽された区画内に塀や掘立柱建物、石組み炉が段階的に営まれていた。第 3 面では混貝砂を敷いた整地面と掘立柱建物が伴い、輸入陶磁器や古瀬戸の優品に加え銅製水滴など希少品の出土から、武家屋敷または寺院であった可能性が高いとされている (宗臺・遠藤 1998)。

遺跡名称は異なるが、本地点の北側尾根を越えた大町釈迦堂口遺跡 (No.235) では遺跡保護を念頭に置いた確認調査が、300㎡ を対象として実施されている。谷戸奥の平場は 13 世紀後半に大規模な造成が行われ、寺院に加え、やぐら・茶毘所を伴う宗教空間としての谷戸利用の形跡が良好に遺存していることが確認された。なお、この調査報告書では名越ヶ谷周辺の沿革や発掘調査成果が端的に整理されており、参考となる (図 1- 地点 6、永田・福田 2009)。

点在する断片的な調査例を有機的に結び付けることは難しいが、名越ヶ谷における中世の土地利用は、13 世紀前半に谷戸の開口部で先行して始まり、遅れて 13 世紀中葉～後半には谷戸奥に拡大・進展して行った様子が判明しつつある。

【参考文献は第五章末 (86 頁) に掲載】

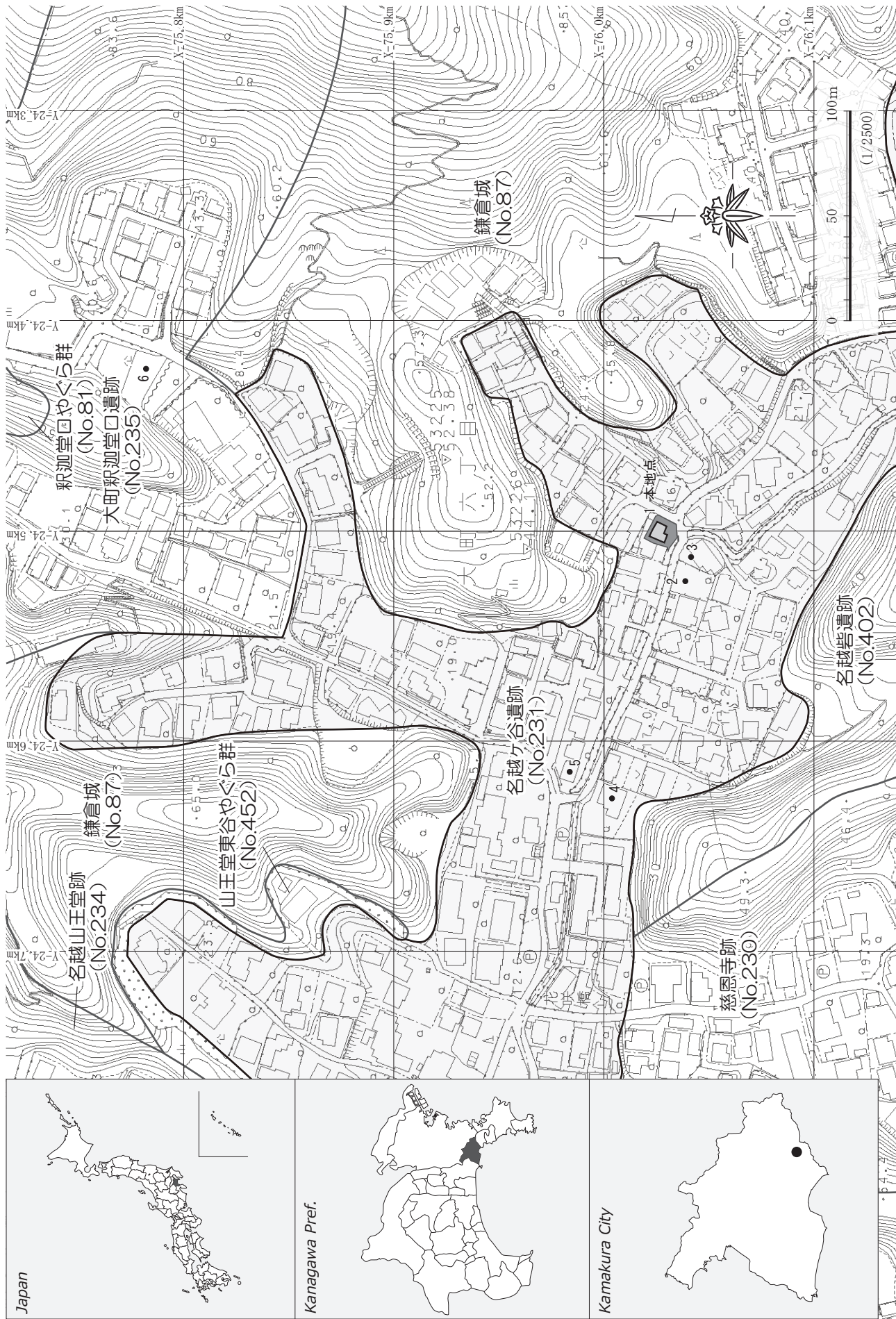


図1 調査地点位置図（鎌倉市発行 1：2,500 都市計画基本図を使用）

第二章 調査の方法と経過

第1節 調査に至る経緯

本発掘調査は個人専用住宅の建設に伴う事前調査として、鎌倉市教育委員会（市教委）が実施した。建築計画では基礎工事として現地表下 6.9 m までの柱状改良を施すことから、市教委は平成 23 年 4 月 12・13 日の二日間にわたり埋蔵文化財の確認調査を実施した。この結果、地表下約 116cm の表土層直下で中世の遺物包含層が、地表下 130cm では泥岩粒を多用した整地層が確認され、この上面が遺構面と判断された。また、地表下 198cm まで掘削した結果、この深さまでに 4 枚の遺構面が広がることが想定された。以上の調査結果を受け、建築計画の実施に先立っては本格的な発掘調査を実施する必要があるとの判断に至った。

その後、市教委と施工主との調整・書類手続きを経て、平成 25 年 4 月 15 日～5 月 31 日の 2 ヶ月半をかけて現地での発掘調査を行った。

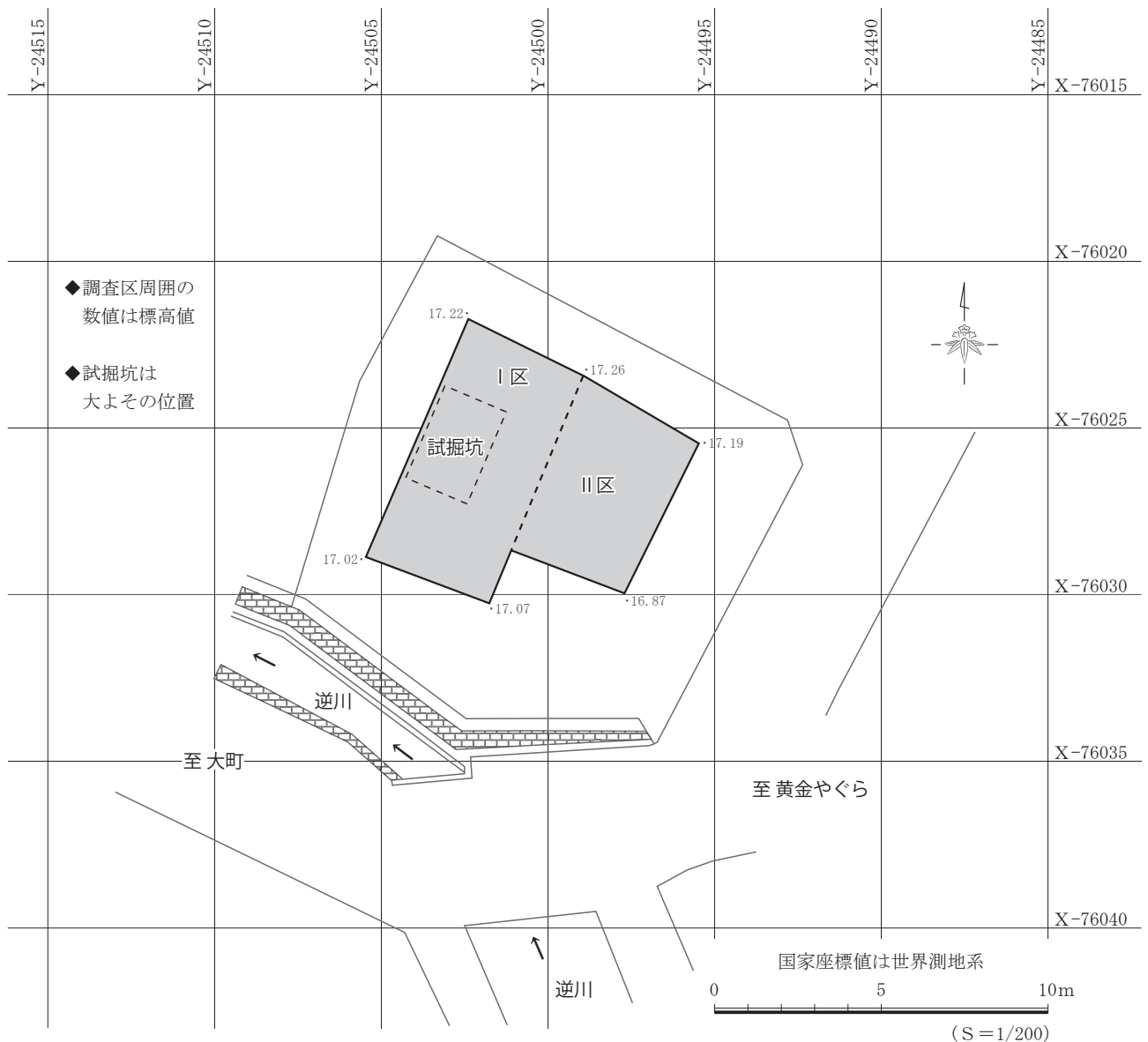


図2 調査区配置図

第2節 調査の方法

掘削に伴う発生土置場を確保する必要から、40.7㎡の調査範囲を二分割して調査を進めた（図2）。表土の除去は重機によって行い、西半のⅠ区の調査を終えた後、Ⅰ区の埋め戻しおよびⅡ区の表土掘削を行った。Ⅰ・Ⅱ区とも表土除去後は全て人力によって掘削し、順次下層への掘り下げと遺構掘削、および写真撮影・測量図作成といった記録作業を進めた。測量に当たっては国家座標系に基づく基準軸を用い、主として光波測距儀で読んだ座標値を方眼紙にプロットする方法で平面図の作図に当たった。国家座標値は、市道上に打設された鎌倉市4級基準点（I027）と同（I026）の2点間関係を起点とし、開放トラバース法によって調査敷地内まで移動した。移動に先立ち、国土地理院のホームページ上で公開されている座標変換ソフト「Web版TKY2JGD」を利用して上記2点の座標値を旧測地系から新測地系（世界測地系）に変換した。標高については、鎌倉市3級基準点「53229」（標高11.168 m）を起点とし、直接水準測量を往復で行って敷地内の基準杭に移設した。4級・3級基準点とも平成23年3月11日の東日本大震災発生以前の座標データであり、これらを起点に移設した座標値も震災後の地殻変動に対応した補正值とはなっていない。

第3節 調査の経過

前述のとおり、調査はⅠ区からⅡ区の順に進めた。Ⅰ区の表土掘削は平成25年4月15日に実施し、翌日には調査用具を搬入して本格的に調査に着手した。本地点では、中世の遺構面は調査区の北壁際で部分的に検出されたに過ぎない。調査区の南側2/3は逆川に向けて落ち込む斜面となっており、ここを泥岩ブロックで埋め立てて現在（調査前）の平場が造成されていた。こうした現代の造成土を除去することに作業時間の多くを費やすことになったが、わずかに残された中世遺構面と、その下位に堆積した古墳時代の遺物包含層の掘削・記録作業を順次進めていった。5月14日にはⅠ区の埋め戻しとⅡ区の表土掘削を行い、その後はⅠ区と同様の作業を進めて5月27日にはひと通りの記録作業を終えることができた。この後、5月31日には調査用具を撤収して、現地での調査工程を全て終了した。

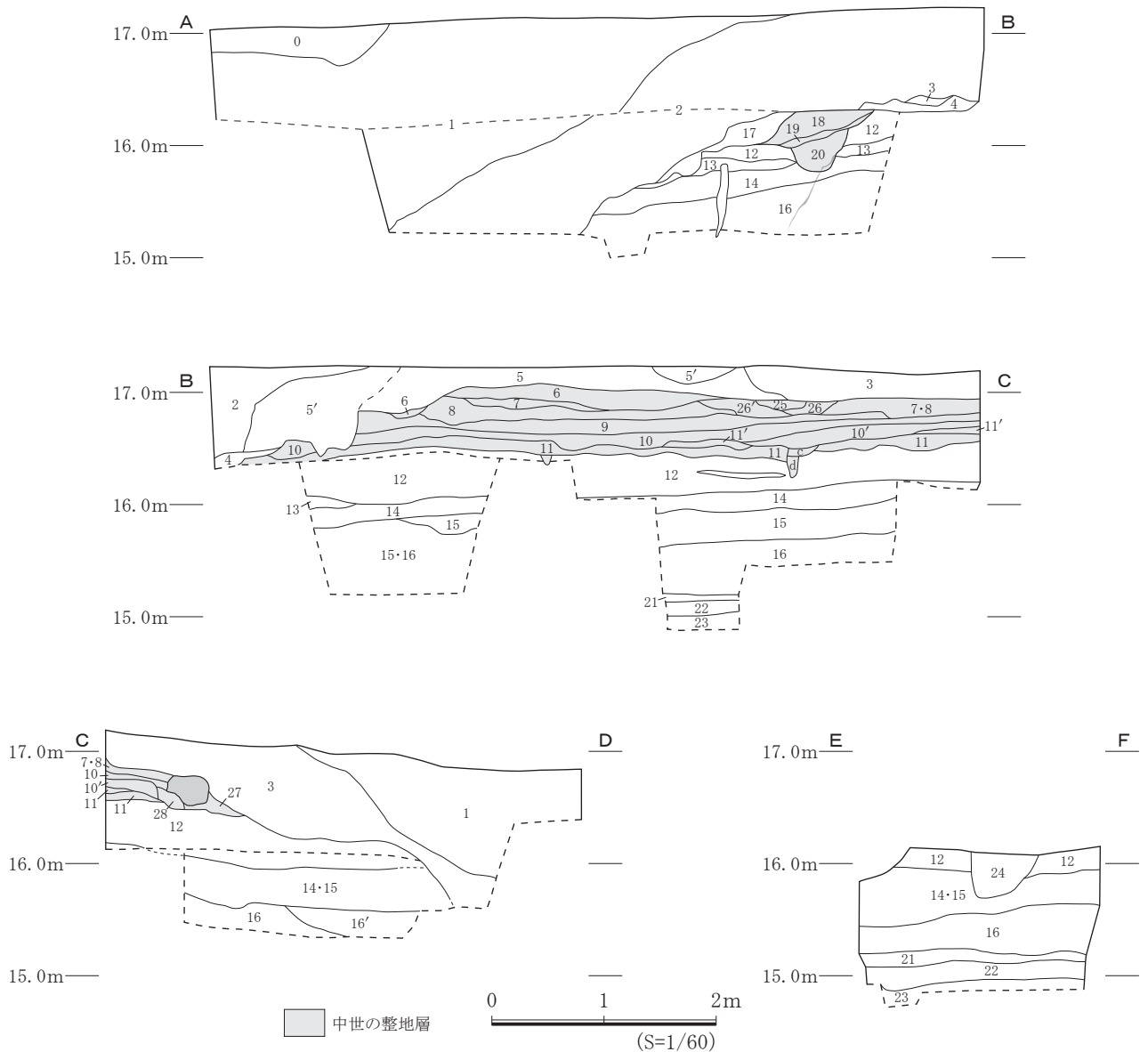
出土品および記録類の整理作業は平成27年度の後半に、報告書の執筆・編集作業は28年度の前半に、鎌倉市教育委員会文化財課分室において行った。

第三章 基本土層

本地点は、丘陵の裾部に近い斜面地に立地している。現状では逆川を南に見下ろす平場となっており、北側は緩やかな斜面が続いて隣地に至る。現地表面の標高は17 m強を測り、南側がわずかに低い。

前述したように、本地点では中世面の検出範囲が非常に狭く、調査区南側の大部分は現代に埋め立てられた斜面地となっていた。図3の1・2層が埋め立て土である。これより下位の3層は近世耕作土と呼ばれることの多い、色味の明るい砂質土層で、これらが堆積していく過程で中世の遺構面が失われたようである。人為的な土地改変もあったろうが、斜面という地形の特質上、大雨や地震に伴う自然崩落も度々発生していたことと想像する。

中世層は、最も高いところでは地表下15cmの標高17.1 m前後で検出された。上述した崩落の可能性なども加味すると、本来の中世層は、現況よりも高いレベルまで堆積していたと推測できる。図3では調査区北壁（B-C）の6層以下が中世層と判断された。6～10層は泥岩粒・ブロックが主体土で、版築状の堆積様相を見せていた。Ⅰ区では遺存範囲が狭いこともあり重機で掘り崩してしまったため、



- | | | |
|-----|--------|---------------------------------------|
| 0 | 黒褐色土 | 現代客土。 |
| 1 | 泥岩ブロック | 人頭大の泥岩ブロックによる埋め立て土。 |
| 2 | 明灰褐色土 | 埋め立て土。コンクリート片混入。 |
| 3 | 明灰褐色土 | 泥岩粒混入。 |
| 4 | 泥岩ブロック | 泥岩ブロック主体で、3層土混入。 |
| 5 | 暗褐色土 | 泥岩粒、炭粒多い。 |
| 6 | 灰褐色土 | 拳大の泥岩ブロック多い。 |
| 7 | 灰褐色土 | 6層より泥岩が密に入る。 |
| 8 | 灰黄褐色土 | 1~3cm大の泥岩粒が密に入る。整地層。 |
| 9 | 灰褐色土 | 泥岩ブロック主体。 |
| 10 | 灰褐色土 | 1cm以下の泥岩粒多い。整地層。 |
| 10' | 灰褐色土 | 泥岩粒多い。整地層。 |
| 11 | 暗褐色土 | 粘質土がベース。1~3cmの泥岩粒多い。炭粒少量。 |
| 11' | 暗褐色土 | 粘質土がベース。 |
| 12 | 黒褐色土 | 粘質土。1cm以下の泥岩粒少量。中世遺物微量。 |
| 13 | 黒褐色土 | 粘質土。1cm以下の泥岩粒ごく微量。 |
| 14 | 黒褐色土 | 粘質土がベースでやや砂質感あり。1cm以下の泥岩粒少量。 |
| 15 | 黒褐色土 | 14層より砂質感が強い。1cm大の泥岩粒微量。 |
| 16 | 黒色土 | 上端面が酸化・硬化。1cm大の泥岩粒ごく微量。
古代以前の遺物包含層 |
| 17 | 明灰黄褐色土 | 1~2cmの泥岩粒多い。縮まりあり。 |
| 18 | 黒褐色土 | 12層土がベース。泥岩粒やや多い。 |
| 19 | 黒灰色土 | 粘質土。上端面が酸化・硬化。泥岩の細粒多い。 |
| 20 | 黒褐色土 | 12層土がベースで、やや粗粒の泥岩粒多い。 |
| 21 | 暗青灰色土 | 砂質土。古墳時代の土器片が集中。 |
| 22 | 黒灰色土 | 粘質土。無遺物層。 |
| 23 | 灰色土 | 粘質土。シルト質。無遺物層。 |
| 24 | 灰色土 | 粘質土。泥岩粒混入。 |
| 25 | 黒褐色土 | 炭粒多い。縮まり弱い。 |
| 26 | 黒褐色土 | 炭粒、泥岩粒少量。 |
| 27 | 黒褐色土 | 泥岩粒少量。 |
| 28 | 褐色砂 | |

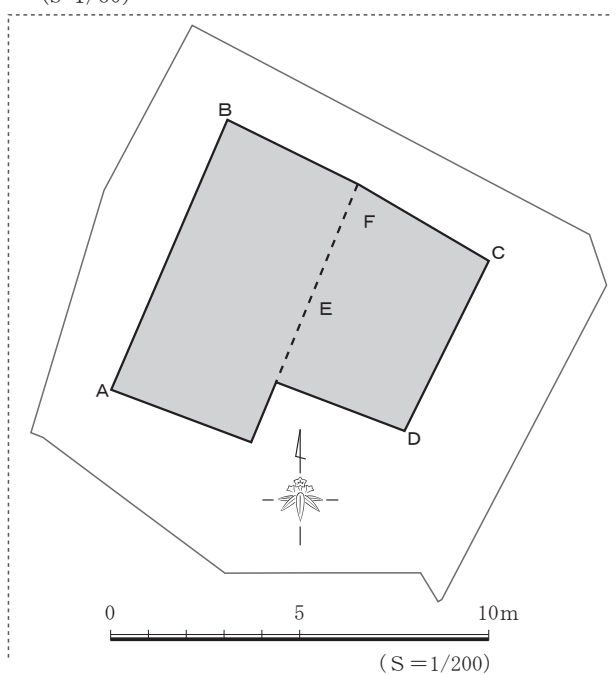


図3 調査区壁断面図

断面のみの確認となった。Ⅱ区では6層の検出後、1層ごとに掘り下げながら各上面を遺構面と考え、平面図他の記録を取った。11層以下は粘質土がベースとなり、12層までは確実に中世遺物を包含していた。12層上面となる標高16.5m付近では調査区北辺に平行または直交方向に延びる浅い溝状遺構や小ピットが検出され、ここを1f面とした。これより上位の層序には明らかに人工と見なせる整地層が多くあり、各層の上面を1a～1e面として一枚ずつ記録を取ったが、いずれの面でも明確な掘り込みは確認できなかった。また、6層上面の一部(1c面)や11層上面(1e面)では炭化物の広がりを検出し、後者の面上ではロクロかわらけの完形品が正位で出土するなど、人為的活動の痕跡と見なし得る状況も散見されたが、生活面と認めるには決めるに欠けることから、本報告では1f面のみを生活面と捉えることとした(図4)。6～11層については、各々を生活面と理解する他(9・10層の上面は面としての記録を残していない)、版築を施した土塁といった見方もできるが、確証となるだけ情報は得ていない。

中世層の記録を取り終えた後、Ⅰ・Ⅱ区ともに12層以下の土層確認を目的とする2m幅のトレンチを設定、掘削した。13～15層はほぼ無遺物層となるも、12層とは層相に顕著な差は見られなかった。16層は黒色味が増し、14・15層との層界が褐鉄化していた。古墳時代の遺物包含層で局所的に土器の集中する箇所が見られたものの、遺構の検出には至らなかった。最深部では標高14.75mまで掘り下げ、16層以下の堆積状況を記録して調査を終えた。

第四章 発見された遺構と遺物

第1節 中世の遺構と遺物(図4)

前述のように、確実に中世の遺構面といえるのは1枚のみと考えた。

中世1面(1f面)は標高16.35～16.5mで検出され、南に向けわずかに低くなっていた。ここでは小規模な溝状遺構とピット数基が検出されたが、検出範囲が狭いこともあり、遺構の性格については明らかにできなかった。溝状遺構はN30°E前後、またはこれに直交する主軸方位を取り、上幅30cm、底幅15cmほどで確認面から10～15cmの深さしか持たない。ピットは直径30～40cmの円形もしくは楕円状の平面形態を取り、確認面からの深さは25cmほどしかなかった。pit1とpit2は溝状遺構と同じ軸線で並ぶ可能性もあるが、検出範囲が限られており不明とせざるを得ない。表1中、1f面に「泥岩プラン」とあるのは溝状遺構やピットの埋土全体を指し、個別遺構への帰属ができなかった遺物が多くあることを表している。

Ⅰ区出土の遺物(図5)

中世遺構の確認手順が異なったため、出土遺物はⅠ区とⅡ区とに分けて図示した。

Ⅰ区では、1～6と9が1面(1f面)の確認までに出土した遺物となる。9の青磁碗は図3-9層から出土。白磁口禿皿や常滑の片口鉢Ⅱ類があり、これらの消費時期に1面が覆われたことを示す。7は1面直上から、8～10は溝状遺構1から出土した。いずれもロクロかわらけの小皿で、広い底部から直線的に外方へ開く体部を持つ。12・13は1面下の掘り下げ時に出土した手づくねかわらけ。概ね12層からの出土と見ている。

14・15は16層から出土した。14は古墳時代終末期～奈良時代初頭の土師器坏、15は古墳前期～中期の土師器埴。

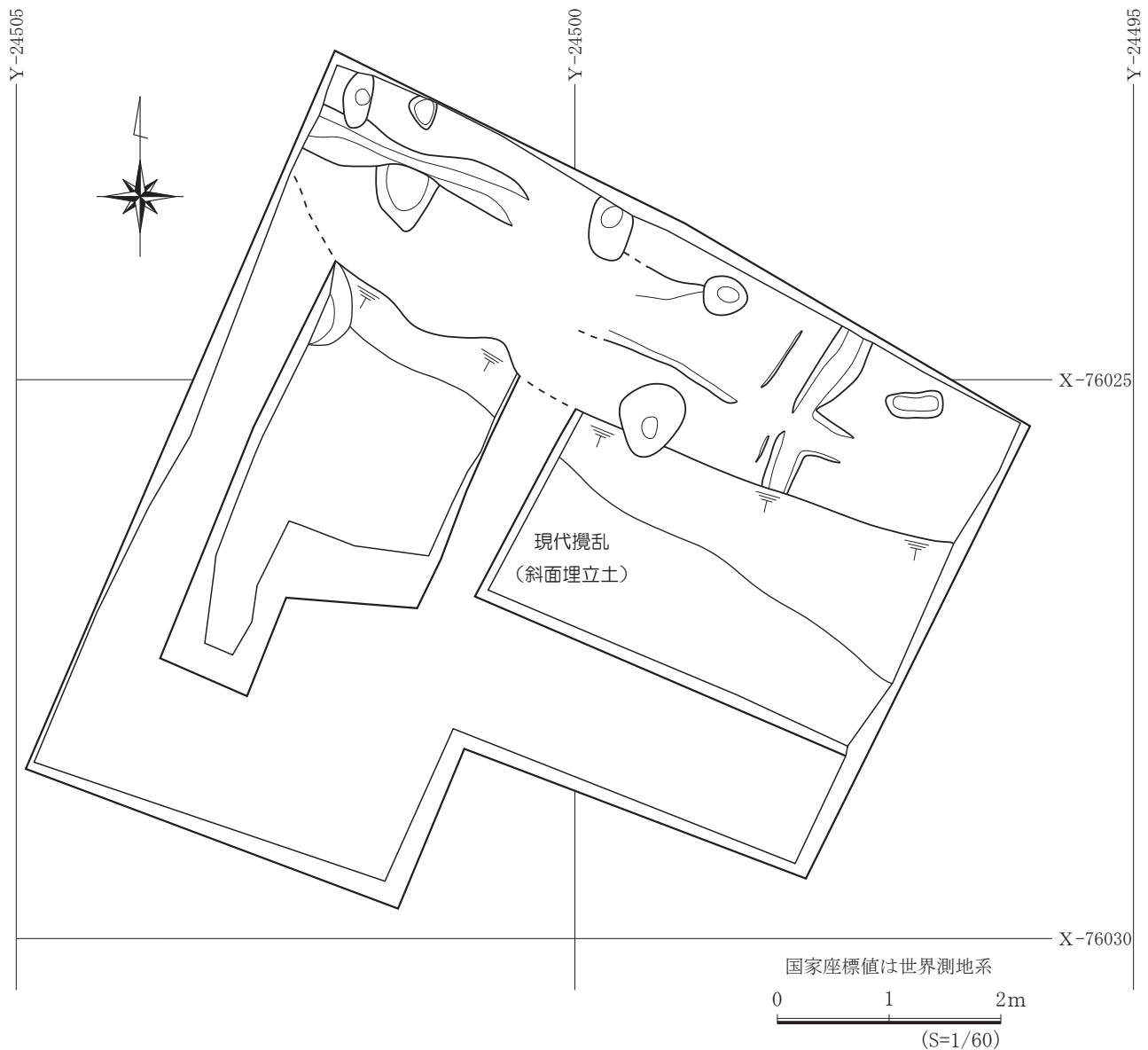


図4 1面（現地1f面）全体図

II区出土の遺物（図6）

II区では層位ごとに遺物を取り上げることができたので、現地での遺構面名称（層序番号）に分けて図示した。16～18は1a面下（5層相当）から出土。いずれもロクロかわらけ小皿。1b面下（6層相当）では、図示できる出土遺物はなかった。19～23は1c面下（7～10層相当）出土。9・10層とも整地層と見なせるので、各々を生活面と考えれば、2段階以上の遺物が含まれていることになる。ロクロかわらけが主体となる。25は1d面の面上から、26～29は1d面下（10層相当）から出土。30は1e面上、31～38は1e面下（11層相当）から出土した。39～41は1f面の面上で出土したロクロかわらけ小皿で、I区1面（1f面）の資料と比べて体部の外傾具合が弱い。42・43は1f面の遺構埋土中から出土した。

44～46は1f面下（12層相当）から出土。表1では「1-2」（＝1面下～2面）とした、1f面の下位において手づくねかわらけの出土量が多いことが分かり、12層を挟んで遺物の構成・様相が大きく変化する状況が読み取れる。

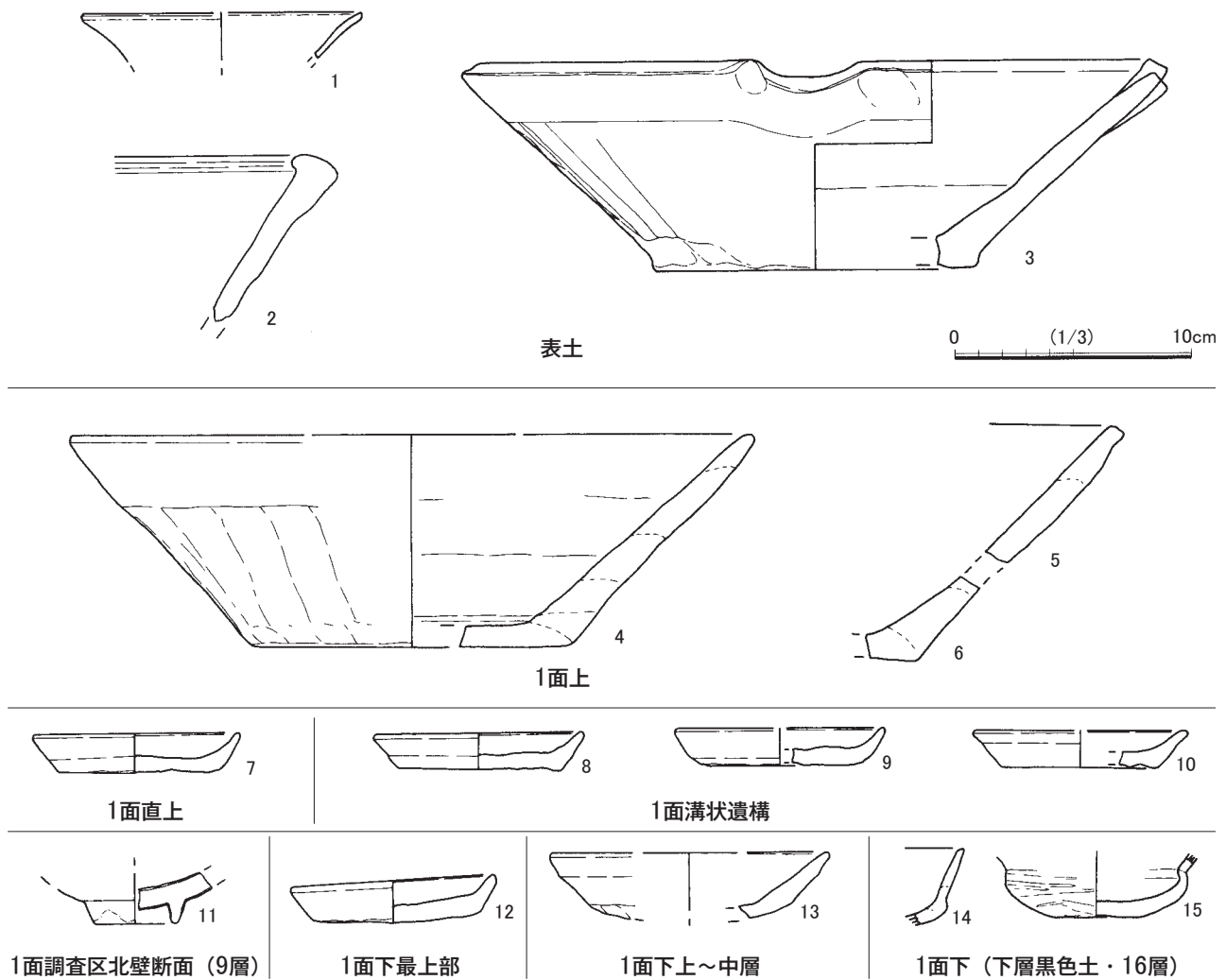


図5 I区の出土遺物

47～58は12層以下で出土した、古代以前の遺物。47～50・53は16層と21層から出土している。小片ばかりで、全体の器形を復元し得た個体は47の小型鉢形土器1点のみであった。弥生時代終末～古墳時代初頭の土器が主体となっている。表1が示すように、掘り下げ時でも上位の層序では須恵器や土師器の相模型坏・甕といった古墳後期～律令期の遺物が出土している。前章で述べたように、これら古代以前の遺物に伴う時期の遺構は検出されていない。

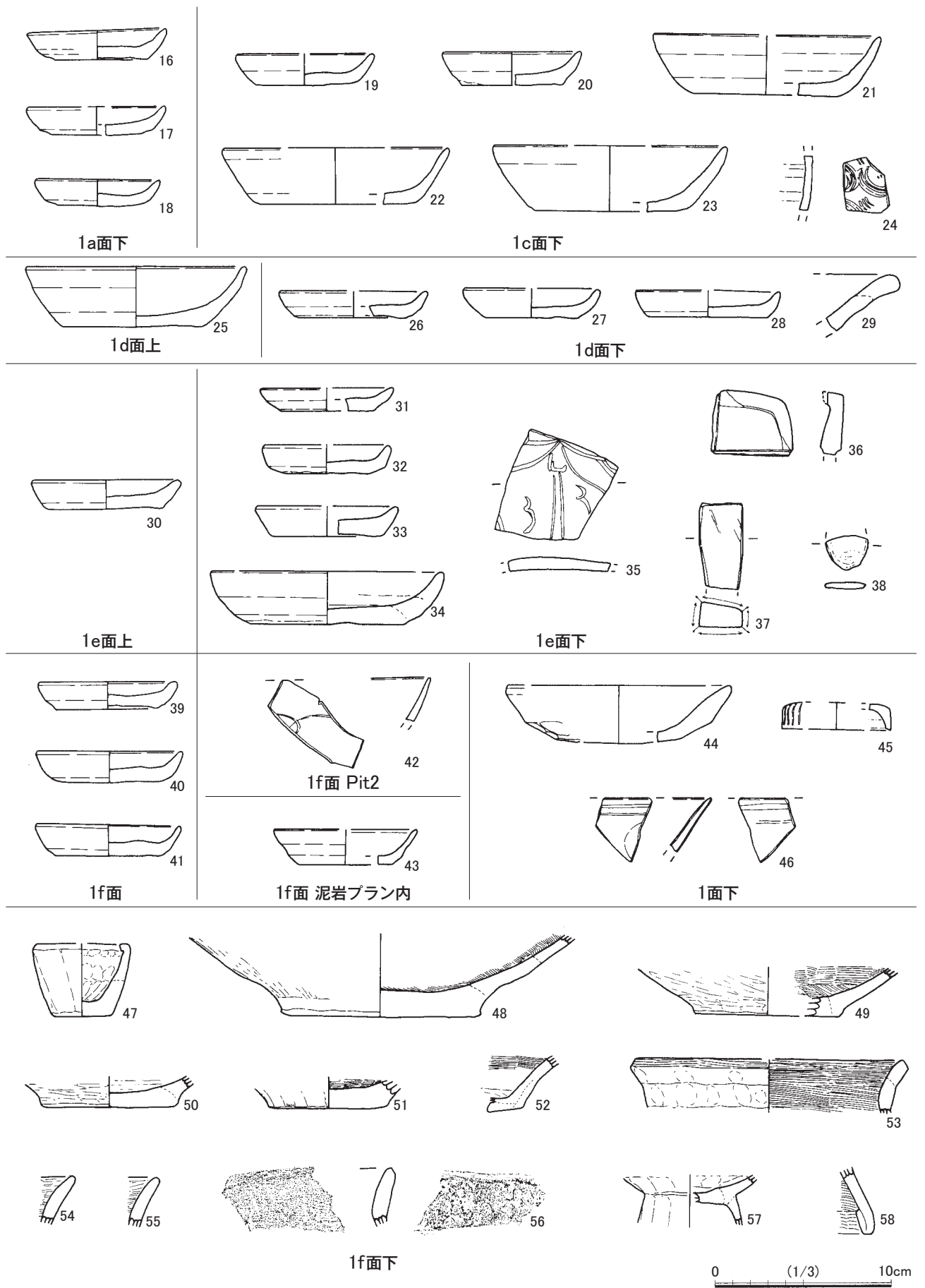


図6 II区の出土遺物

表 1 出土遺物カウント・計量表

面	遺構	かわらけ				白かわらけ		白磁		青白磁				青磁 (龍泉窯系)			
		ロクロ		手づくね		ロクロ	手づくね	口禿皿	碗皿	梅瓶	碗	合子蓋	劃花文碗	蓮弁文碗	碗・皿	壺類	
		大	小	大	小	大	小										
表土		91	810	24	125	1	5	1	9			1	6				
1	攪乱	10	67	4	17												
1a-1b		40	301	19	173	1	6	1									
1b-1c		2	10	5	14												
1c-1d		173	1654	70	458	2	15			1	6						
1d	遺構外	1	184														
1d-1e		26	279	18	158	2	56										
1e	遺構外			1	66												
1e-1f		50	582	16	140	3	36		1	2							
	溝1	8	186	11	182	2	29	2	19								
	pit1	5	22	6	17												
	pit2	2	40	2	5					1	3						
1f	泥岩ブランク	27	225	9	53	2	56	2									
	遺構外	38	392	17	309	1	10										
1-2		20	186	10	44	55	505	34				1	5	1	6	1	7
2-3																	
2-地山																	

面	遺構	瀬戸				尾張・常滑				渥美・湖西		瓦質土器		瓦		鉄滓					
		船載陶器	瓶類	入子	天目碗	壺	山茶碗	片口鉢	甕	東濃	渥美・湖西	瓦質土器	瓦	鉄滓	鉄滓						
		緑釉盤	卸皿	天目碗	入子	瓶類	壺	山茶碗	片口鉢	甕	東濃	渥美・湖西	瓦質土器	瓦	鉄滓	鉄滓					
表土			1	4	1	21	1	1	3	28	12	367	1	301	3	109	3	213	2	77	
1	攪乱										2	218	1	9							
1a-1b													1	62							
1b-1c																					
1c-1d																					
1d	遺構外																				
1d-1e																					
1e	遺構外																				
1e-1f		1	33								2	58	2	24				1	12	1	3
	溝1																				
	pit1																				
	pit2																				
1f	泥岩ブランク										1	48									
	遺構外										3	117									
1-2		1	4								8	525									
2-3																					
2-地山																					

面	遺構	石製品			土師器				須恵器			土器 (古式土師器)		
		滑石鍋	硯	砥石	有稜坏	相模型坏	坏	相模型甗	鉢	壺	坏	壺	甗	鉢
		点数	重量											
表土														
1	攪乱													
1a-1b														
1b-1c														
1c-1d								1	17					
1d	遺構外													
1d-1e		1	13											
1e	遺構外													
1e-1f		1	32	1	28									
	溝1													
	pit1													
	pit2													
1f	泥岩プラン													
	遺構外													
1-2					2	10	4	37	2	6	9	34	2	14
2-3							2	18			2	8		
2-地山											1	8		
											9	38	19	115
											25	755	13	115
											76	939	101	1296
														1
														57

点数 = 破片数
重量単位 = g

凡例
「1-2」は中世1面(1f面)以下、12~15層に相当。
「2-3」・「2-地山」はともに16層以下に相当。「2-3」の方が上位の層に限定できる。
「泥岩プラン」は溝状遺構やピットの埋土全体を指す。

表2 出土遺物観察表

遺物番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
I 区の出土遺物 (図5)						
1	磁器	白磁 口禿皿	(11.8)	—	[2.0]	口1/6 大宰府IX類
2	瓦質土器	火鉢	—	—	[7.0]	口小片 胎土:礫粒、赤色砂粒 器表黒褐色 河野IC類
3	陶器	常滑 片口鉢II類	(28.0)	(14.0)	8.8	1/4弱 胎土:礫粒 灰色 6型式頃
4	陶器	常滑 片口鉢II類	(28.8)	(13.6)	9.0	1/5 胎土:白色礫 橙褐色 5~6型式
5・6	陶器	常滑 片口鉢II類	—	—	—	口・底小片 胎土:長石粒 暗灰色 5~6型式
7	土器	ロクロ かわらけ・小	8.8	7.0	1.7	略完形 67g 胎土:白色針状物質、角閃石、赤色砂粒 橙色 外底面に板状圧痕
8	土器	ロクロ かわらけ・小	8.8	6.9	1.5	4/5 [59]g 胎土:白色針状物質、角閃石、赤色砂粒 橙色 外底面に板状圧痕
9	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.8)	(6.4)	1.6	1/6 胎土:白色針状物質、角閃石、赤色砂粒 黄橙色 外底面に板状圧痕
10	土器	ロクロ かわらけ・小	(9.0)	(6.7)	1.6	1/6 胎土:白色針状物質、角閃石、赤色砂粒 黄橙色 外底面に板状圧痕
11	磁器	龍泉窯系青磁 碗	—	3.6	[2.2]	底のみ 大宰府III-1B類か
12	土器	手づくね かわらけ・小	8.6	—	1.8	4/5 [67]g 胎土:白色針状物質、角閃石、赤色砂粒 黄橙色 外底面に板状圧痕
12	土器	手づくね かわらけ・大	(11.8)	—	[2.8]	1/6 胎土:白色針状物質、角閃石 黄橙色 外底面に板状圧痕
14	土師器	坏	—	—	—	口小片 橙褐色
15	土器	埴	—	2.9	[2.8]	体~底2/3 胎土:白色針状物質、角閃石 灰褐色/赤褐色 (内外面赤彩)
II 区の出土遺物 (2) (図6)						
16	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	5.3	1.7	完形 51g 胎土:白色針状物質、角閃石、赤色砂粒 橙色 外底面に板状圧痕
17	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(5.2)	1.6	1/5 胎土:白色針状物質、角閃石、赤色砂粒 橙色 外底面に板状圧痕
18	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.0)	(4.4)	1.5	1/4 胎土:白色針状物質、角閃石、赤色砂粒 橙色 外底面に板状圧痕
19	土器	ロクロ かわらけ・大	(7.7)	(5.8)	1.8	1/6 胎土:白色針状物質、角閃石、赤色砂粒 黄橙色 外底面に板状圧痕
20	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(5.7)	1.9	1/3 胎土:白色針状物質、角閃石、赤色砂粒 橙色 外底面に板状圧痕
21	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.8)	(8.0)	3.4	1/3 胎土:白色針状物質、角閃石、赤色砂粒 橙色 外底面に板状圧痕
22	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.8)	(8.8)	3.2	1/8 胎土:白色針状物質、角閃石、赤色砂粒 橙色 外底面に板状圧痕
23	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.0)	(8.2)	3.7	1/8 胎土:白色針状物質、角閃石、赤色砂粒 橙色 外底面に板状圧痕
24	磁器	青白磁 梅瓶	—	—	—	胴小片 胎土:黒色粒 青白色
25	土器	ロクロ かわらけ・大	12.3	8.2	3.6	完形 184g 胎土:白色針状物質、角閃石、赤色砂粒 褐色 外底面に板状圧痕
26	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.3)	(6.0)	1.5	1/3 胎土:白色針状物質、角閃石 黄橙色 外底面に板状圧痕
27	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.5)	(5.2)	1.7	1/3 胎土:白色針状物質、角閃石 橙褐色 外底面に板状圧痕
28	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.0)	(6.6)	1.5	1/4 胎土:白色針状物質 橙褐色 外底面に板状圧痕
29	陶器	尾張 片口鉢	—	—	[3.3]	口小片 胎土:長石粒 灰色~灰黒色 (内面にタール付着) 6a型式頃
30	土器	ロクロ かわらけ・小	8.2	6.7	1.6	略完形 [66]g 胎土:白色針状物質、角閃石、赤色砂粒 黄橙色 外底面に板状圧痕
31	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.5)	(5.2)	1.4	1/3 胎土:白色針状物質、角閃石 橙褐色 外底面に板状圧痕
32	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.0)	(4.8)	1.7	1/4 胎土:白色針状物質、角閃石 黄褐色 外底面に板状圧痕
33	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.0)	(6.3)	1.7	1/3 胎土:白色針状物質、角閃石 黄褐色 外底面に板状圧痕
34	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.0)	(8.6)	3.0	1/5 胎土:白色針状物質、角閃石 橙褐色 外底面に板状圧痕
35	舶載陶器	緑釉 盤	—	—	—	底小片 胎土:黒色・白色粗砂粒 灰色/緑褐色 (釉薬銀化) 内底面にへら描き文

遺物 番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
36	石製品	硯	長さ [3.6]	幅 [4.5]	高さ 1.3	頁岩
37	石製品	砥石	長さ [4.8]	幅 2.5	高さ 1.4	中砥 表裏と両側面の4面を使用
38	ガラス	不明	長径 [2.0]	短径 2.4	高さ 0.4	薄青色 表面は光沢がなく、やや白濁
39	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	5.8	1.4	略完形 [55]g 胎土:白色針状物質、角閃石、赤色砂粒 黄橙色 外底面に板状圧痕
40	土器	ロクロ かわらけ・小	8.2	6.0	1.8	3/4 胎土:白色針状物質、角閃石、赤色砂粒 黄橙色 外底面に板状圧痕
41	土器	ロクロ かわらけ・小	8.2	6.0	1.8	完形 胎土:白色針状物質、角閃石、赤色砂粒 橙色 外底面に板状圧痕
42	磁器	龍泉窯系青磁 碗	—	—	[2.5]	口小片 大宰府 I 類か
43	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.0)	(5.3)	2.0	1/6 胎土:白色針状物質、角閃石、赤色砂粒 黄橙色 外底面に板状圧痕
44	土器	手づくね かわらけ・大	(12.6)	—	[3.2]	1/8 胎土:赤色砂粒 黄橙色
45	磁器	青白磁 合子蓋	(6.2)	—	1.5	1/8 胎土:白色 緻密
46	磁器	龍泉窯系青磁 劃花文碗	—	—	—	口小片 大宰府 I-2類か
47	土器	鉢	(5.0)	3.3	4.1	口1/6~底完存 胎土:白色針状物質、角閃石 橙褐色~黒褐色
48	土器	甕	—	11.4	[4.8]	底完存 胎土:白色針状物質、角閃石 褐色~黒褐色 外底面に葉脈?痕
49	土器	壺	—	(8.2)	[2.8]	底1/3 胎土:白色針状物質、角閃石 褐色/赤褐色(外面赤彩) 外底面に木葉痕
50	土器	壺	—	(7.5)	[1.8]	底1/4 胎土:白色針状物質、角閃石 橙褐色
51	土器	壺	—	6.7	[1.7]	底3/4 胎土:微砂質、白色針状物質 淡褐色 外底面ヘラナデ
52	土器	壺	—	—	—	口小片 複合口縁壺か
53	土器	甕	(15.2)	—	[3.0]	口1/4 胎土:白色針状物質、角閃石 にぶい褐色 輪積み甕
54	土器	壺?	—	—	[2.7]	口小片 胎土:白色針状物質、角閃石 桃褐色
55	土器	壺	—	—	—	口小片 胎土:白色針状物質
56	土器	甕	—	—	—	口小片 胎土:白色針状物質、角閃石 にぶい橙褐色
57	土器	台付甕	—	—	[2.9]	脚基部1/4 胎土:角閃石 灰褐色
58	土器	台付甕?	—	—	[3.8]	脚端部小片 胎土:微砂質、緻密 端部は内方へ折り返し成形

第五章 調査成果のまとめ

再三述べているように、本地点は敷地の南側が比較的最近まで斜面となっていた様子で、ここを埋め立てて現況の平場を造成していることが分かった。そのため、中世層以下の遺存範囲も限られており、中世遺構の展開も非常に狭いエリアで把握できたと過ぎない。1面（1f面）では東西に延びる浅い溝状遺構や小穴が検出されたものの、それらの用途・性格を示す情報は得られなかった。出土したかわらけの様相から、13世紀後半の土地利用痕跡と見ている。1f面の上位には版築状を呈する複数枚の整地層を認めたが、これらが各々生活面として利用されていたのか、それとも整地層総体で土塁状の構築物となっていたのかは特定できなかった。各整地層の上面では明確な遺構が見られず、また、間層を挟まずに上位の整地層が覆っている状況から、後者に分があるようにも感じている。いずれにしても、可能性の範囲でしか示すことができない。表土からの出土資料も含め、1面上は13世紀後葉～14世紀前葉の遺物様相を呈しており、古瀬戸製品の増加など、これより下の要素は希薄であった。

第1章でも述べたように、全体として図1-地点2よりもやや後発的な遺物様相といえる。名越ヶ谷における土地利用の進み具合にも濃淡はあった筈で、大掛かりな造成を必要としない平坦地から、次第に谷戸奥や尾根裾の斜面地を切り盛りしながら可住地を増やしていったことが推測できる。

1面（1f面）の下位では遺構は検出されなかったが、1f面の基盤となる12層・黒褐色土からの出土かわらけは手づくね成形品が主体となり、これより上位の遺物様相とは大きく異なっていた。出土量は少ないものの、中世における当地点周辺の土地利用が、13世紀前半に遡る可能性を示している。

中世層より下位では、古代以前の遺物も一定量が出土している。16層以下がこの段階の遺物包含層で、16層では古墳後期～奈良時代の遺物が出土し、さらに下位の21層では弥生時代終末～古墳時代初頭の土器が若干のまとまりをもって出土している。やはり遺構の検出には及ばなかったが、後者の時期には集落が近在していた可能性を示唆する出土状況であった。本地点の北東には狭い開析谷が延びるので、この中でも比較的平坦な箇所を居住域や谷戸田として利用していたのかもしれない。名越ヶ谷遺跡では古代以前の遺物が中世層などに混在する事例がある他（滝澤・宮田2003など）、中世以前のなだらかな落ち込みで土器片錘を含む縄文中期後葉・加曾利E式の土器片や古墳時代以降の土師器片、滑石製剣形模造品などの出土例がある（手塚・野本2002）。現状では谷戸の開口部付近に事例が集中しているが、縄文前期をピークとする海進以降、離水・乾陸化の進んだ地区から土地利用が進んだのであろう。

参考文献

- 宗臺富貴子・遠藤雅一 1998 「名越ヶ谷遺跡（No.231）大町四丁目1736番2外」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14（第1分冊）』鎌倉市教育委員会（図1-地点4）
- 手塚直樹・野本賢二 2002 「名越ヶ谷遺跡（No.231）大町三丁目1826番9地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18（第2分冊）』鎌倉市教育委員会
- 滝澤晶子・宮田 眞 2003 『名越ヶ谷遺跡発掘調査報告書（医療法人財団額田記念会 老健ぬかだ建設にともなう発掘調査）』名越ヶ谷遺跡発掘調査団・有限会社 博通
- 汐見一夫・小泉衣里 2004 「名越ヶ谷遺跡（No.231）大町六丁目1708番4地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書20（第2分冊）』鎌倉市教育委員会（図1-地点2）
- 永田史子・福田 誠 2009 『大町釈迦堂口遺跡発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会（図1-地点6）



1. 調査地近景 (南から)



5. I区1面 (1f面・北から)



2. I区調査風景 (北から)



6. I区1面 (西から)



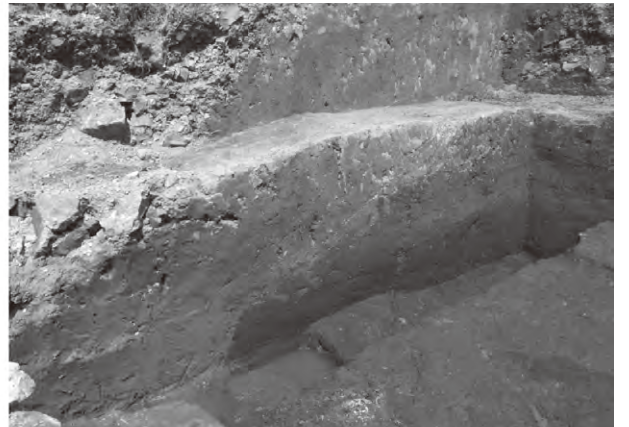
3. I区 中世層検出状況 (北から)



7. I区1面下トレンチ (上層・北から)



4. I区 中世層上の堆積土 (北東から)



8. I区1面下の堆積土 (南東から)

図版2



1. I区1面下トレンチ（下層・北から）



2. I区1面下の堆積層（南から）



3. I区1面上の堆積土（南から）



4. II区1面（1c面・東から）



5. II区1面（1c面・北から）



6. II区1面（1c面）炭検出状況（北から）



7. II区1面（1c面・西から）



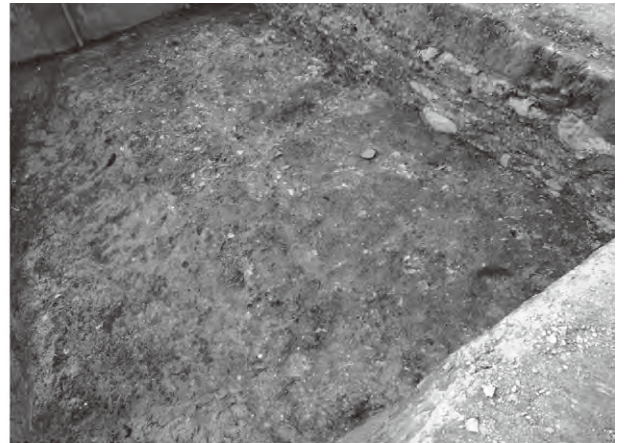
1. II区1面(1c面下部・北から)



5. I区1面(1f面)上遺物出土状況



2. II区1面(1d面・北から)



6. I区1面(1f面・西から)



3. II区1面(1d面)上遺物出土状況



7. I区1面(1f面・北から)



4. II区1面(1e面)上遺物出土状況

図版4



1. II区1面(1f面)遺構掘削後(北から)



5. II区1面下トレンチ(下層・北から)



2. II区1面(1f面)遺構掘削後(東から)



6. II区1面下トレンチ(下層・北から)



3. II区1面(1f面)上遺物出土状況



7. II区1面下トレンチ(下層・南東から)



4. II区1面下トレンチ(上層・北から)



1. II区I面下の堆積土（西から）



4. II区I面下トレンチ（最下層・北から）



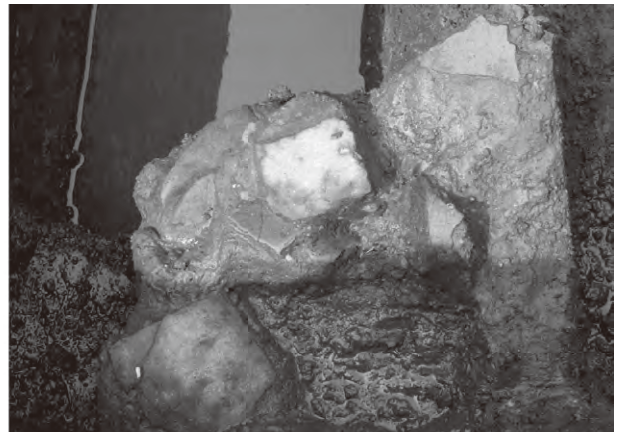
2. II区北壁の堆積土（南から）



5. II区1面下の堆積土（南から）

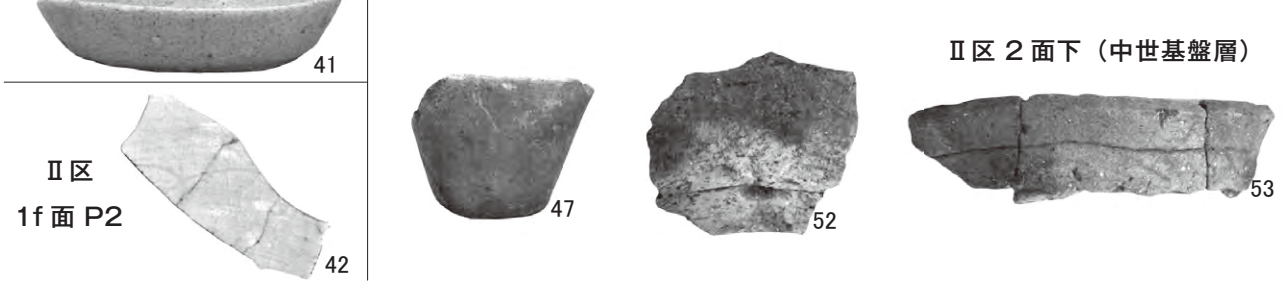
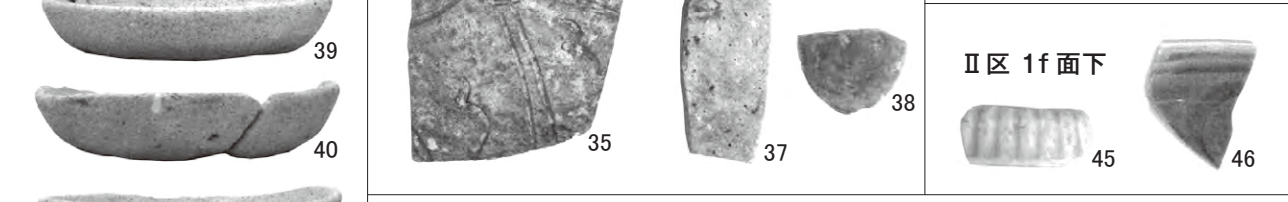
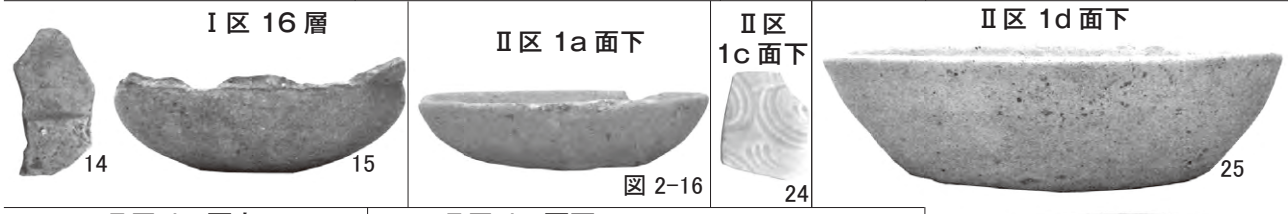
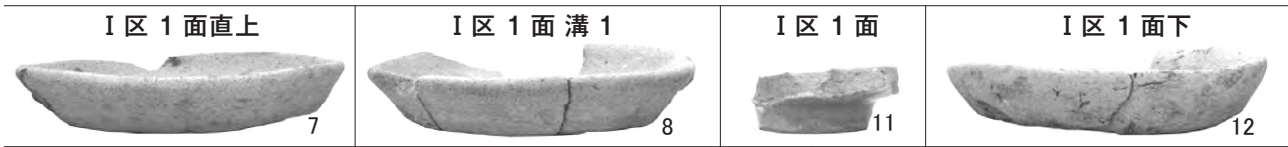
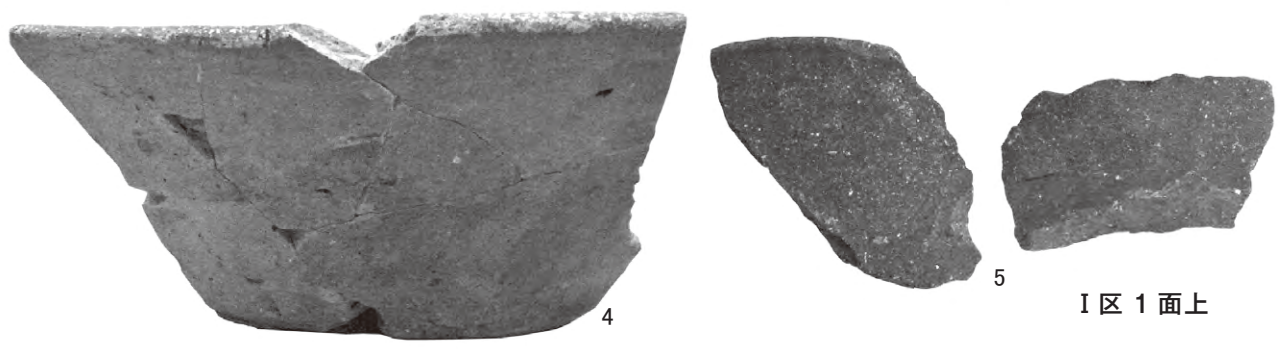
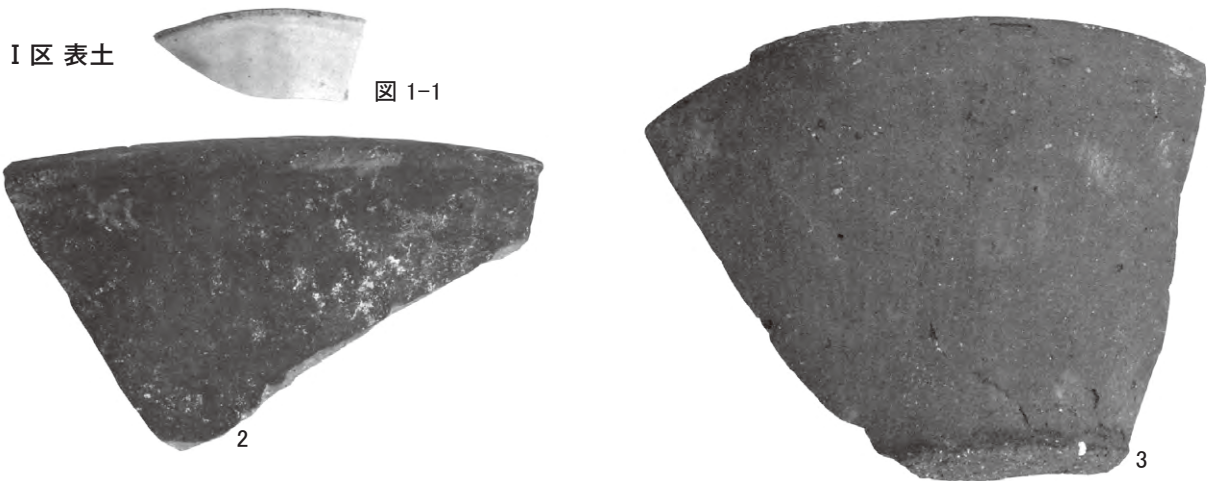


3. II区I面下の堆積土（東から）



6. II区1面下最下層（22・23層）遺物出土状況

图版6



北条小町邸跡 (No.282)

雪ノ下一丁目 403 番 14 地点

例 言

1. 本報告は、鎌倉市大雪ノ下一丁目 403 番 14 において実施した北条小町邸跡（鎌倉市 No.282）の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は平成 25 年 10 月 10 日から同年 12 月 27 日にかけて、個人専用住宅の建設に伴う国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査の対象面積は、45.4㎡である。
3. 発掘調査体制は、以下のとおりである。
主任調査員 押木弘己（鎌倉市文化財課 臨時的任用職員）
調査員 吉田桂子、小野夏菜、本城 裕（鎌倉市文化財課 臨時的任用職員）
作業員 安達越郎、伴 一明、石黒 清、永野幹晴、三橋幸雄、久島忠敬、石田光久
（公益社団法人 鎌倉市シルバー人材センター）
整理作業参加者 押木弘己、吉田桂子（鎌倉市文化財課 臨時的任用職員）
天野隆男、串田健一、倉澤六郎、渡辺輝彦、宮崎 明、高橋こう子、高山譲二、
松岡信喜（公益社団法人 鎌倉市シルバー人材センター）
4. 本報告の執筆と編集は、押木が行った。
5. 本報告で使用した写真は、現地・出土遺物とも押木が撮影した。
6. 本調査に係わる出土遺物および各種記録類は、鎌倉市教育委員会が保管している。本調査地の略称は市教育委員会の統一基準に従って「H J K 1 3 0 4」とし、出土品への注記などに使用した。

凡 例

1. 挿図の縮尺は、遺構・遺物ともに図中に表示している。
2. 本書中に記載した国土座標値は、世界測地系（第IX系:東日本大震災後の補正後）に基づいている。
3. 挿図に示した方位標は座標北（Y軸）で、真北はこれより 0° 09' 25"ほど東に振れている。
4. 遺構挿図中の水系高は、海拔値を示す。
5. 出土遺物の年代観は以下の文献を参考としたが、筆者が各所見を理解し切れていない部分もある。
 - ◆かわらけ・遺物全体の様相：宗臺秀明 2005「中世鎌倉の土器・陶磁器」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～資料集』
 - ◆輸入陶磁器：太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡X V—陶磁器分類編一』
 - ◆瀬戸窯製品：藤澤良祐 2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院
 - ◆常滑・渥美窯製品：愛知県 2012『愛知県史』別編窯業3 中世・近世常滑系

目 次

第一章 遺跡の位置と歴史的環境	97
第二章 調査の方法と経過	99
第1節 調査に至る経緯	
第2節 調査の方法	
第3節 調査の経過	
第三章 基本土層	100
第四章 発見された遺構と遺物	106
第1節 中世上層の遺構と遺物	
第2節 中世下層の遺構と遺物	
第3節 中世層基盤層下の確認調査	
第五章 調査成果のまとめ	120

挿図目次

図1 若宮大路幕府旧蹟碑と「北条小町邸跡」の変遷	97	図9 中世下層遺構面全体図	110
図2 調査地の位置	98	図10 中世下層遺構面 検出遺構 個別図	111
図3 調査区配置図	99	図11 中世基盤層下全体図	115
図4 調査区セクション図①	101	図12 出土遺物 (1)	116
図5 調査区セクション図②	103	図13 出土遺物 (2)	117
図6 調査区セクション図③	105	図14 出土遺物 (3)	118
図7 中世上層遺構面全体図	107	図15 出土遺物 (4)	119
図8 中世上層 遺構 81 (カマド状遺構)	108	図16 周辺調査地点合成図	121

表 目 次

表1 出土遺物カウント表	122	表2 出土遺物観察表	137
--------------	-----	------------	-----

写真図版目次

図版1	4. I区 表土除去後 (南から)
1. 調査区設定状況 (南東から)	5. II区 上層検出状況 (南から)
2. 調査区設定状況 (北西から)	6. I区 上層検出状況 (南から)
3. II区 表土除去後 (南から)	

図版 2

1. I 区 上層検出状況（北から）
2. I 区 上層 作業状況（北東から）
3. II 区 上層全景①（南から）
4. I 区 上層全景①（北から）
5. II 区 上層全景②（南から）
6. I 区 上層全景②（南から）

図版 3

1. II 区上層 遺構 81 検出状況（南から）
2. II 区上層 遺構 81（粘土貼り面：南から）
3. II 区上層 遺構 81（粘土貼り面：東から）
4. II 区上層 遺構 81（粘土面除去後：南から）
5. II 区上層 遺構 81（南部縦断面：東から）
6. II 区上層 遺構 81（北部縦断面：東から）
7. II 区上層 遺構 81（横断面：南から）
8. II 区上層 遺構 81（縦断面：東から）

図版 4

1. II 区下層 全景（東から）
2. I 区下層 全景（北から）
3. II 区下層 全景（南から）
4. I 区下層 全景（南から）
5. I 区 2 面 遺構 8・25（東西溝①：西から）
6. I 区下層 遺構 8・25
かわらけ出土状況（南西から）
7. II 区下層 遺構 8・25（東西溝①：西から）
8. II 区下層 遺構 8・25（東西溝①：東から）

図版 5

1. I 区東壁 下層遺構 8・25 断面
（東西溝①：南西から）
2. I 区西壁 下層遺構 8・25 断面
（東西溝①：東から）
3. II 区下層 遺構 34（東西溝②：東から）

4. I 区東壁 上層遺構 34（東西溝②：西から）
5. I 区下層 遺構 34（東西溝②：東から）
6. II - 拡張区下層 柱穴 182
（東西柱穴列：西から）
7. II 区下層 東西柱穴列（東から）
8. II - 拡張区東壁 柱穴 182 断面
（東西柱穴列：西から）

図版 6

1. II 区下層 遺構 99（かわらけ集積：南から）
2. II 区下層 遺構 99 完掘後
（かわらけ集積：南から）
3. II 区下層 南北柱穴列①
（III b 層上面：南から）
4. II 区 東壁断面（西から）
5. II 区 3 面 柱穴 134 断面（南西から）
6. II 区東壁 柱穴 143 断面
（南北柱穴列①：西から）
7. II 区東壁 東西溝①・柱穴 171 断面
（西から）
8. II 区下層 かわらけ出土状況（東から）

図版 7

1. I 区下層 遺構 36（井戸：東から）
2. I 区下層 遺構 36 完掘後（井戸：西から）
3. II 区上層遺構 81
・下層遺構 25・151 断面（東から）
4. II 区下層 遺構 151（井戸：東から）
5. II 区 III c 層上面 全景（南から）
6. I 区 III c 層上面 全景（南から）
7. II 区 III c 層上面 噴砂痕検出状況（北から）
8. I 区南壁 噴砂痕断面（北から）

図版 8～12 出土遺物

第一章 遺跡の位置と歴史的環境

本地点は、若宮大路と小町大路とに挟まれた住宅街に所在する。鎌倉の中心市街地が広がる沖積平野の北東部に立地し、現況の標高は約 9.5 m を測る。

埋蔵文化財包蔵地としての「北条小町邸跡」は若宮大路東辺の一面を占め、約 200 m 四方の範囲をもつ。かつては「北条泰時・時頼邸跡」の遺跡名称もあった。これまでに 18 地点で発掘調査が行われているが、その多くが遺跡外縁部での調査で、若宮大路や小町大路の側溝など、屋敷地としての遺跡外郭線を示す遺構が確認されている。一方、遺跡中央付近での調査例は少なく、調査面積も狭小であるため、屋敷地中核部の様相は明確になっていないのが現状である。

「北条小町邸跡」は『吾妻鏡』承元四年（1210）十一月二十日条の「相模太郎殿小町御亭」や宝治元年（1247）七月十七日条にみえる「前武州禅室跡」といった記述に基づく遺跡名で、ここに鎌倉幕府第 3 代執権・北条泰時の邸宅が所在したと考えられている。秋山哲雄氏の考証によれば、泰時以後は彼の孫で第 4 代執権の経時に、次いで泰時の弟で連署として第 5 代執権時頼を補佐した重時が邸宅の一部ないし全体を相伝したという（秋山 2010）。この南隣地区は嘉禄元年（1225）に將軍御所が移転した宇津宮辻子幕府の比定地で、嘉禎二年（1236）には泰時邸の南側一面に將軍御所が再移転したと考えられている（若宮大路幕府・図 1）。嘉禄元年以降、若宮大路東側に將軍御所と執権邸が集約される形となり、元弘三年（1333）の幕府滅亡に至るまで、当地区は幕府政治の中核機能を担う場となる。この間、若宮大路を基軸とした都市鎌倉の飛躍的展開があったことは、これまでの発掘成果が明白に物語っている。

【参考文献は第五章末（122 頁）に掲載した】

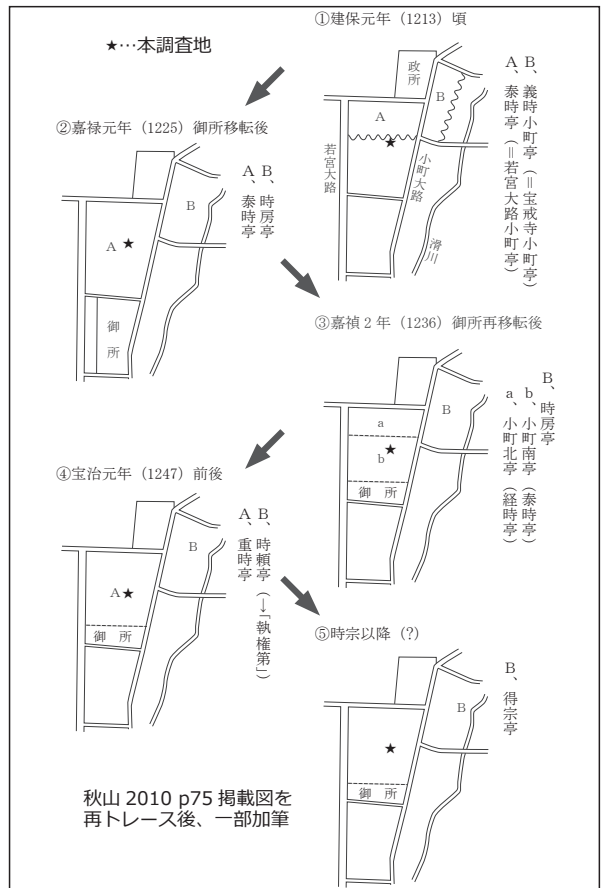


図 1 若宮大路幕府旧蹟碑（左写真）と「北条小町邸跡」の変遷（秋山 2010 を改変）

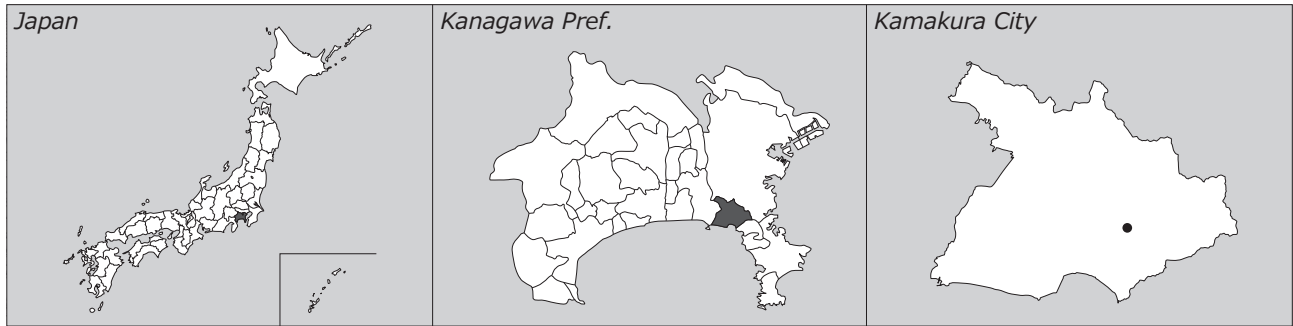


図 2 調査地の位置（鎌倉市発行 1：2,500 都市計画基本図を使用）

第二章 調査の方法と経過

第1節 調査に至る経緯

本発掘調査は個人専用住宅の建設に伴う事前調査として、鎌倉市教育委員会（市教委）が実施した。建築計画では基礎工事として現地表下 4.93 m までの柱状改良を施すことから、市教委は平成 25 年 3 月 5 日と 6 日の二日間にわたって埋蔵文化財の確認調査を実施した。この結果、地表下約 50cm の表土層直下では破碎泥岩で整地された中世の遺構面が、地表下 110cm では中世基盤層が確認され、この上面が遺構面と判断された。この確認調査の結果を受け、建築計画の実施に先立って本格的な発掘調査を実施する必要があるとの判断に至った。

以上の手続きを経て、平成 25 年 10 月 10 日～12 月 27 日の約 2 ヶ月半をかけて現地での調査を実施した。

第2節 調査の方法

掘削に伴う発生土置場を確保する必要から、約 45㎡の調査範囲を二分割して調査を進めた（図 3）。

表土の除去は重機によって行い、東半の I 区の調査を終えた後、I 区の埋め戻しおよび II 区の表土掘削を行った。今回は十分な発生土置場を確保することが難しかったため、I 区と II 区の間には発生土の崩落防止を目的とする未掘削部分（中央ベルト）を残し、土層断面の観察にも利用した。

I・II 区とも遺物包含層以下は全て人力によって掘削し、順次下層遺構面への掘り下げと遺構掘削、および写真撮影・測量図作成といった記録作業を進めた。測量に当たっては国家座標系に基づく基準軸を設定し、主に光波測距儀を用いて平面図の作図を行った。国家座標値は、都市再生街区多角点の補助点「3A064」および「3A150」の二点間関係をもとに開放トラバース法で移動した。東日本大震災後の補正值を使用した。

第3節 調査の経過

前述のとおり、本地点の調査は平成 25 年 10 月 10 に開始した。I → II 区の順に調査を進め、I 区は 11 月 18 日、II 区は 12 月 16 日にひととおりの調査を終えた。その後、下層東西柱穴列の構成ピットを確認する目的から中央ベルト北端部を拡張し、24 日までには III b 層上面まで掘削と記録を終えた。27 日には調査用具を撤収し、現地での調査工程を全て終了した。

出土品などの整理作業は、鎌倉市文化財課分室で行った。平成 27 年度後半に遺物実測、挿図・写真図版・表組みの作成を行い、平成 28 年度の前半に文章執筆に当たった。

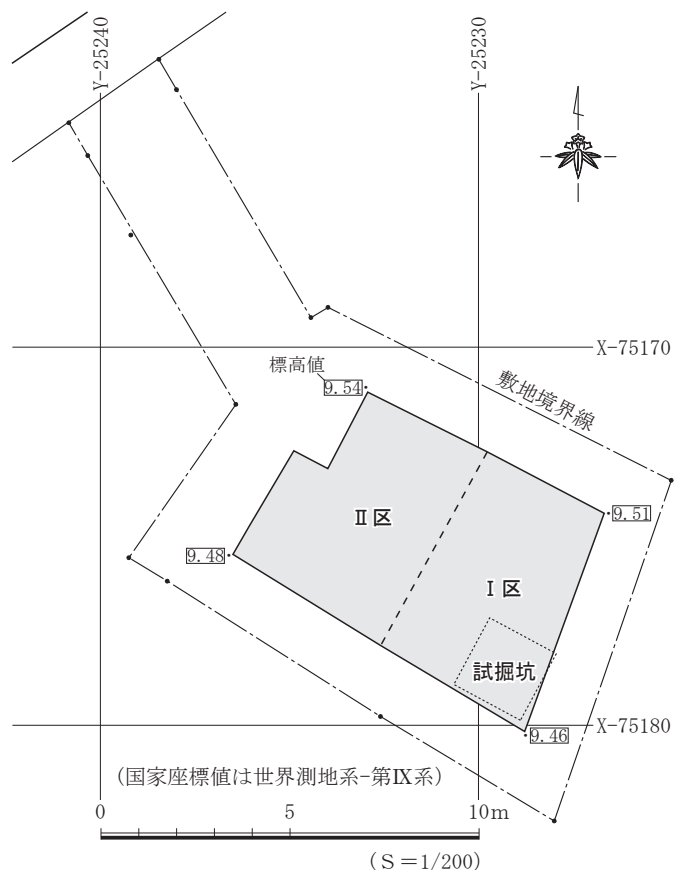


図3 調査区配置図

第三章 基本土層

本地点は、鎌倉市街地の基盤をなす沖積平野に立地している。現地表面の標高は 9.5 m 前後を測り、高低差を殆ど感じない地形となっている。

今回は地表下 50cm 以下で、3 枚の中世遺構面を確認した。最下層は中世基盤層（Ⅲ b 層）の上面で、調査区の北辺付近で東西溝（遺構 34）など少数の遺構を確認したが、上部を上層の遺構群に削平され本来の掘り込み面を把握できなかったため、本報告では中世下層の遺構面に帰属させ、この最古段階の遺構として提示することとした。Ⅰ・Ⅱ区ともに中世遺構の調査を終えた後、Ⅲ b 層以下を掘り下げて古代以前の遺構・遺物について確認を試みた。その結果、かわらけ他の中世遺物が少量と、須恵器坏の小片が 1 点出土したのみで遺構は発見されなかった。Ⅲ b 層以下で中世遺物が出土している点について、調査での多少の掘り残しがあった可能性は否定できないが、Ⅲ b 層上面が中世で最初の生活面となっていた可能性を示唆している。

Ⅲ b 層は灰黒色の強粘質土で、上面の標高は 8.35 ～ 8.6 m を測り、東側での確認レベルが低かった。層厚は 20cm ほどで、その下位には黒褐色～黒灰色粘質土（Ⅲ c 層）が堆積し、標高 8.2 ～ 8.3 m 前後で灰黒色シルト質土（Ⅲ d 層）が検出された。やはり調査区東側での確認レベルが低い。Ⅲ c 層は古代の遺物包含層となる可能性があるが、Ⅲ d 層以下は無遺物層と考えられたため、これより下位の掘削は行わなかった。

Ⅰ区では、Ⅲ d 層を切って南北に蛇行して走る噴砂痕を確認している（図版 7-7・8）。中世下層面の東西溝（遺構 25）の埋土が被っている（図版 4-6）、13 世紀代以前の地震に伴う液状化痕跡として理解できる。Ⅰ区ほど明瞭ではないが、Ⅱ区のⅢ d 層上でも南北に走る細い亀裂を確認している（図版 7-5）。

なお、本地点は地下水レベルが遺構確認面より低かったため、木製品は殆ど残っていなかった。本来であれば区画溝の護岸板や柱材、礎板といった形で木材が使用されていたのだろうが、今回は腐植した粘質土として、その痕跡が窺えたに過ぎない。

調査区壁の土層断面は、図 4 ～ 6 に示した。

基本土層説明

0	暗褐色土	表土。砂質土。締まり弱い。
Ⅰ	暗褐色土	砂質土。
Ⅰ b	褐色土	泥岩ブロック多量。
Ⅱ a	暗灰褐色土	泥岩粒・炭粒多量。
Ⅱ b	黒褐色土	Ⅲ層土がベース。炭粒微量。粘性あり、締まりややあり。
Ⅱ c	暗灰色土	粘質土。Ⅲ層土がベース。締まり強い。
Ⅲ a ①	黒灰色土	粘質土。締まり強い。中世遺物ごく少量包含。
Ⅲ a ②	黒灰色土	粘質土。締まり強い。中世遺物ごく少量包含。
Ⅲ b	灰黒色土	粘質土。中世基盤層。
Ⅲ c	黒褐色土	弱粘質土。白色・褐色粒少量。
Ⅲ d	灰黒色土	シルト質土。

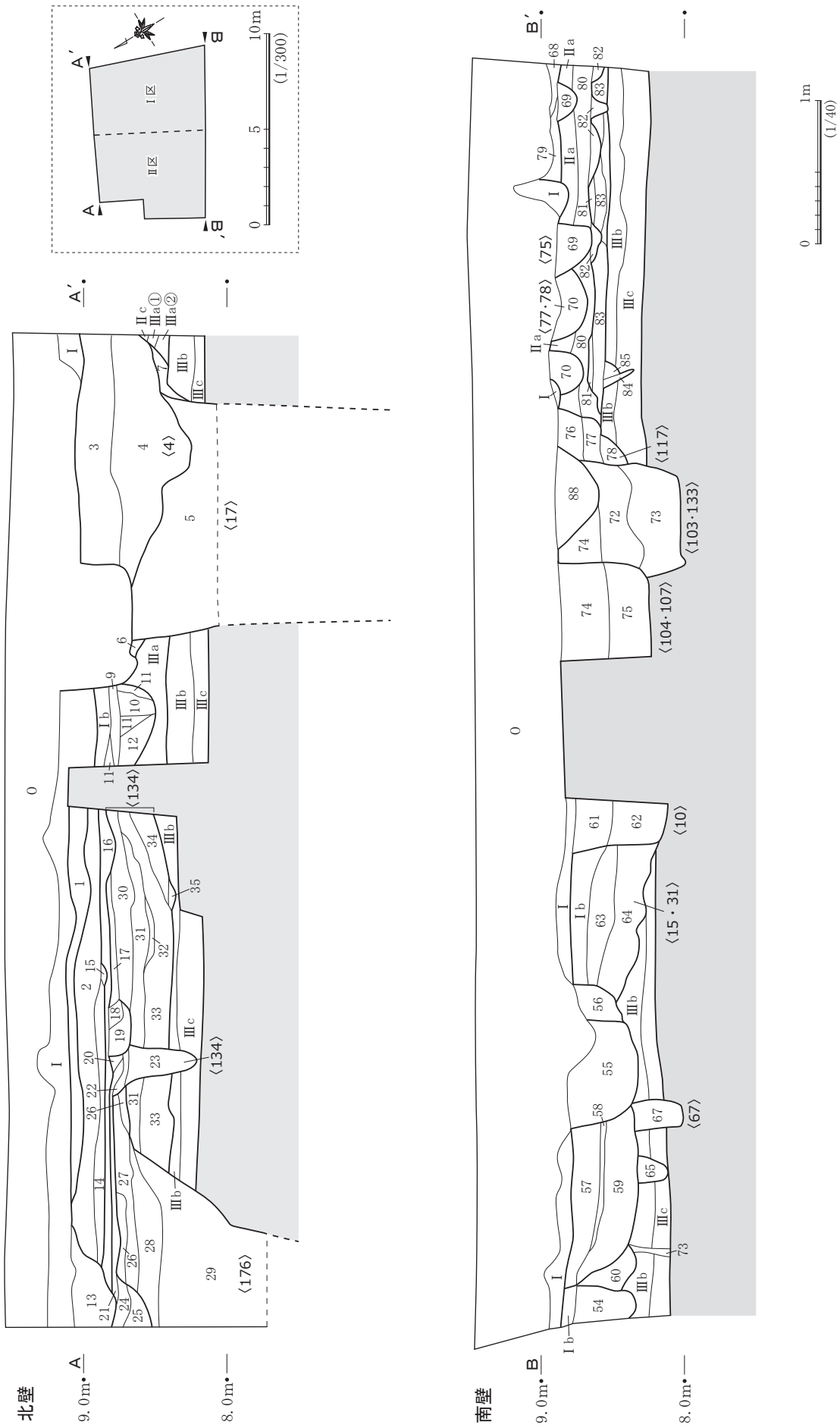
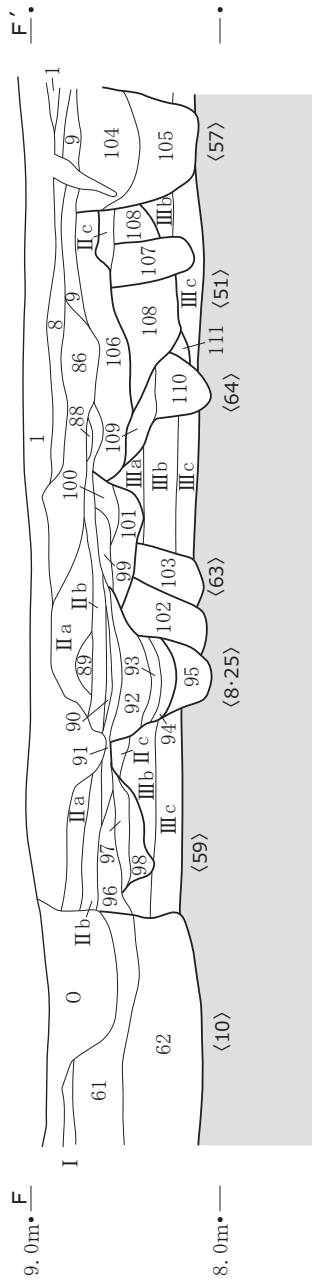


図4 調査区セクション図①

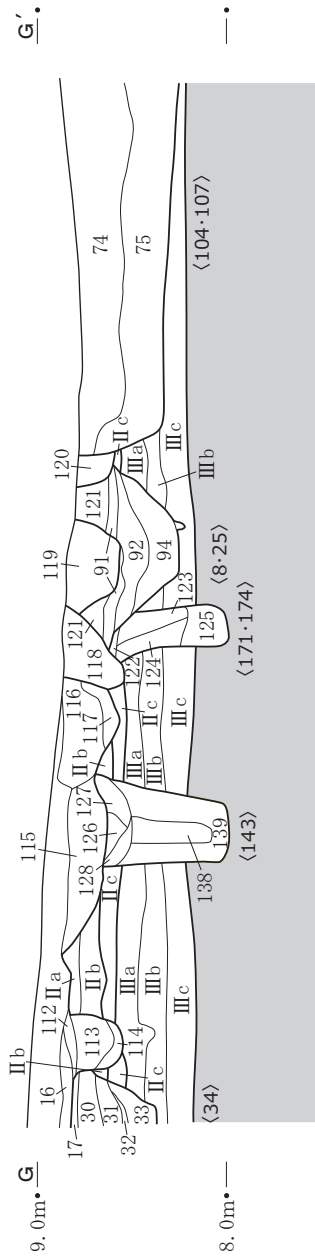
1	灰褐色土	砂質土。泥岩粒少量。締まりややあり。	47	灰褐色土	粘質土。泥岩粒少量。遺構 8・25
2	灰褐色土	泥岩粒ごく少量。締まり弱い。	48	灰褐色土	白色粘土粒少量。52 層より締まり強い。遺構 8・25
3	黄褐色土	泥岩ブロック多量。	49	暗灰色土	砂質土。泥岩ブロック少量。
4	灰褐色土	砂質土。泥岩ブロック少量。遺構 44	50	暗灰色土	泥岩粒少量。
5	灰褐色土	泥岩粒、炭粒多量。遺構 17	51	灰褐色砂	部分的に混入。
6	暗灰褐色土	粘質土。	52	黒褐色土	粘質土。泥岩粒少量。遺構 18
7	黒褐色土	粘質土。泥岩粒少量。	53	灰褐色土	砂質土。遺構 18
8	灰褐色土	砂質土。	54	灰褐色土	砂質土。泥岩粒、炭粒微量。
9	黄褐色土	泥岩粗粒が主体。	55	暗褐色土	上部に泥岩ブロック多い。炭粒多量。
10	暗褐色土	炭粒、泥岩ブロック多量。締まり弱い。遺構 57 カ	56	暗褐色土	62 層に近似し、締まりやや強い。
11	灰褐色土	粘質土。泥岩粒少量。遺構 57 カ	57	灰褐色土	I b 層に近似。泥岩ブロック多量。
12	灰褐色土	遺構 57 カ	58	暗褐色土	泥岩ブロック多量。締まりあり。
13	灰褐色土	泥岩粒、灰色砂少量。	59	暗褐色土	泥岩ブロック多量。締まりややあり。
14	暗灰褐色土	砂 + 土。締まり強い。	60	灰褐色土	砂質土。
15	暗灰褐色土	砂主体。	61	灰褐色土	I b 層に近似。泥岩ブロック多量。遺構 10
16	暗灰褐色土	泥岩微粒多量。締まりあり。	62	灰褐色土	泥岩ブロック多量。締まり弱い。遺構 10
17	黄褐色土	締まり強い。	63	灰褐色土	砂質土。泥岩粒少量。遺構 15・31
18	暗褐色土	泥岩粒多い。締まり強い。遺構 99・134	64	暗褐色土	炭粒、泥岩ブロック多量。締まり弱い。遺構 15・31
19	暗褐色土	泥岩粒少量、炭粒多い。	65	暗褐色土	粘質土。泥岩粒、炭粒微量。
20	灰色砂	混貝砂主体。	66	灰黄色砂	地山砂の噴砂痕。微細・シルト質。
21	黄褐色土	泥岩粒多い。締まりあり。	67	暗褐色土	粘質土。泥岩粒微量。遺構 67
22	黄褐色土	泥岩粒多い。	68	灰褐色土	泥岩粒少量。締まりあり。
23	黒褐色土	炭粒少量。粘性あり。遺構 134	69	灰褐色土	泥岩粒、炭粒少量。遺構 75 など
24	暗灰褐色土	炭粒少量	70	灰褐色土	泥岩ブロック多量。締まりあり。遺構 77・78 など
25	暗灰褐色土	粘質土。炭粒少量。	71	暗褐色土	泥岩粒多量。締まりあり。遺構 103・133
26	暗褐色土	混貝砂混入。	72	暗褐色土	泥岩粒多量。締まりややあり。遺構 103・133
27	暗褐色土	粘質土。炭粒少量。	73	暗褐色土	III 層土ブロック少量。粘性ややあり。遺構 103・133
28	暗褐色土	粘質土。炭粒少量。遺構 176	74	暗褐色土	泥岩粒、炭粒多量。遺構 104・107
29	暗褐色土	粘質土。炭粒少量。遺構 176	75	暗褐色土	泥岩粒、炭粒多量。遺構 104・107
30	暗褐色土	泥岩粒微量。粘性あり、締まりややあり。	76	暗灰褐色土	泥岩粒、炭粒多量。遺構 117
31	暗褐色土	粘性あり。遺構 34	77	暗灰褐色土	泥岩粒少量。締まりややあり。遺構 117
32	黒色土	炭粒主体。締まり弱い。遺構 34	78	暗灰褐色土	泥岩粒多量。遺構 117
33	暗褐色土	弱粘質土。やや赤色味を帯びる。遺構 34	79	灰褐色土	泥岩粒多量。締まりあり。
34	暗褐色土	弱粘質土。遺構 34	80	赤褐色砂	微細で均質。締まり弱い。
35	暗褐色土	弱粘質土。白色・褐色粒少量。遺構 34	81	暗灰色土	混貝砂と腐植土の混交層。締まりあり。
36	灰褐色土	砂質土。赤色砂ブロック少量。遺構 34	82	暗赤褐色砂	赤褐色砂と腐植土の混交層。締まりあり。
37	暗褐色土	砂質土。締まり弱い。	83	灰黄色砂	混貝砂。締まりややあり。
38	暗褐色土	砂質土。泥岩粒少量。	84	暗灰褐色土	泥岩粒少量。粘性強く、締まり弱い。
39	暗褐色土	締まり弱い。柱材の腐植痕跡か。遺構 40	85	暗灰褐色土	泥岩粒少量。粘性強く、締まりあり。
40	暗褐色土	粘質土。締まりあり。遺構 40	86	黄褐色土	泥岩ブロック主体。
41	暗褐色土	砂質土。締まり弱い。	87	灰褐色土	砂質土。泥岩粗粒多量。
42	黄褐色土	泥岩粒密。			
43	灰褐色土	砂質土。泥岩粒少量。遺構 27			
44	灰褐色土	砂質土。泥岩粒少量。49 層より締まりあり。遺構 27			
45	灰褐色土	砂質土。遺構 8・25			
46	灰褐色土	赤色砂ブロック、炭粒多量。遺構 8・25			

88	暗褐色土	粘質土。縮まり弱い。	133	黒色土	微細な炭粒主体。縮まり弱い。遺構 81
89	灰褐色砂	貝殻粒多量。	134	黒色土	微細な炭・灰。縮まり弱い。遺構 81
90	赤褐色砂	縮まり弱い。	135	黒色土	炭主体。焼土少量。遺構 81
91	黒色土	Ⅲ層土に近似。炭粒多量。縮まり弱い。	136	暗褐色土	粘質土。縮まりややあり。遺構 81
92	灰褐色土	砂質土。遺構 8・25	137	暗褐色土	泥岩ブロック少量。遺構 81
93	灰褐色土	粘質土。遺構 8・25	138	暗褐色土	泥岩粒多量。縮まりあり。遺構 81
94	灰褐色土	砂質土。	139	暗褐色土	泥岩粒少量。縮まりあり。遺構 81
95	灰褐色土	粘質土。	140	暗黄褐色土	泥岩粒密。縮まりあり。遺構 81
96	灰褐色土	砂質土。	141	暗赤褐色土	微細な焼土・灰が主体。縮まり弱い。遺構 81
97	灰褐色土	砂質土。	142	灰色土	粘土床。縮まり弱い。遺構 81
98	灰褐色土	砂質土。かわらけ片非常に多い。泥岩粒、炭粒多量。	143	暗黄褐色土	泥岩ブロック多量。縮まり強い。遺構 81
99	灰褐色土	泥岩微粒多量。	144	灰褐色土	焼土粒少量。縮まり弱い。遺構 81
100	暗褐色土	粘質土。	145	灰褐色土	炭・灰粒少量。縮まり弱い。遺構 81
101	暗褐色土	粘質土。100層より縮まり強い。	146	暗褐色土	泥岩粒多量。
102	灰褐色土	粘質土。縮まり強い。	147	暗褐色土	泥岩粒少量。
103	灰褐色土	粘質土。縮まり強い。	148	暗褐色土	粘質土。炭粒少量。
104	黒褐色土	粘質土。	149	暗褐色土	縮まり弱い。植物根の痕跡
105	黒褐色土	粘質土。104層より縮まり強い。	150	赤褐色土	焼土主体。上面やや硬化。
106	灰褐色土	泥岩粒少量。	151	暗褐色土	泥岩粒やや多い。
107	暗褐色土	粘質土。縮まりあり。	152	暗褐色土	泥岩粒多量。
108	灰褐色土	粘質土。炭粒多量。	153	暗灰褐色土	灰色砂、泥岩粒少量。
109	暗褐色土	粘質土。	154	暗褐色土	泥岩粒、炭粒少量。
110	暗褐色土	粘質土。109層より縮まりあり。	155	暗褐色土	泥岩ブロック多量。
111	灰褐色土	粘質土。炭粒少量。	156	暗褐色土	泥岩粒多い。
112	暗灰褐色土	泥岩粒少量。縮まりあり。	157	暗褐色土	粘質土。縮まり弱い。遺構 8・25
113	暗褐色土	泥岩ブロックやや多い。縮まりあり。	158	灰褐色砂	縮まり弱い。遺構 8・25
114	暗褐色土	縮まり弱い。	159	灰褐色土	砂質土。上面に混貝砂＋泥岩粒が多く、縮まりやや強い。遺構 151
115	黄褐色土	泥岩粒密。縮まり強い	160	灰褐色土	砂質土＋少量の粘質土。縮まり弱い。遺構 151
116	黄褐色土	泥岩粒密。縮まり強い。	161	灰褐色土	炭・灰粒少量。縮まり弱い。
117	暗褐色土	泥岩粒少量。縮まり強い。	162	黒色土	粘質土。遺構 151
118	灰褐色土	泥岩粒多量。縮まりあり。	163	暗褐色土	粘質土。木片、炭粒少量。縮まり弱い。遺構 151
119	灰褐色土	泥岩粒少量。	164	黄褐色土	泥岩ブロック主体。
120	灰褐色土	泥岩粒少量。	165	暗褐色土	泥岩粒多量。縮まりややあり。
121	灰褐色土	砂質土。縮まりややあり。	166	暗黄褐色土	泥岩ブロック多量。縮まりあり。
122	暗褐色土		167	暗黄褐色土	泥岩粒多量。縮まりあり。
123	黒褐色土	粘性あり、縮まり弱い。遺構 171・174	168	黄褐色土	微細な泥岩粒主体。縮まりあり。
124	黒褐色土	粘性あり、縮まりややあり。遺構 171・174	169	暗灰褐色土	泥岩ブロック多量。縮まり弱い。
125	黒褐色土	粘性、縮まりあり。遺構 171・174	170	暗灰褐色土	粘質土。泥岩粒少量。
126	黒褐色土	泥岩粒少量。縮まりあり。遺構 143	171	暗灰褐色土	泥岩粒ごく微量。
127	黒褐色土	泥岩粒、炭粒少量。縮まりあり。遺構 143	172	暗灰褐色土	
128	黒褐色土	泥岩粒少量。縮まりあり。遺構 143	173	暗灰褐色土	弱粘質土。
129	暗褐色土	泥岩粒少量。縮まり弱い。遺構 143			
130	黒褐色土	粘質土。縮まりあり。遺構 143			
131	暗褐色土	泥岩粒多量。縮まりあり。遺構 81			
132	黒褐色土	粘質土＋炭粒。縮まりややあり。遺構 81			

I 区西壁



II 区東壁



II - 拡張区東壁

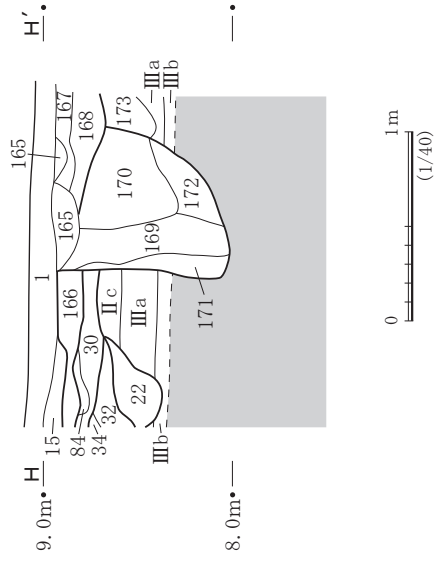


図6 調査区セクション図③

第四章 発見された遺構と遺物

前章で述べたように、中世の遺構面は上・下層の2枚に大別できるものと考えた。上層の遺構面では南北に長軸を持つ長方形土坑や不整形の落ち込み、粘土床を持つカマド状遺構などが検出された。下層遺構面では一転して2条の東西溝や東西・南北に並ぶ柱穴列といった区画施設の遺構が展開する状況を確認した。こうした遺構形態の違いは、下層から上層への時間的推移に伴う空間利用の転換を示唆しているものと考えている。以下、上層から順に、主な検出遺構と出土遺物について説明する。

第1節 中世上層の遺構と遺物（図7・8）

表土直下の標高8.9～9.1m前後で確認した。I区全域からII区の南部にかけては遺構が稠密で確認が難しかったため、本来の検出面より10～15cmほど掘り下げて平面プランの確認を行った。その結果、調査区の南半部で重複する長方形土坑群が検出され、I区北部で不整形の落ち込みを、II区の北部ではカマド状遺構を確認した。

表土～上層遺構面の出土遺物

図12-1～12に示した。7は古瀬戸前期様式II～III期の卸皿。本地点では瀬戸窯製品が非常に少なく、全体の器形を復元できたのは、この1点のみである。8は軒平瓦の瓦当部片。陽刻の下向き剣頭文で、瓦当部は顎貼り付け技法で平瓦に接着される。

遺構4（落ち込み）

I区の北部で検出された、平面形の不明瞭な落ち込みである。土層断面の観察では標高8.9m以下に埋土が堆積し、この上位に層厚10～15cmで泥岩ブロックを多量に含む黄褐色土が被っていた。後者は版築などは施されないものの、遺構廃絶後の埋め立て・整地に関わる土層と考えられる。この黄褐色土までを本落ち込みに伴うものとする、他の上層遺構群よりも上位から掘り込まれていたことになる。

ただ、表土層との境近くに堆積の乱れがあり、確実な立ち上がりは把握できていない。落ち込み自体はなだらかで、底面は弱い段差を持ちながらも緩い播鉢状を呈していた。最も低いところで標高8.35mを計測した。埋土は泥岩ブロックを多く含む灰褐色砂質土で、底面から10cmほど浮いた位置では砂質凝灰岩切石（鎌倉石）の破損品や人頭大の泥岩塊が集積していた。これらは標高8.7～8.9mで上端のレベルがまとまっており、この上に先述の黄褐色土が被っていた。遺構の用途については判断が難しいが、平面・断面とも不整形で企画性を見出せない点は池などを想起させる。その場合、集積状態の石材は、護岸材や景石が廃棄されたものとも見なせようか。

本遺構から出土した遺物は、図13-67～72に示した。

土坑群

土坑は調査区の南半部に集中して検出された。南北に長軸を持つ長方形プランのものが主体で、垂直に掘り込まれ、下底面はフラットで箱形の断面形を呈する。調査区の南外に続き、土坑間の重複も多いため全体規模を把握できたものは殆どないが、短軸の幅は90cmほどでまとめ、長軸ラインはN25°E前後で揃うことから、一定の制約に則って掘削されたものと考えられる。確認面からは、60～90cmの深さを有する。一部の土坑では炭とともに大量のかわらけ片で埋まっており、火災後のゴミ処理を目的に掘られた可能性がある。

各土坑から出土した遺物は、図12・13に提示した。

中世上層遺構の底面標高

遺構 No.	底面標高 (m)	遺構 No.	底面標高 (m)	遺構 No.	底面標高 (m)	遺構 No.	底面標高 (m)	遺構 No.	底面標高 (m)	遺構 No.	底面標高 (m)
1	8.56	12	8.57	85	8.50	103	8.14	116	8.32	125	8.54
3	8.22	13	8.29	86	—	104	8.31	117	8.43	126	8.55
4	8.35	14	—	88	8.47	110	8.24	118	8.22	127	8.58
5	8.46	15・31	8.18	89	8.55	111	8.17	119	8.48	129	8.45
7	8.47	69	8.59	91	8.49	112	8.46	120	8.48	130	8.43
9	8.52	74・90	8.68	92	8.41	113	8.55	122	8.27	131	8.54
10	8.12	75	8.66	93	8.25	114	8.37	123	8.44	132	8.48
11	8.62	77・78	8.65	101	8.61	115	8.34	124	8.47	133	8.01

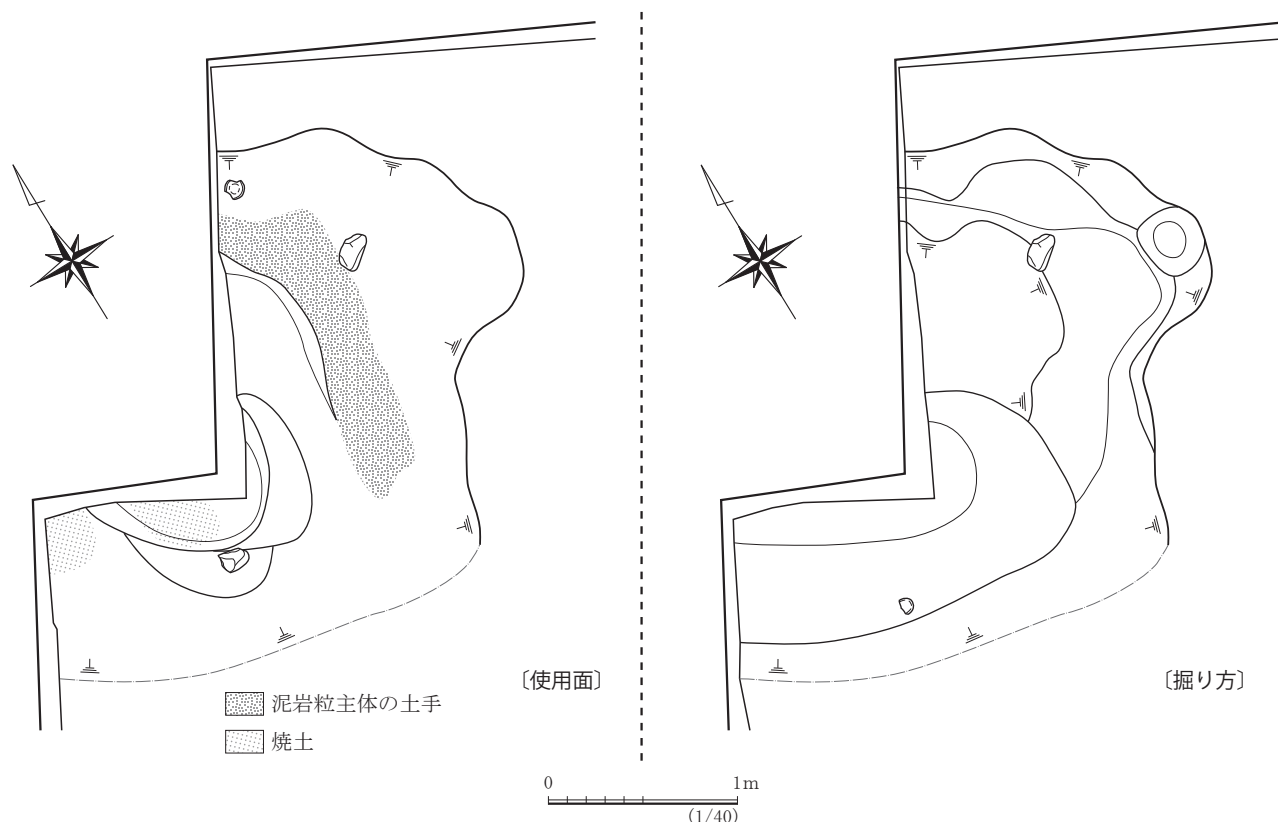


図8 中世上層遺構 81 (カマド状遺構)

遺構 81 (カマド状遺構)

Ⅱ区の西壁際で検出された。西は調査区外に続き、南は土坑に切られるため全体の規模と形状は不明だが、東西 1.6 m、南北 2.2 m の平面プランを確認できた。遺構自体は浅い窪みで、標高 8.8 m 前後の確認面レベルでは外縁に炭混じりの細砂面が、周縁に沿った内側には泥岩粒を充填した 35～40cm 幅の带状整地土が確認された。細砂と泥岩整地土を除去すると灰色粘土を貼った床面が検出された。粘土床は外縁側が高く内側（南西側）に向けてなだらかに下がる。ちょうど調査区が L 字状に屈曲する部分の真下付近が最も低くなり、標高は 8.55 m 前後であった。この上位には焼土混じりの薄層や小泥岩塊が被っていた。粘土床の下位には泥岩ブロックを多用した整地面があり、やはり南西に向けてなだらかに落ち込んでいた。最も低い箇所は標高 8.5 m 弱で、ここにも焼土の薄層が覆っていた。さらに下位にも泥岩粒を主体とした整地面があり、その下部には炭粒を混じえた粘質土層の堆積が見られた。これらを全て除去した掘り方の底面はⅢc層に達しており、標高は 8.4 m 弱であった。南北軸の断面図（図5の D-D' 右半部）からは落ち込みの北端部が土手状に盛り上がっている様子が分かるが、これが確認面で見られた泥岩粒主体の带状整地土と連続する。整理すると、掘り方外周より一回り小さい土手を築き、その内側に緩く傾斜した粘土床を貼る構造であった。緩斜面の裾に焼土の薄層が被り、ここから粘土床にかけての上位には炭層が堆積していた。土手の南西側は開いていた可能性が高

く、検出範囲の規模や形態をもとに推算すると、東西幅 2 m × 南北長 1.5 m 程度の馬蹄形に復元できる。同様に、外周部も含めた掘り方の東西幅は 3.2 m 前後に復元でき、その中心軸は N20° E 前後であったと見られる。土手の下底部から外周側にかけても炭層の広がりも確認されているので、同形態の土手を崩してから再構築された可能性がある。

以上の状況から、火処としての用途を考えて大過ないであろうが、天井部の痕跡を把握しておらず、元来、天井が架構されていなかったのか、後世の削平によって失われてしまったのかは定かでない。ただ、粘土床上の炭層が純層に近い状況を見ると、天井を有して外部からの混入要因が少ない閉塞空間が保たれていた可能性は高いように思う。本報では、天井の存在を想定して「カマド状」と呼称した。

本遺構に伴って出土した遺物は殆どがかわらけで、ロクロ：手づくねの重量比は、大皿で 9：1 に、小皿で 8：2 となる（表 1 ②）。図 12-14～24 に図示した。ロクロかわらけの小皿には、底径が小さく身深となるもの（17～19）が含まれる。20 はロクロかわらけの中皿で、破片資料では大皿との見分けが難しい。

第 2 節 中世下層の遺構と遺物（図 9・10）

標高 8.6～8.8 m で確認した。掘り込み層序の違いや切り合い関係から、少なくとも 2・3 時期の遺構変遷が考えられる。先述のように、Ⅲ層上面で検出された東西溝（遺構 34）も中世下層に含めた。

上層～下層遺構面の出土遺物

図 13-77～84 には I 区出土分を、の図 13-85～図 14-94 には II 区で出土した資料を掲げた。かわらけ全体におけるロクロと手づくねの重量比は、大皿・小皿ともロクロが 84% を占めていた（表 1 ①）。

遺構 8・25（東西溝①）

I 区～II 区を横断する。上幅 80～90cm、底幅 20～30cm で、逆台形ないし U 字形の断面形を呈する。掘り込み面からの深さは 30～40cm で、底面標高は 8.15～8.25 m を測り西に向けてなだらかに下がる。埋土は灰褐色砂質土がベースで、埋没後の上面を黒色粘質土が覆っている箇所も見られた。走行中心軸は、N62° W を指す。図 14-114～133 に本遺構の出土遺物を示した。かわらけ全体におけるロクロ：手づくねの重量比は、大皿で 8：2、小皿で 7：3 という結果であった（表 1 ④）。

遺構 34（東西溝②）

下層遺構面で最も古い遺構である。調査区の北辺で検出され、I 区の東壁外および II 区の北壁外へと続く。上層遺構の削平を受けているが、掘り込み面レベルでの上幅は 80cm 前後に復元できる。底幅は 30cm を測り、断面逆台形を呈する。深さは 30cm ほどで、底面標高は 8.35 m を測るも確実な流下方向は把握できなかった。走行中心軸は、N55° W を指す。埋土はⅢ b 層土を基調として砂粒を均質に含むが、泥岩粒が殆ど混入しておらず、この点で他の下層遺構群とは明瞭に区別できる。出土遺物はごく少量で、かわらけにロクロ成形品は含まれず、手づくねのみであった（表 1 ④）。全て小片で、図示できる資料はなかった。

東西柱穴列

I 区から II 区を横断する柱穴列で、調査範囲のなかでは 7 基の並びを確認した。芯々間の距離は 105cm（約 3 尺半）で、柱間の中心軸は N62° W を指す。確認レベルからの深さは軒並み 80cm を測るが、本来の掘り込み面はさらに 20cm ほど高いレベルにあったことが土層断面の検討から推測できる。柱穴 182 は中央ベルトを II 区側から拡張して確認した。完掘はせず、半載状況で写真を残した（図版

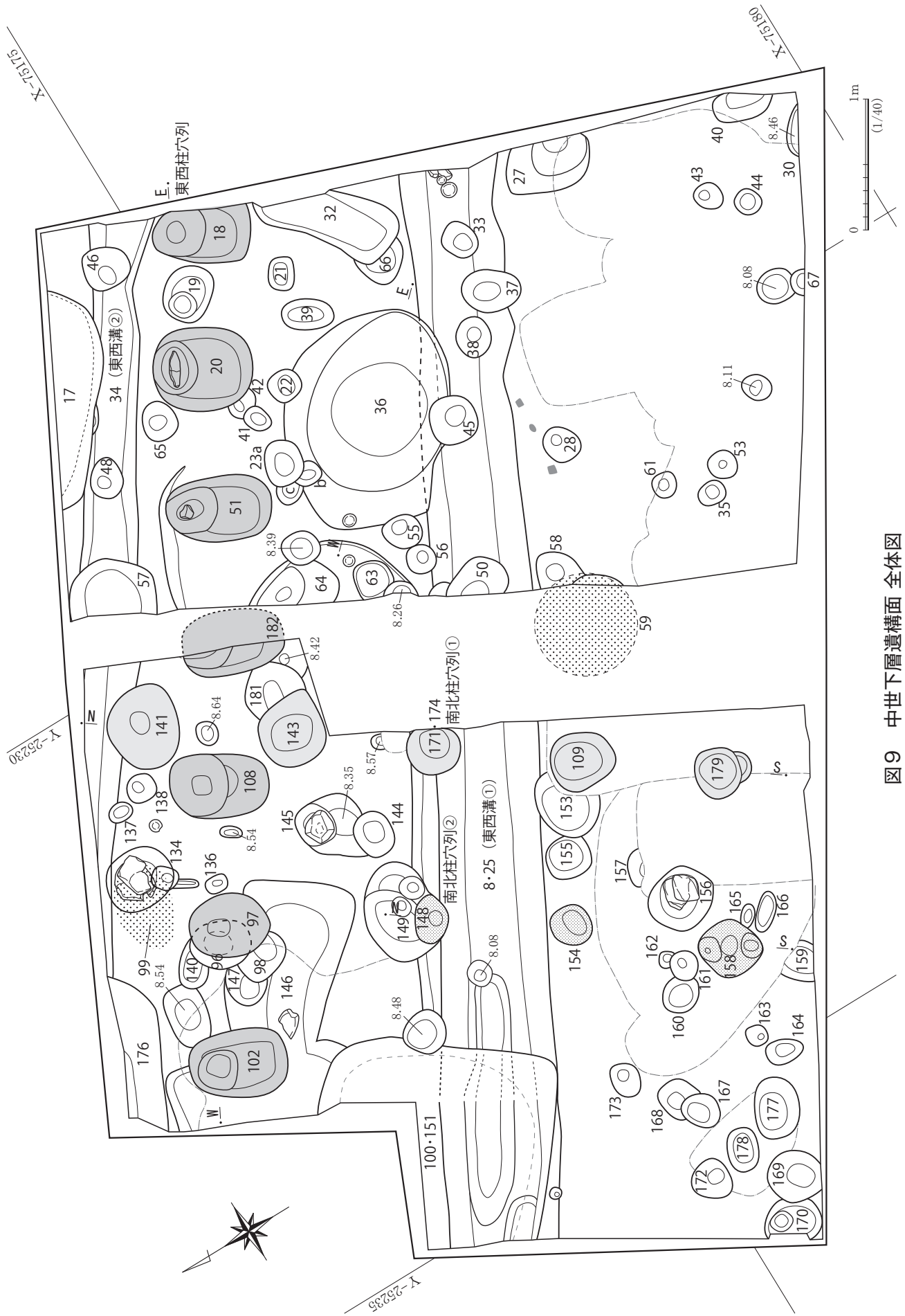


图9 中世下層遺構面 全体图

5-8)。掘り方の北側に直径 15cm ほどの柱抜き取り穴があり、抜き取り時に裏込め土上位～南側に続く整地層を掘り崩した形跡が見て取れた。整地層は版築ではないものの泥岩粒を緻密に充填して構築されており（写真右手）、こうした状況から柱列と東西溝①の間には基底部幅 1.5 m 程度の土手または通路が通っていた可能性がある。ただ、上層遺構の影響もあって平面的な確認には及ばなかった。

東西溝①と同じ方向軸で延び、柱芯と溝の中心間距離は 2.1 m 前後（約 7 尺）を測る。不分明ながら上述した泥岩整地層の痕跡も踏まえ、一時的にでも両者が「板塀＋渠」というセットになって区画施設としての役割を担っていた可能性が指摘できる。

図 14-95～110 には柱穴 102・182 から出土した遺物を示した。95・102・104 は柱穴 102 から、それ以外は全て柱穴 182 からの出土である。かわらけ（95～107）は、全て小片から器形復元したものである。表 1 ②～④を参照すると（柱穴 18・102・108 は上層遺構の表 1 ②・③に入れているが、下層に訂正）、かわらけ全体におけるロクロ：手づくねの重量比（概算）は、柱穴 108 で大・小ともにロクロかわらけが多く [大 6：4、小 7：3]、柱穴 51 では [大 6：4、小 2：8]、柱穴 102 では [大 4：6、小 3：7]、柱穴 182 で [大 3：7、小 2：8]、柱穴 18 で [大 2：8、小 9：1]、柱穴 20 では全点が手づくねとなっている。柱穴 97 からの出土遺物は皆無であった。柱穴ごとにばらつきがあるが、その理由は明確でない。重複する遺構からの影響や、部分的な柱の付け替えといった要因が考えられるが証跡はなく、単純に入り方の差として理解することも可能だろう。東西溝①よりロクロの比率が低い点は、遺構埋没までの時間差を考慮すれば、先述した両遺構の同時期性を否定する材料とはならない。

南北柱穴列①

Ⅱ区の東辺に沿って 5 基の並びが確認された。柱の芯々間距離は 110cm で、中心軸は N36° E を指す。中央ベルトの土層断面からは、柱穴 171（174）が東西溝①に切られ、柱穴 141 が東西溝②を切っていることが分かる。よって、東西溝①との同時期性を想定できる東西柱穴列より古い可能性があり、中世で最古段階に位置付けられる東西溝②と概ね直交方向に並ぶ点からも、Ⅰ：東西溝②→Ⅱ：南北柱穴列①→Ⅲ：東西柱穴列・東西溝①という変遷を考えることができる。各遺構上部の堆積土層が後世の削平のため安定していないが、以上の変遷過程を考えた。

確認レベルから 60cm 前後の深さを測るが、本来の掘り込み面は 20cm ほど高いレベル（標高 8.8 m）にあった（図 6 の G-G' における柱穴 141 の掘り込み面レベルから）。埋土は暗褐色～黒褐色粘質土で、柱穴 143 には直径 12cm ほどの柱の抜き取り穴が見て取れた（図 6 の G-G'、図版 6-6）。上部の層序の乱れは、抜き取りに際して掘り返した形跡だろうか。

出土遺物で図示できたのは、柱穴 141 から出土した手づくねかわらけの小皿 1 点である（図 14-111）。表 1 ④から出土かわらけ全体でのロクロ：手づくねの重量比を見ると、柱穴 141 で [大・小とも 1：9]、柱穴 171 では [大 2：8、小 0：10] となり、柱穴 143 では大・小とも全て手づくねであった。柱穴 109 と 179 は出土遺物が皆無であった。いずれの柱穴も出土遺物が少ないので、参考程度に留めたい。

南北柱穴列②

南北柱穴列①から西に 1.3 m 離れた位置で検出された。3 基の柱穴が芯々間 110cm、N36° E の方向軸で並ぶ。柱穴 148 が北端で、南側は調査区外に続く可能性がある。柱穴 148 は、東西溝①に切られる。確認レベルからは 50cm ほどの深さを有する。

各柱穴から出土した遺物は僅少で、図示できる資料はなかった。出土かわらけ全体におけるロクロ：手づくねの重量比は、柱穴 154 で [大 10：0、小なし]、柱穴 158 では [大なし、小 0：10] であった。柱穴 148 では出土遺物が皆無であり、いずれもごく少量の資料から割り出した数値なので、傾向を示

すデータとはいえない。

遺構 36 (井戸)

I 区中央部で検出された。東西溝①に切られる他、重複する全ての小穴より古い。東西に長軸を持つ長径 1.7 m × 短径 1.2 m の楕円形プランとして確認でき、他遺構に切られた部分を復元すると直径 1.6 ～ 1.7 m の円形を呈していたと推測できる。坑底は直径 70cm、断面はやや開き気味の円筒形で、西と北側の上部には緩く傾斜するテラスが見られた。確認レベルからの深さは 1.9 m、底面標高は 6.57 m を測る。黒褐色粘質土が埋土で、草履芯など若干量の木製品も遺存していた。木柵を持たないが、単に土坑と呼ぶには深いので井戸とした。

表 1④に見るように、本遺構からの出土遺物は僅少であった。図 14-112・113 に手づくねかわらけの小皿と青磁櫛描(搔)文碗を掲げた。

遺構 151 (井戸)

II 区西壁際に位置する。調査区外に続くため、安全面を配慮して埋土を完掘することはできなかった。南半部を東西溝①に切られる。遺構の軸線は同溝と殆ど変わらない。把握できた南北規模は 1.8 m で、一辺が同規模となる方形の掘り方であったと考えられる。確認レベルから 1 m まで掘り下げたが井戸柵は確認できず、埋土中から廃材と思しき板片が出土したのみであった。埋土は、掘削できた深さまでは炭混じりの単一層として確認され、人為的に埋め戻された様子であった。東西溝①の開削など土地区画の再整備に先立って既存施設の撤去・廃絶が進められた結果かとも考えられる。

本遺構も出土遺物が僅少で、かわらけは手づくねの重量比が大皿で 96%、小皿では 100% を占める。図 14-114 ～ 116 に実測図を示した。116 は舶載陶器の褐釉壺。釉薬は内外面に施され、緑がかった発色を呈する。

遺構 17 (井戸)

I 区の北壁際で検出された。上層の落ち込み(遺構 4)と攪乱の直下にあるため現地では上層遺構群とともに確認されたが、土層断面や出土遺物を検討した結果、下層遺構に含め得ると考えた。安全面を配慮して確認レベルから 60cm の深さまでしか掘削できず、井戸柵は検出されなかった。埋土は炭粒を多く含む灰褐色土の単一層で、少なくとも上部は人為的に埋め戻されたようである。

上層遺構分の挿図に掲載してしまったが、図 12-13 に本遺構出土の手づくねかわらけ小皿を示した。灯明皿としての使用痕が認められる。ごく一部の掘削に留まったこともあり、出土遺物はかわらけのみが少量出土したに過ぎない。ロクロ：手づくねの重量比は、大 1 : 9、小 4 : 6 という結果であった。

遺構 176 (井戸)

II 区の北東隅に位置し、ごく部分的な検出に留まった。東西溝②を切っており、埋没後は東西柱穴列などの掘り込み面となる整地層に覆われていた。平面的には、東西 120cm、南北 30cm までを計測した。確認レベルからは深さ 100cm までを掘削し、やや外開きの断面形態となることは確認できた。埋土には泥岩粒が含まれず、客土を伴う土地利用が行われる以前に埋没していた可能性が高い。

本遺構も部分的な掘削に留まったため、出土遺物はごく少量でに留まった。表 1④で示したように、かわらけ全体におけるロクロ：手づくねの重量比は大皿で 1 : 9 となり、小皿は全て手づくねが占めていた。また、細片ながら白磁の端反碗が出土するなど、鎌倉時代でも初期に近い様相が認められた。

遺構 58・59 (かわらけ集積土坑)

I 区の西壁際で検出され、大部分は中央ベルトの下部に位置していた。I 区の調査が完了する直前にベルト断面から遺物を抜き始めたところ、完存品を含むかわらけが次々と出土したため、横追いす

る形で遺物の取り上げを行った。よって明確な平面規模と形態は確認できなかったが、Ⅱ区へは続いていないことから、大よそ図9に示した程度の範囲に収まるものと推定している。埋土の下層には炭が多く混入していたが、かわらけを洗浄した時に炭化穀物が多く含まれていることが判明した。穀物の種類は同定できていない。遺構59が集積土坑本体で、遺構58はピットである。多少の遺物混在が考えられるため、ここでは両番号を示した。

本遺構の出土遺物は全てかわらけが占めており、採集漏れもあるが12615gを取り上げた(表1④)。ロクロかわらけが圧倒的に多く、手づくねも含めたかわらけ全体での重量比は大皿で96%強、小皿で88%を占めていた。中皿の存在も窺えるものの破片資料では大皿との違いが不明確であるため、大皿に含めてカウントした。

主なものを図15-135～166に示した。小皿が大皿よりも多いのは破損率が低いため、各器種とも完形品の平均重量(a)を求めた後、その数値で破片を含む総重量を割って算出した個体数(b)は、以下のとおりとなる。ロクロ大[a 217.5g、b 約38個]、ロクロ小[a 64.2g、b 約54個]、手づくね大[完形品なし]、手づくね小[a 62.7g、約7個]。手づくね大は破片資料のみで320gが出土しているので、1個体強に推算できよう。実測図を見ると、大・小ともにロクロと手づくねの器形・法量が相似している印象を受ける。

遺構99(かわらけ集積)

Ⅱ区の北辺部で検出され、東西溝②が埋没した後の整地層を掘り込んだ小土坑で、そのなかに完形の手づくね小皿を中心とするかわらけが一括廃棄されていた。東西に長軸を持つ楕円形の平面プランを呈し、長径70cm、短径50cm、確認面からの深さは25cmを測り、掘り方底面の標高は8.64mであった。遺構134(ピット)の上に重複する。

本遺構の出土遺物は全てかわらけであった。ロクロ:手づくねの重量比は、大1:9、小2:8となる。

完形品として重量を計測できたのは手づくね小皿のみで、5個体から割り出した平均重量は75gとなる。この数値を分子とした場合約13個体が出土したことになるが、重量の分布域が65g前後と80g台とに別れるため、参考として示すに留めたい。大皿については、ロクロと手づくねを合算しても1個体分に届く程度である。一括廃棄の事例としては非常に小規模で、かつ偏りのある器種構成といえるだろう。図15-167～179に実測図を掲げた。手づくねかわらけは、大・小とも口縁端部に面取り状のナデ整形を施した資料が見られず、尖り気味、もしくは丸味をもって仕上げられていた。

その他の遺構などから出土した遺物については、図15ならびに表2の遺物観察表を参照されたい。図15-188の手づくねかわらけ小皿は、底部・体部境に回転方向のナデを施した後、底部内面に櫛歯状工具によるナデ仕上げを施している。古手のかわらけに間々見られる技法である。

第3節 中世層基盤層下の確認調査(図11)

I・Ⅱ区ともに中世下層遺構面の調査を終えた後、Ⅲb層以下の掘り下げを行って古代以前の遺構・遺物について確認を試みた。第三章でも述べたようにⅢb層には若干量の中世遺物を包含しているため、厳密な意味での中世基盤層(中世地山)という呼び方は当たらない。Ⅲc層以下がそれに相当しよう。Ⅲb～Ⅲc層で出土した古代遺物は須恵器坏の小片1点のみであったため、Ⅲc層以下は無遺物に近い状況であったことが考えられる。標高8.2～8.3m前後で灰黒色シルト質土(Ⅲd層)を確認し、この上面を精査したものの遺物が包含されている様子はなく、無遺物層と判断された。この面で確認できたのはI区を南北に貫く噴砂痕のみで、断面観察により中世遺構の直下まで吹き上がることを確認した。他、中世ピットの掘り残し部分を確認・完掘して調査を終えた。

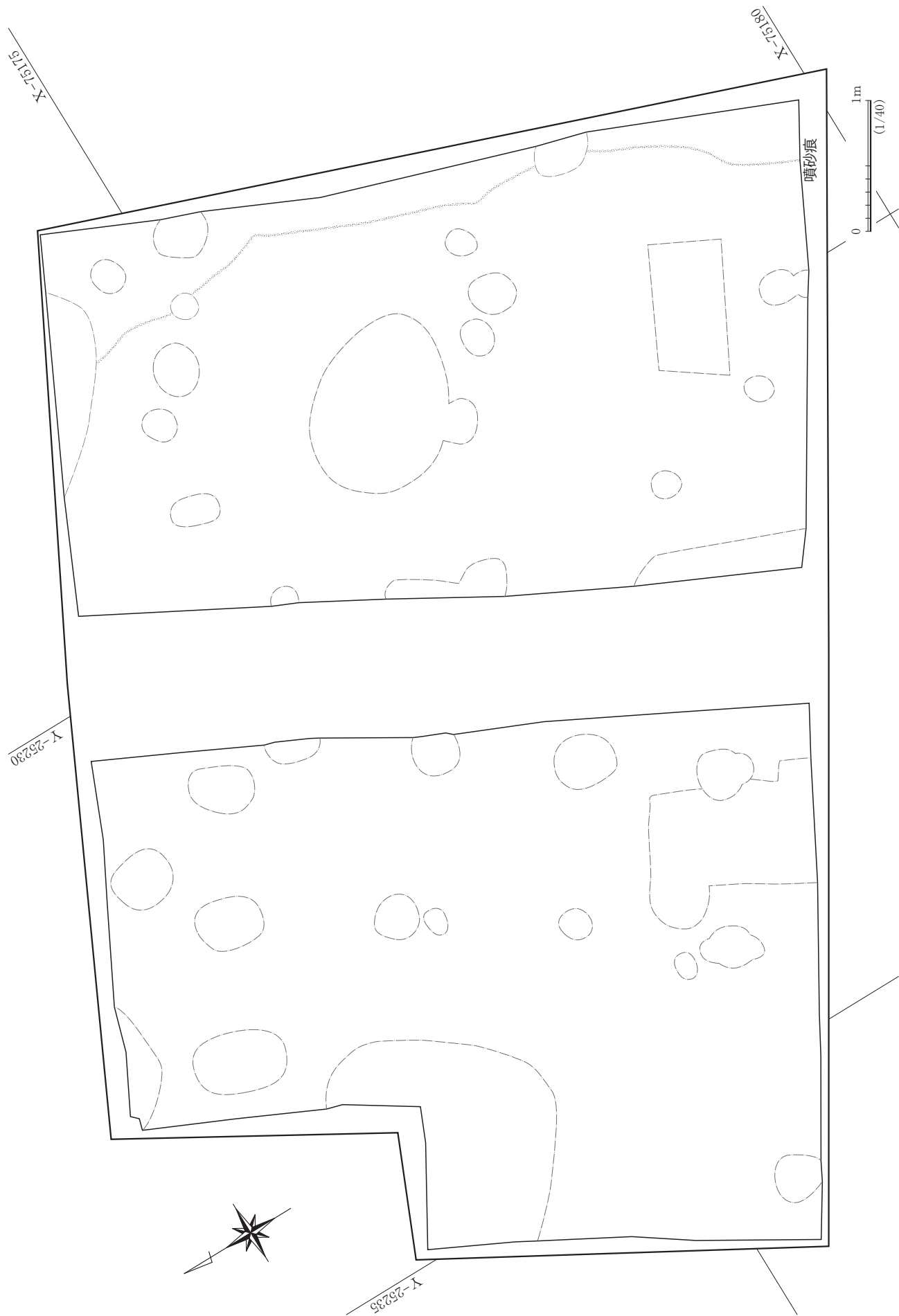
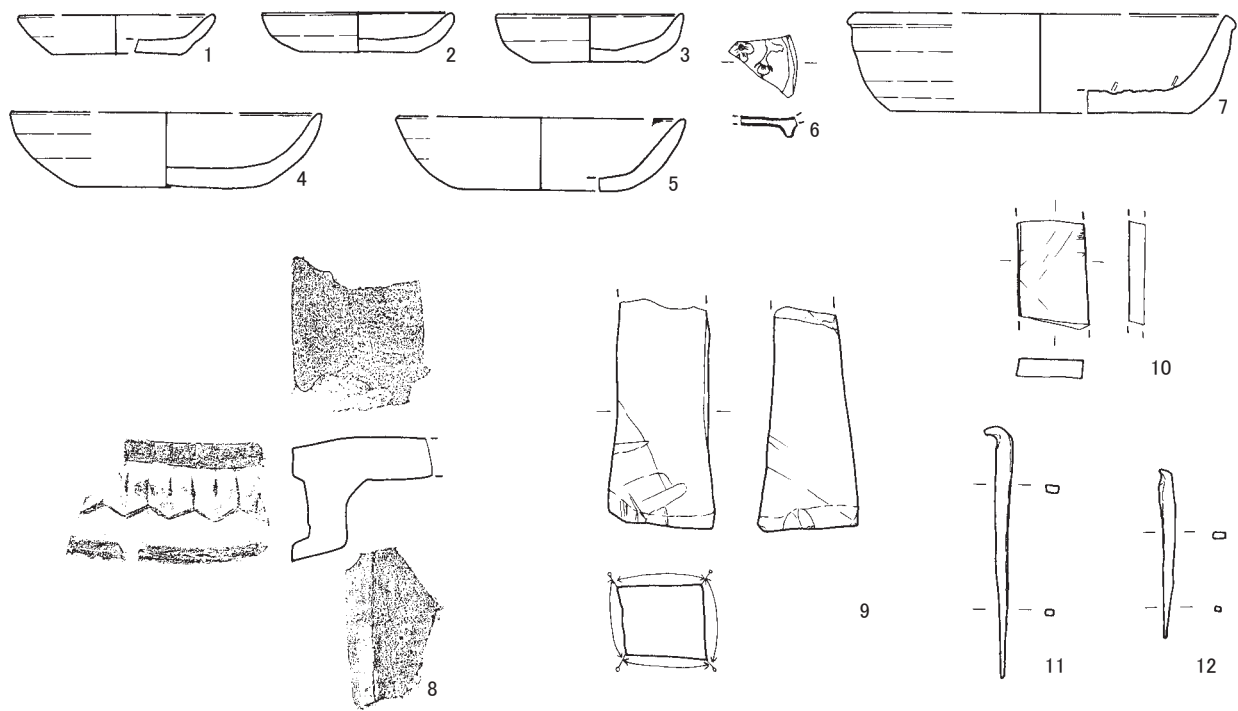


图 11 中世基盤層下 全体図



I・II区 掘り下げ

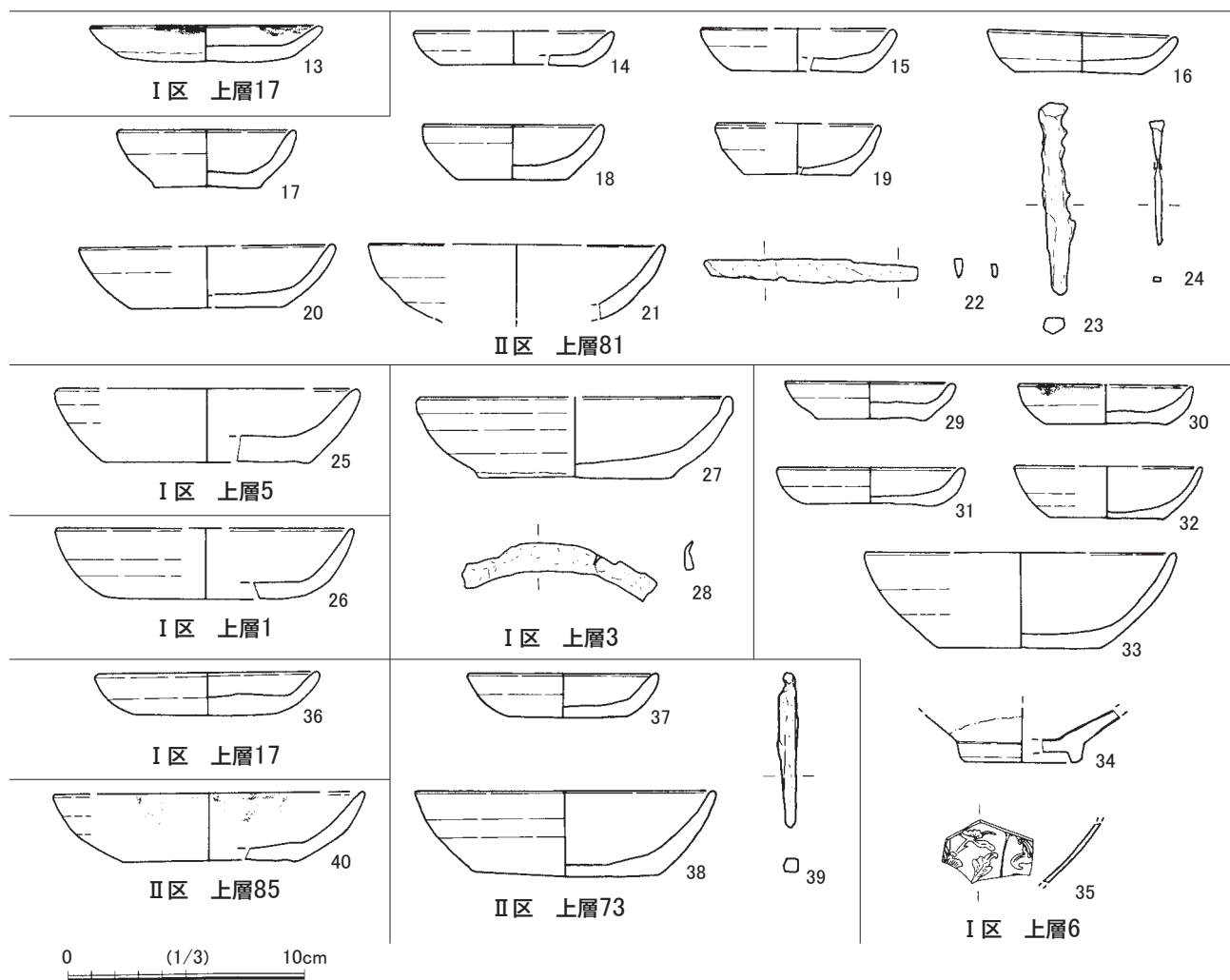


图 12 出土遺物 (1)

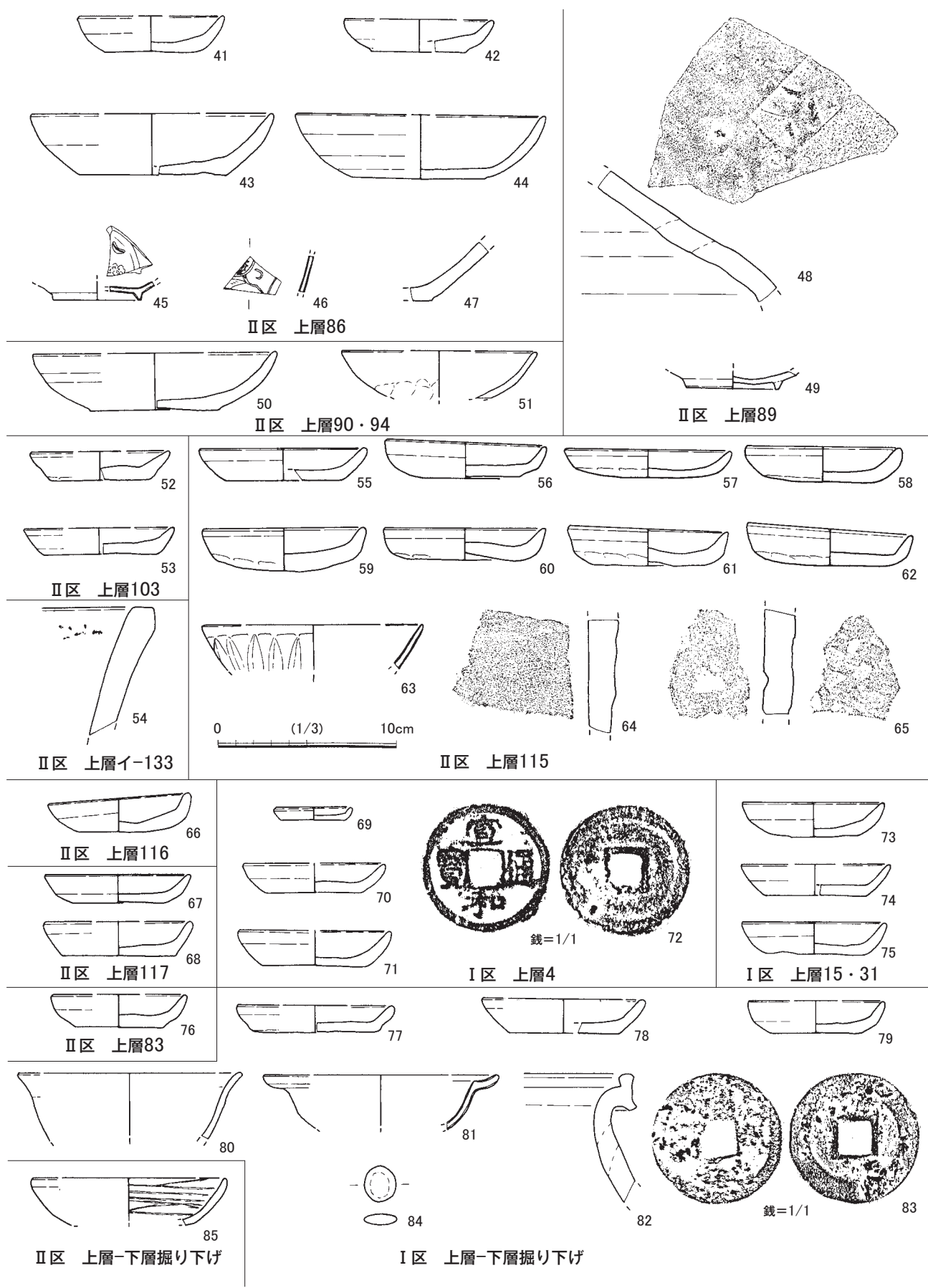
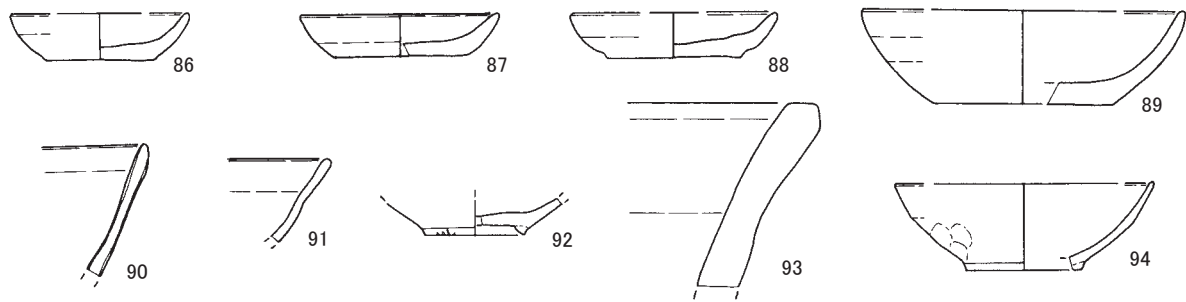
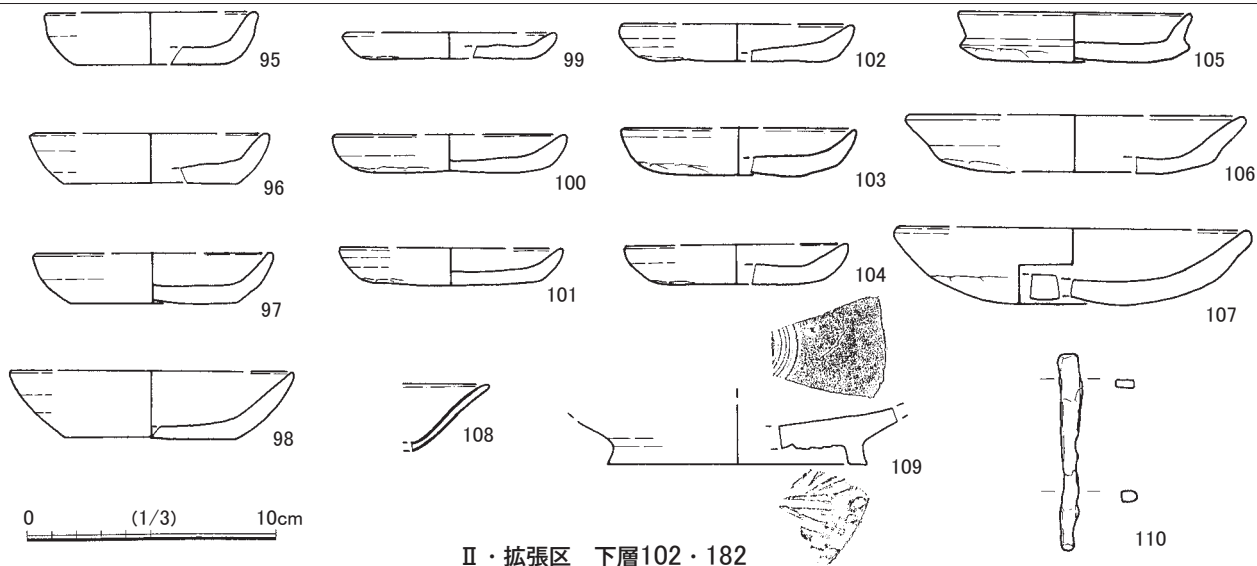


図 13 出土遺物 (2)

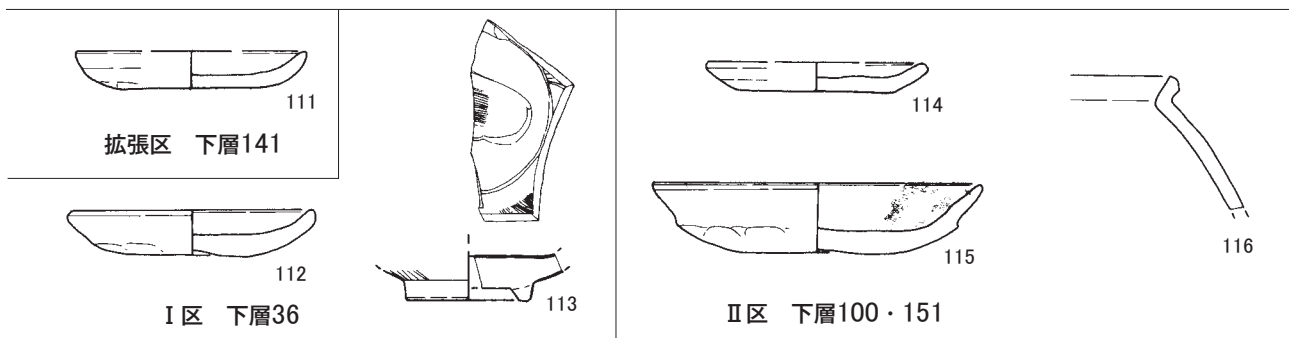


Ⅱ区 上層-下層 貝砂上灰褐色土



0 (1/3) 10cm

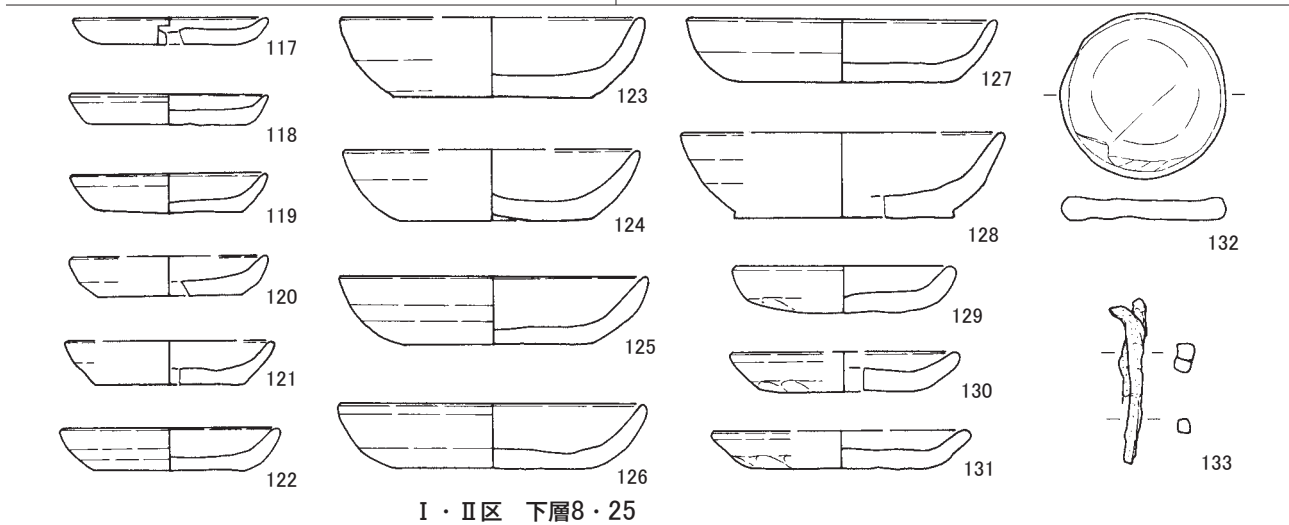
Ⅱ・拡張区 下層102・182



拡張区 下層141

I区 下層36

Ⅱ区 下層100・151



I・Ⅱ区 下層8・25

图 14 出土遺物 (3)

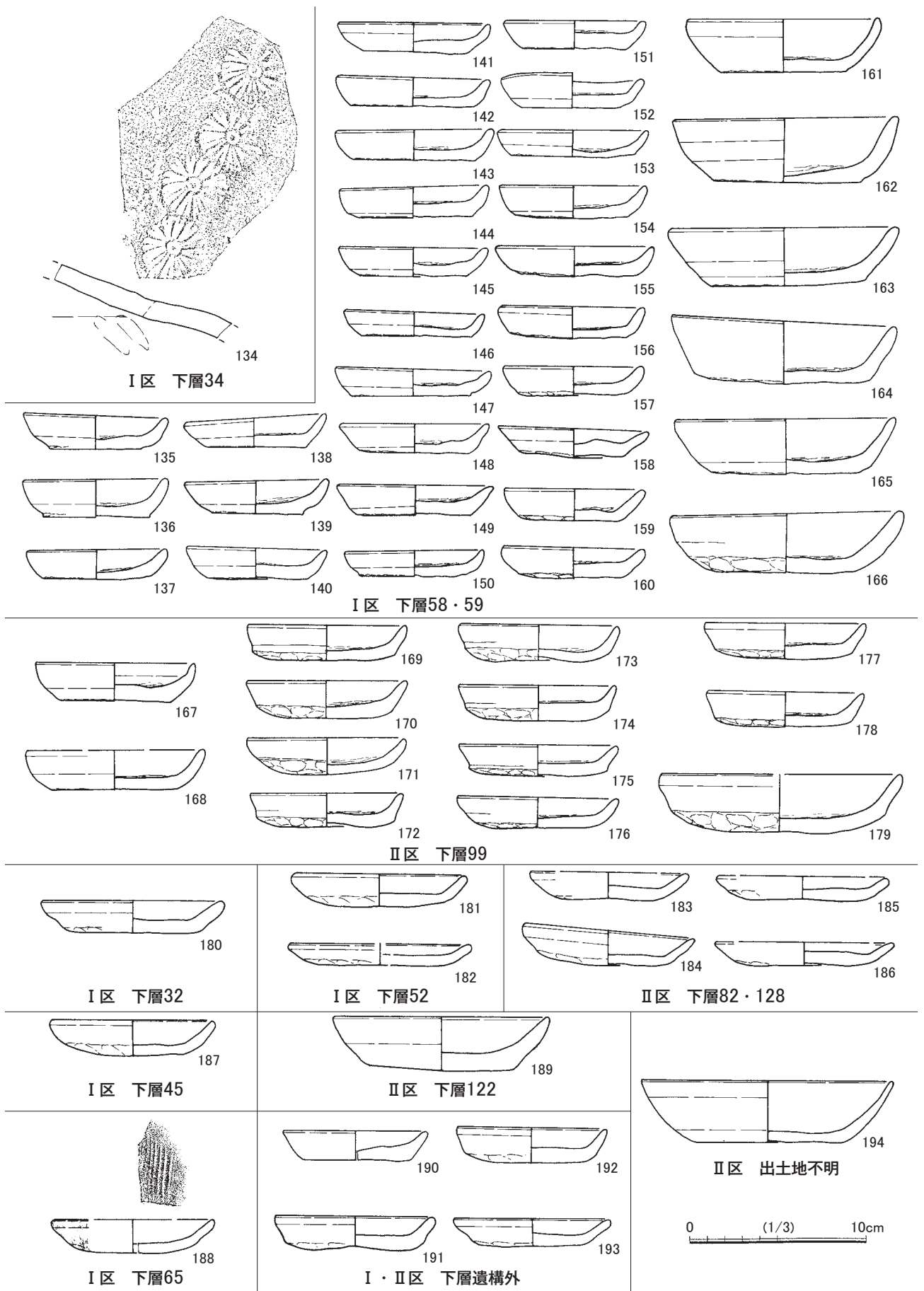
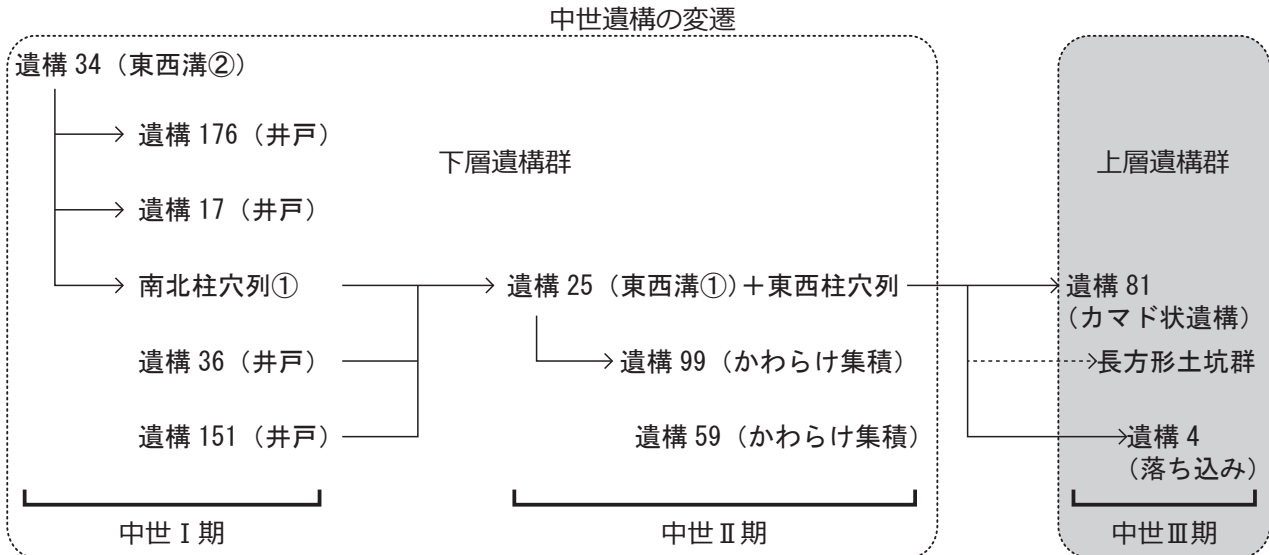


图 15 出土遺物 (4)

第五章 調査成果のまとめ

本地点の調査では、北条氏邸比定地の一面において、土地利用の跡を窺うことができた。以下、出土遺物の様相を基に中世の遺構変遷について整理し、本報告のまとめとしたい。

層序および遺構間の重複関係を基に遺構変遷を示すと、以下のとおりとなる。



遺構 34 (東西溝②) は、遺構の重複関係では最も古い。手づくねかわらけが出土しているので中世の遺構と判断できるが、埋土には夾雑物が殆ど含まれず、土地利用が活発化する以前に埋没した可能性が高い。これより後発の井戸も概して出土遺物が少なく、主体となるのは手づくねかわらけであった。ここまでを中世 I 期とし、大よそ 13 世紀前葉の年代観が考えられる。この段階では真北から 35° ほど東に傾いたラインが各施設の主軸線を規定し、東西溝②はこれに直交する方向で走っていた (図 16)。軸線に基準を置いて考えれば、南北柱穴列②もこの段階に含めることができよう。

遺構 25 (東西溝①) が I 期南北柱穴列①・②を切って開削され、遺構の中心ラインは 7~8° 西振れとなる。同方向で並ぶ東西柱穴列が、同時期に併存していた可能性を持つ。この東西区画施設の整備期を中世 II 期と考えた。この段階の出土かわらけは、東西柱穴列ではロクロと手づくねの重量比が拮抗、もしくは手づくねがやや優勢で、最終埋没時期の違いからか、東西溝①ではロクロ成形品が 7~8 割を占めるようになる。こうした遺物構成比の変化は、13 世紀中葉までに進んだものと考えられる。I 期から II 期への主軸変更を伴う区画施設の再整備を考察する時、やはり嘉禎二年 (1236) の將軍御所移転との関連は視野に入れなければならないだろう。史料考証のとおり本遺跡が北条泰時の邸宅であり將軍御所を内包していたとすれば、御所新造に伴って土地利用にも一大画期を求めることは自然な発想だろう。筆者には可能性としての提示しかできないが、I 期~II 期の画期を 13 世紀第 2 四半期中に置くことは、土器編年の研究蓄積を見ても格別に無理な推論ではないと考えている。

上層遺構面では、さらに大きな土地利用の変化が見て取れた。調査区南半部では長方形の土坑が重複して検出され、その幾つかには、かわらけ片や炭粒を多く混じえた土で埋め戻された様子が見られた。また、II 区の北西部では東西溝①が完全に埋没した後、その上部を覆うように遺構 81 (カマド状遺構) が構築される。この段階になると、出土かわらけの 8 割以上がロクロ成形品となり、手づくねかわらけが商品として生産・使用されていた可能性は考えにくくなる。今回の調査では窯産品の出土が少なく、

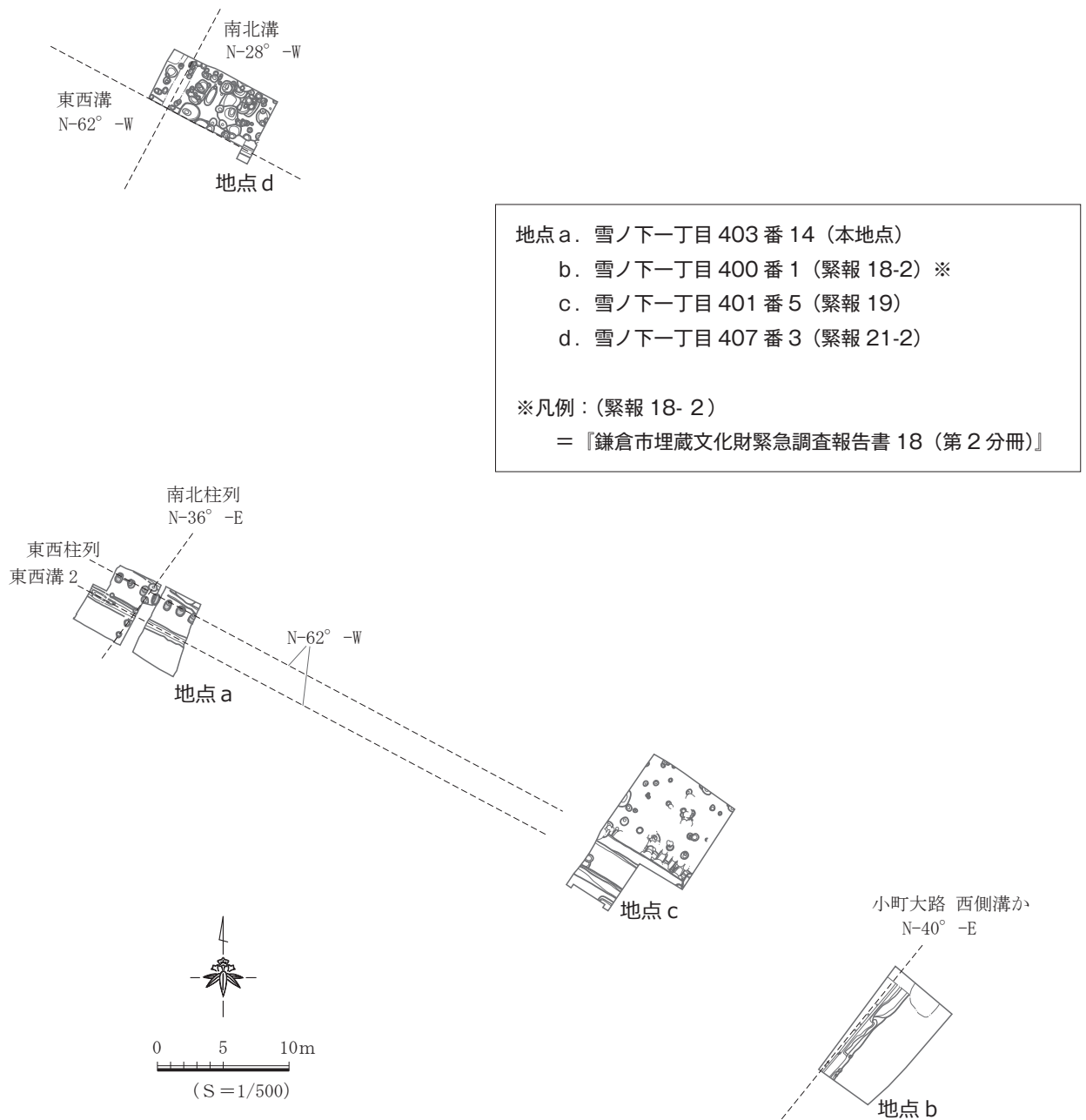


図 16 周辺調査地点合成図

かわらけの年代観を補う資料には恵まれなかったが、上述した手づくねかわらけの消長も加味すれば、13 世紀後葉～14 世紀前葉の幅で捉えられよう。大幅な空間利用の変化を重視すれば、北条氏邸および将軍御所の盛衰に関連付けて考察することもできるかもしれない。この段階を、中世Ⅲ期とする。

非常に狭い範囲での調査であったため本地点の情報だけで遺跡の性格を語ることはできないが、周辺の調査成果に目を向けることで幕府政治の中核域とされる場所ではどのような土地利用がなされ、また如何なる変遷を辿るのが多少とも見えてくるのではないかと思う。試みに、周辺地点との簡易合成図を掲げた(図 16)。年代的対比も含めた検証は必要であるが、本遺跡地内における土地割の基本ラインは読み取れるのではないかと思う。

最後に、図 11 に示した噴砂痕について触れておきたい。中世遺構の直下まで吹き上がり、I 期井戸(遺構 17)の埋土を突き抜けていないことを確認している。ここからは、地震の発生年代を 13 世紀前

葉を上限とすることしか示し得ず、また、どの程度の地震に伴う痕跡であるのかも不明である。専門研究者の見解を知りたいところである。今後、同類の事例を確認した際には必要な分析を行い、鎌倉における災害史の貴重な研究材料として蓄積を図るとともに、過去からの警鐘として広く市民に情報を提供していく姿勢も必要となろう。

参考文献

秋山哲雄 2010 『都市鎌倉の中世史』 吉川弘文館

馬淵和雄・鍛冶屋勝二・松原康子 2002 「北条小町邸跡 (No.282) 雪ノ下一丁目 400 番 1 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 18 (第 2 分冊)』 図 16- 地点 b

馬淵和雄・鍛冶屋勝二 2003 「北条小町邸跡 (No.282) 雪ノ下一丁目 401 番 5 ほか地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 19』 図 16- 地点 c

原 廣志・須佐直子 2005 「北条小町邸跡 (No.282) 雪ノ下一丁目 407 番 3 の一部地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 21 (第 2 分冊)』 図 16- 地点 d

表 1 出土遺物カウント・計量表

表 1 ① 掘り下げ時の出土遺物

帰属 遺構面	かわらけ								白かわらけ				白磁						
	ロクロ				手づくね				小片	ロクロ		手づくね		口禿皿		口禿碗		皿	
	大		小		大		小			大		大							
	点数	重量																	
表土	119	1765	17	165	1	10	2	15				1	10	1	5				
上層まで	582	6670	93	765	1	15			52	180				2	15			1	5
上層～下層	611	6760	127	1160	98	1305	35	380	76	250	1	5				1	15		
下層下	8	50	1	5	7	40	4	50											

帰属 遺構面	青磁 (龍泉窯系)				舶載陶器		瀬戸			渥美・湖西								
	劃花文碗		蓮弁文碗		折縁皿		壺類		緑釉盤		卸皿		折縁深皿		瓶類		甕	
	点数		重量															
	点数	重量																
表土												1	40	1	55			
上層まで			3	20			1	5			1	160	1	15				
上層～下層	1	10			1	25			1	25								
下層下																		

帰属 遺構面	尾張・常滑				瓦器		瓦質土器		瓦											
	甕		山茶碗		片口鉢 I類		碗		火鉢		軒平瓦		永・女C類		不明		永・男D類		不明	
	点数		重量																	
	点数	重量																		
表土	8	605						1	200	1	60			1	120					
上層まで	15	910			1	50			3	100	1	165			10	875			4	265
上層～下層	15	620	1	5	1	65	1	10	1	10			1	35	1	260	1	20		
下層下	1	50																		

帰属 遺構面	銅製品		鉄製品		石製品				肥前系磁器		近世磁器		土師器		須恵器		獣骨		
	銭		釘		基石		砥石		染付碗		不明		甕		坏		ウシ・ウマ	イルカ	不明
	点数		重量																
	点数	重量																	
表土			4	20			1	125											
上層まで			3	25			2	220	1	5	1	5							1
上層～下層	1	5	3	40	1	5							2	15			4	1	1
下層下			1	5											1	5			

凡例
点数 = 破片数
重量単位 = g

表1② 中世上層遺構（1～90・94）の出土遺物

帰属 遺構面	遺構	かわらけ														白かわらけ		土器			
		ロクロ								手づくね						小片		手づくね		吉備系	
		大		中		小		内折れ極小		大		小		内折れ				大		碗	
		点数	重量																		
上層	1	4	110			2	25									8	25				
上層	2	25	190			8	45			1	5										
上層	3	229	2060			37	235														
上層	3b	15	215			1	5														
上層	4	234	2525			41	320			23	310	5	70	1	10						
上層	5	22	340			2	15			9	175										
上層	8	22	240			1	10			14	175	2	40								
上層	9	4	35			6	30			15	15										
上層	10	319	3985			56	410			2	30										
上層	15	76	750			31	245														
上層	16	32	325			1	5														
下層	17	4	40			1	90			28	420	9	125								
下層	18	1	15			5	35			8	50	1	5								
上層	68	12	180			4	40														
上層	69	18	170			3	15														
上層	70	22	235			5	35														
上層	71	14	200			2	15														
上層	72	18	110			3	15														
上層	73	33	540			11	125			1	20										
上層	74	29	235			6	300														
上層	75	10	75			2	10														
上層	81	88	805	1	40	26	310			6	85	5	65								
上層	82	59	500			10	60														
上層	83a	58	460			20	145														
上層	83b	37	325			5	25														
上層	84	2	30							1	15										
上層	85	7	90			3	25														
上層	86	338	3730			45	385														
上層	87	4	50			2	10			13	100	8	135								
上層	88	40	600			9	75														
上層	89	90	1330			18	170													1	10
上層	90	32	475			25	180														
上層	90・94	127	1815			14	150													1	15

アミフセの行は下層遺構に訂正

帰属 遺構面	遺構	白磁										青白磁		青磁 (龍泉窯系)							
		口禿皿		口禿碗		皿		碗		合子蓋		四耳壺		瓶類		梅瓶		蓮弁文碗		碗・皿	
		点数	重量																		
上層	1																				
上層	2																1	10			
上層	3			1	5																
上層	3b																				
上層	4	1	5					1	5												
上層	5																				
上層	8												1	10							
上層	9																				
上層	10			1	25			1	5									1	5		
上層	15												1	85							
上層	16																				
下層	17																				
下層	18																				
上層	68																				
上層	69																				
上層	70																				
上層	71																				
上層	72																				
上層	73																				
上層	74																				
上層	75																				
上層	81											1	5								
上層	82																				
上層	83a																			1	5
上層	83b																				
上層	84																				
上層	85																				
上層	86					1	5	1	5												
上層	87																				
上層	88																				
上層	89																				
上層	90																				
上層	90・94																			1	15

アミフセの行は下層遺構に訂正

帰属 遺構面	遺構	船載陶器		瀬戸	渥美 ・湖西		尾張 ・常滑				東濃	東遠		
		褐釉 壺		瓶類	甕	鉢	甕	壺	山茶碗	片口鉢 I類		山茶碗	山茶碗	
		点数	重量											
上層	1													
上層	2						1	15						
上層	3								1	30				
上層	3b										1	50		
上層	4						3	170			1	5	1	25
上層	5													
上層	8													
上層	9													
上層	10	1	50				2	235	2	50			1	20
上層	15	1	25											
上層	16													
下層	17													
下層	18													
上層	68													
上層	69						1	15						
上層	70						1	55						
上層	71													
上層	72													
上層	73						1	45						
上層	74													
上層	75													
上層	81						2	60					1	15
上層	82													
上層	83a													
上層	83b						1	230						
上層	84						1	25						
上層	85													
上層	86													
上層	87													
上層	88												1	5
上層	89						2	350						
上層	90													
上層	90・94						1	20						

アミフセの行は下層遺構に訂正

帰属 遺構面	遺構	備前		瓦器	瓦質土器	瓦質						
		甕		碗	火鉢	平瓦			丸瓦			
		点数	重量			永・女C類	永・女D類	不明	不明			
上層	1											
上層	2											
上層	3											
上層	3b											
上層	4				1	15	1	150		1	75	
上層	5											
上層	8											
上層	9											
上層	10								1	65	1	160
上層	15				1	95						
上層	16											
下層	17											
下層	18											
上層	68											
上層	69											
上層	70							1	155			
上層	71											
上層	72											
上層	73											
上層	74											
上層	75				1	30						
上層	81				1	45					1	80
上層	82											
上層	83a											
上層	83b											
上層	84											
上層	85				1	110						
上層	86				2	50						
上層	87											
上層	88								1	20		
上層	89											
上層	90											
上層	90・94											

アミフセの行は下層遺構に訂正

帰属 遺構面	遺構	銅製品				鉄製品						石製品		獣骨		
		銭		不明		釘		鎌		不明		滑石鍋	不明	魚類		
		点数	重量													
上層	1															
上層	2															
上層	3			1	10											
上層	3b															
上層	4	1	5			1	15	1							1	
上層	5															
上層	8															
上層	9															
上層	10					2	15									
上層	15															
上層	16					2	30									
下層	17															
下層	18															
上層	68															
上層	69															
上層	70															
上層	71															
上層	72															
上層	73					1	15									
上層	74					1	5									
上層	75															
上層	81					2	25			1	10					
上層	82															
上層	83a															
上層	83b															
上層	84															
上層	85															
上層	86														1	
上層	87															
上層	88															
上層	89															
上層	90															
上層	90・94															

アミフセの行は下層遺構に訂正

表1③ 中世上層遺構（92～133）・上層遺構外の出土遺物

帰属 遺構面	遺構	かわらけ											白かわらけ		土器			
		ロクロ						手づくね					小片	手づくね		吉備系 碗		
		大		中	小		内折れ極小		大		小			内折れ			大	
		点数	重量															
上層	92	1	10						1	10								
上層	93	5	130						1	15								
上層	96	6	35			3	15											
上層	98	3	45						1	10	2	25						
上層	100	2	35						4	60	2	30						
上層	101	12	115			2	15		1	5								
下層	102	13	90			10	90		13	130	16	195						
上層	103	139	1470			20	170		1	60	1	25						
上層	104	11	140															
上層	105	21	280			2	15											
上層	106	3	41															
上層	107	1	10			2	15											
下層	108	9	85			1	10		3	55	1	5						
上層	110	7	55															
上層	111	4	45															
上層	112	1	25						2	15	1	15						
上層	114	5	70			1	15											
上層	115	47	810			11	185				8	500			1	5		
上層	116	117	1155			35	345				1	10					1	5
上層	117	86	860			11	160											
上層	119					1	5											
上層	120								1	25								
上層	121	1	25								2	25						
上層	122	2	175						1	5								
上層	123	2	30								1	10						
上層	124										1	10						
上層	125	1	10						2	25								
上層	127																	
上層	128								11	130	4	60						
上層	129	1	10			1	5											
上層	131								1	10								
上層	133	17	230			5	45											
上層	遺構外	305	3350			62	590	1	5	2	30	3	165				1	10

アミフセの行は下層遺構に訂正

所属 遺構面	遺構	白磁								青白磁	青磁 (龍泉窯系)				
		口禿皿		口禿碗		皿		碗		合子蓋	四耳壺	瓶類	梅瓶	蓮弁文碗	碗・皿
		点数	重量												
上層	92														
上層	93														
上層	96														
上層	98														
上層	100														
上層	101														
下層	102							1	5						
上層	103														
上層	104														
上層	105														
上層	106														
上層	107														
下層	108														
上層	110														
上層	111														
上層	112														
上層	114														
上層	115												1	15	
上層	116														
上層	117														
上層	119														
上層	120														
上層	121														
上層	122														
上層	123														
上層	124														
上層	125														
上層	127					1	5								
上層	128														
上層	129														
上層	131														
上層	133														
上層	遺構外													1	15

アミフセの行は下層遺構に訂正

帰属 遺構面	遺構	船載陶器		瀬戸	渥美 ・湖西		尾張 ・常滑				東濃	東遠			
		褐釉 壺		瓶類	甕	鉢	甕	壺	山茶碗	片口鉢 I類	山茶碗	山茶碗			
		点数	重量												
上層	92						1	20							
上層	93														
上層	96														
上層	98														
上層	100				1	30		2	195						
上層	101														
下層	102							1	20						
上層	103	1	40					1	50						
上層	104														
上層	105														
上層	106														
上層	107														
下層	108														
上層	110														
上層	111														
上層	112														
上層	114														
上層	115														
上層	116									1	10				
上層	117														
上層	119														
上層	120														
上層	121														
上層	122														
上層	123														
上層	124														
上層	125														
上層	127														
上層	128							1	15						
上層	129														
上層	131														
上層	133														
上層	遺構外							1	55			1	15	1	10

アミフセの行は下層遺構に訂正

帰属 遺構面	遺構	備前		瓦器		瓦質土器		瓦質土器					
		甕		碗		火鉢		平瓦			丸瓦		
		点数	重量					永・女C類	永・女D類	不明	不明		
上層	92												
上層	93												
上層	96												
上層	98												
上層	100											1	15
上層	101												
下層	102												
上層	103	1	70							1	55		
上層	104												
上層	105												
上層	106												
上層	107												
下層	108												
上層	110												
上層	111												
上層	112												
上層	114												
上層	115			1	15								
上層	116												
上層	117									1	20		
上層	119												
上層	120												
上層	121												
上層	122												
上層	123												
上層	124												
上層	125												
上層	127												
上層	128												
上層	129												
上層	131												
上層	133									1	90		
上層	遺構外											1	95

アミフセの行は下層遺構に訂正

帰属 遺構面	遺構	銅製品		鉄製品			石製品		獣骨・歯		
		銭		不明		釘	鎌	不明	滑石鍋	不明	魚類
		点数	重量								
上層	92										
上層	93									1	
上層	96										
上層	98										
上層	100										
上層	101										
下層	102										
上層	103										
上層	104									1	
上層	105										
上層	106										
上層	107										
下層	108										
上層	110										
上層	111										
上層	112										
上層	114										
上層	115										7
上層	116										
上層	117										
上層	119										
上層	120										
上層	121										
上層	122										
上層	123										
上層	124										
上層	125										
上層	127										
上層	128										
上層	129										
上層	131										
上層	133										
上層	遺構外							2	45		

アミフセの行は下層遺構に訂正

表1④ 中世下層遺構・下層遺構外の出土遺物

所属 遺構面	遺構	かわらけ													
		ロクロ						手づくね				小片			
		大		薄丸大		中		小		大				小	
		点数	重量												
下層	19										2	10			
下層	20									7	55	1	10		
下層	22	1	20					1	10						
下層	23a	1	10												
下層	23b									2	15				
下層	23c	1	15												
下層	25	1663	1431	8	70			31	425	27	390	9	195		
下層	26	1	5							10	80				
下層	27									4	35				
下層	32							1	5	15	150	1	50		
下層	34									4	50	3	15		
下層	36	4	40							11	80	5	135		
下層	41									2	10				
下層	45									1	10	1	40		
下層	46									1	15				
下層	49	20	260					4	35	30	420	19	400		
下層	51	10	100					5	25	6	65	8	80		
下層	52									13	135	7	175		
下層	54									2	50				
下層	55	1	10												
下層	57									4	35	2	10		
下層	58・59	274	8250			1	70	155	3370	7	320	13	465	3	5
下層	59	7	50					7	85						
下層	62											3	30		
下層	64							1	5	3	25	4	30		
下層	65											1	25		
下層	67	1	5							1	5				
下層	99	2	25					7	205	10	190	28	940		
下層	132	1	15												
下層	134									2	15	1	15		
下層	141	2	15					1	5	21	215	1	30		
下層	143									3	35	2	15		
下層	149									1	20				
下層	151	2	15							21	340	1	5		
下層	154	3	20												
下層	155													1	5
下層	156									1	10	1	20		
下層	158									1	5				
下層	159	1	5												
下層	164	5	45												
下層	168	1	10												
下層	170									4	20				
下層	171	1	5							1	20				
下層	172	1	10												
下層	173									1	55	1	5		
下層	176									6	65	3	10		
下層	176下層	1	10							1	20				
下層	177	3	30												
下層	180									1	10				
下層	181									2	10	3	10		
下層	182	32	365					14	150	56	710	67	765		
下層	遺構外	1	15							6	50	1	60		

帰属 遺構面	遺構	白磁				青白磁	青磁 (同安窯系)	青磁 (龍泉窯系)			舶載陶器	
		口禿皿		口禿碗	端反碗	瓶類	合子蓋	楡描文碗	劃花文碗	蓮弁文碗	碗・皿	褐釉 壺
		点数	重量									
下層	19											
下層	20											
下層	22											
下層	23a											
下層	23b											
下層	23c											
下層	25			1	10		1	5	1	5		
下層	26											
下層	27											
下層	32											
下層	34											
下層	36						1	55	1	10		
下層	41											
下層	45											
下層	46											
下層	49											
下層	51											
下層	52											
下層	54											
下層	55											
下層	57											
下層	58・59											
下層	59											
下層	62											
下層	64											
下層	65											
下層	67											
下層	99											
下層	132											
下層	134					1	10				1	25
下層	141											
下層	143											
下層	149											
下層	151										1	40
下層	154											
下層	155											
下層	156											
下層	158											
下層	159											
下層	164											
下層	168										1	5
下層	170											
下層	171											
下層	172											
下層	173											
下層	176					1	5					
下層	176下層											
下層	177											
下層	180											
下層	181											
下層	182	1	10						1	5	1	10
下層	遺構外											

帰属 遺構面	遺構	瀬戸		渥美 ・湖西			尾張 ・常滑		瓦質土器		瓦		
		灰釉 底卸目皿		甕	壺	こね鉢	甕	片口鉢 I類	火鉢		丸瓦 不明		
		点数	重量										
下層	19												
下層	20												
下層	22												
下層	23a												
下層	23b												
下層	23c												
下層	25						7	425					
下層	26												
下層	27												
下層	32												
下層	34						2	290					
下層	36						3	465					
下層	41												
下層	45												
下層	46												
下層	49			2	70		1	10					
下層	51			1	60								
下層	52												
下層	54												
下層	55												
下層	57										1	25	
下層	58・59												
下層	59												
下層	62												
下層	64			1	65								
下層	65												
下層	67												
下層	99												
下層	132						1	20					
下層	134								1	110			
下層	141												
下層	143												
下層	149								1	10			
下層	151						4	185	1	210			
下層	154												
下層	155												
下層	156												
下層	158						1	115					
下層	159												
下層	164												
下層	168												
下層	170												
下層	171												
下層	172												
下層	173												
下層	176												
下層	176下層												
下層	177												
下層	180												
下層	181						1	30					
下層	182	1	40			1	45	2	85	1	15	1	45
下層	遺構外						1	15					

帰属 遺構面	遺構	鉄製品		石製品		木製品 ・木材		土師器		須恵器		獣骨
		釘	不明	石英片	砥石	草履 芯	箸	高坏	甕	坏	不明	
		点数	重量									
下層	19											
下層	20											
下層	22											
下層	23a											
下層	23b											
下層	23c											
下層	25	2	10		1	5			1	30		2
下層	26											
下層	27											
下層	32											
下層	34					1	5					
下層	36			1	55			1	2			
下層	41											
下層	45											
下層	46											
下層	49											
下層	51											
下層	52											
下層	54											
下層	55											
下層	57											
下層	58・59											
下層	59											
下層	62	1	5									
下層	64											
下層	65											
下層	67											
下層	99											
下層	132										1	5
下層	134											
下層	141								1	5		
下層	143											
下層	149											
下層	151											
下層	154											
下層	155											
下層	156											
下層	158											
下層	159											
下層	164											
下層	168											
下層	170											
下層	171											
下層	172											
下層	173											
下層	176											
下層	176下層											
下層	177											
下層	180											
下層	181											
下層	182	1	15									
下層	遺構外											

表2 出土遺物観察表

遺物 番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
出土遺物(1)(図12)						
1	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(5.2)	1.6	1/3 胎土：雲母、白色針状物質 色調：橙色
2	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.7)	(4.8)	1.6	1/2 胎土：雲母、白色針状物質 色調：橙色
3	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.5)	(4.6)	1.9	3/4 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色
4	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.4)	(7.2)	3.0	2/3 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色
5	土器	ロクロ かわらけ・大	(11.4)	(7.2)	2.9	1/3 胎土：雲母、白色針状物質 色調：橙色 備考：口縁部煤付着
6	磁器	白磁 皿	—	—	—	底小片 胎土：白色、緻密 釉薬：透明 施釉：薄い 底部接地面露胎
7	陶器	瀬戸 卸皿	(14.8)	(12.0)	4.0	1/3 胎土：精良、灰白色 釉：オリープ灰色（灰釉）
8	瓦	軒平瓦	長さ [5.5]	幅 [5.5]	厚さ 1.7	下向剣頭文 瓦当部幅：高さ4.5cm 胎土：灰色 砂粒 白色粒 小石粒 凸面：縄目痕、ナデ、離れ砂 凹面：ヘラケズリ、離れ砂
9	石製品	砥石	長さ [9.0]	幅 3.4	厚さ 3.0	残存率不明 灰白色 伊予中砥 3面使用、一部茶色に変色
10	石製品	砥石	長さ [4.1]	幅 2.1	厚さ 0.6	残存率不明 灰白色 鳴滝産仕上げ砥
11	鉄製品	釘	長さ 10.0	幅 0.5	厚さ 0.3	[8.5]g
12	鉄製品	釘	長さ 6.7	幅 0.5	厚さ 0.3	[4.6]g
13	土器	手づくね かわらけ・小	(9.4)	—	1.5	3/4 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色 備考：口縁部に煤付着
14	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.2)	(6.0)	1.4	1/4 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色
15	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.9)	(5.6)	1.8	1/3 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色
16	土器	ロクロ かわらけ・小	7.9	5.2	1.7	4/5 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色
17	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.3)	(4.4)	2.4	4/5 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色
18	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.4)	(4.6)	2.3	5/6 胎土：雲母、白色針状物質 色調：橙色
19	土器	ロクロ かわらけ・小	(6.8)	(4.6)	2.1	1/3 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色
20	土器	ロクロ かわらけ・中	(10.7)	(6.6)	2.6	1/3 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色
21	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.4)	—	—	1/5 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色
22	鉄製品	用途不明	長さ 8.9	幅 0.8	厚さ 0.4	刀子か？ [8.1]g
23	鉄製品	釘	長さ 8.1	幅 0.8	厚さ 0.7	[12.6]g
24	鉄製品	釘	長さ 5.2	幅 0.3	厚さ 0.2	[1.6]g
25	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.6)	(8.8)	3.1	1/4 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色
26	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.4)	(8.6)	3.0	1/3 胎土：雲母、白色針状物質 色調：橙褐色
27	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.0)	(8.0)	3.5	1/2 胎土：雲母、白色針状物質 色調：明橙褐色
28	鉄製品	用途不明	長さ 8.1	幅 1.2	厚さ 0.3	[9.3]g
29	土器	ロクロ かわらけ・小	7.1	4.5	1.6	4/5 胎土：雲母、白色針状物質 色調：淡橙色
30	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.2)	(5.0)	1.6	1/2 胎土：雲母、白色針状物質 色調：橙色 灯明皿 口縁部煤付着
31	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(5.4)	1.5	1/2 胎土：雲母、白色針状物質 色調：橙色
32	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(4.8)	2.2	1/3 胎土：雲母、白色針状物質 色調：橙色
33	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.0)	(7.0)	4.0	1/3 胎土：雲母、白色針状物質 色調：橙色
34	磁器	白磁 碗	—	(4.8)	—	底部1/3 胎土：灰白色、緻密 釉薬：灰白色 施釉：薄い
35	磁器	白磁 印花文碗	—	—	—	胴小片 胎土：白色、緻密 釉薬：白色 施釉：薄い

遺物番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
36	土器	ロクロ かわらけ・小	9.3	6.0	1.8	完形 88g 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色
37	土器	ロクロ かわらけ・小	7.9	5.2	1.8	2/3 胎土：雲母、白色針状物質 色調：橙色
38	土器	ロクロ かわらけ・大	12.5	8.0	3.6	4/5 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色
39	鉄製品	釘	長さ 6.5	幅 0.5	厚さ 0.5	[7.6]g
40	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.0)	(7.4)	2.9	1/4 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色
出土遺物(2)(図13)						
41	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.0)	(5.0)	2.0	1/3 胎土：雲母、白色針状物質 色調：橙色
42	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.3)	(5.4)	1.8	1/4 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色
43	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.4)	(8.2)	3.5	1/3 胎土：雲母、白色針状物質 色調：橙色
44	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.9)	(7.4)	3.6	1/3 胎土：雲母、白色針状物質 色調：橙色
45	磁器	白磁 梅月文碗	(5.0)	—	—	底部1/4 胎土：白色 緻密 釉薬：淡青白色 施釉：薄い
46	磁器	白磁 碗か皿	—	—	—	体小片 胎土：白色、緻密 釉薬：透明 施釉：薄い
47	陶器	捏鉢	—	—	—	底小片 胎土：灰色、砂粒、白色粒 色調：灰色 備考：片口鉢I類？ 渥美鉢？
48	陶器	常滑 甕	—	—	—	胴小片 胎土：淡橙色 砂粒、黒色粒 色調：暗赤褐色 釉：オリーブ灰色（自然釉） 外面にスタンプ
49	土器	吉備系 碗	—	(5.2)	—	高台部1/2 胎土：砂粒、白色粒、黒色粒 色調：灰白色 貼付高台
50	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.5)	(7.2)	3.2	1/4 胎土：雲母、白色針状物質 色調：橙色
51	土器	吉備系 碗	(10.8)	—	—	1/5 胎土：砂粒、白色粒 色調：灰白色
52	土器	手づくね かわらけ・小	(7.6)	—	1.6	1/3 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色
53	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.3)	(6.2)	1.5	1/4 胎土：雲母・白色針状物質 色調：黄橙色 備考：打ち欠き？1ヶ所
54	瓦質土器	火鉢	—	—	—	口～体小片 胎土：灰色 砂粒 色調：暗灰色 口縁部ヘラケズリ 口縁部外面 焼成後に磨耗 備考：口縁部内面に漆？が付着 河野I B類
55	土器	ロクロ かわらけ・小	(9.2)	(6.4)	1.8	1/2 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色
56	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.8)	(6.3)	2.0	4/5 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色
57	土器	手づくね かわらけ・小	(9.2)	—	1.6	3/4 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色
58	土器	手づくね かわらけ・小	8.9	—	2.0	3/4 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色
59	土器	手づくね かわらけ・小	9.0	—	2.4	3/4 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色
60	土器	手づくね かわらけ・小	8.9	—	1.8	略完形 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色
61	土器	手づくね かわらけ・小	8.7	—	2.1	略完形 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色
62	土器	手づくね かわらけ・小	9.1	—	2.0	略完形 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色
63	磁器	龍泉窯系青磁 蓮弁文碗	(12.4)	—	—	1/6 胎土：灰白色 緻密 施釉：緑灰色 施釉：厚い 貫入あり 大宰府III-2C類か
64	瓦	平瓦	長さ [5.8]	幅 [7.0]	厚さ 1.9	胎土：灰色 砂粒、白色粒、黒色粒 色調：灰色 凸面：剥離 凹面：離れ砂、布目痕
65	瓦	平瓦	長さ [5.7]	幅 [4.5]	厚さ 1.8	胎土：灰白色 砂粒、白色粒、黒色粒 色調：灰色 凸面：離れ砂、斜格子文 凹面：離れ砂
66	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	5.4	1.9	4/5 胎土：雲母、白色針状物質 色調：橙色
67	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.0)	(5.0)	1.6	2/3 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色
68	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.1)	(6.4)	1.9	2/3 胎土：雲母、白色針状物質 色調：橙色
69	土器	ロクロ かわらけ・極小	(4.2)	(3.6)	0.7	1/2 胎土：雲母、白色針状物質 色調：橙色
70	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.9)	(5.4)	1.7	1/2 胎土：雲母、白色針状物質 色調：明橙褐色

遺物 番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
71	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.4)	(5.8)	1.9	1/2 胎土：雲母、白色針状物質 色調：淡黄橙色
72	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.5	厚さ 0.1	宣和通寶 中国北宋代・1119年初鑄
73	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	5.0	2.0	完形 56g 胎土：雲母、白色針状物質 色調：橙色
74	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.2)	(5.6)	1.8	1/3 胎土：雲母、白色針状物質 色調：明橙褐色
75	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	5.3	1.8	略完形 胎土：雲母、白色針状物質 色調：明橙褐色
76	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.4)	(5.0)	1.8	3/4 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色
77	土器	手づくね かわらけ・小	(8.6)	—	1.5	1/3 胎土：雲母、白色針状物質 色調：橙色
78	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.8)	(6.2)	1.9	1/4 胎土：雲母、白色針状物質 色調：淡橙色
79	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.4)	(5.2)	1.8	1/3 胎土：雲母、白色針状物質 色調：橙色
80	磁器	白磁 口元皿	—	—	—	口小片 胎土：灰白色 釉薬：淡青灰色 施釉：薄い 大宰府IX類
81	磁器	龍泉窯系青磁 折縁皿(坏)	—	—	—	口小片 胎土：灰白色 釉薬：灰緑色 施釉：薄い
82	陶器	常滑 甕	—	—	—	口小片 胎土：灰色 砂粒・白色粒・黒色粒 色調：褐色
83	銅製品	銭	直径 2.3	孔径 0.5	厚さ 0.1	銭銘不明
84	石製品	基石	直径 1.8	厚さ 0.6	—	暗灰色 安山岩
85	瓦器	碗	(10.8)	—	—	1/6 胎土：灰色 砂粒 内面にヨコヘラミガキによる暗文
出土遺物(3)(図14)						
86	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.0)	(4.4)	1.8	1/2 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色
87	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(5.2)	1.7	3/4 胎土：雲母、白色針状物質 色調：赤褐色
88	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.2)	(5.4)	1.8	1/3 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色
89	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.7)	(7.0)	3.8	1/3 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色
90	磁器	龍泉窯系青磁 無文碗	—	—	—	口小片 胎土：灰白色 緻密 施釉：緑灰色 施釉：薄い 貫入あり
91	陶器	東遠 山茶碗	—	—	—	口小片 胎土：灰色 精良 色調：灰色 備考：自然釉
92	陶器	東濃 山茶碗	—	—	(4.0)	底部1/4 胎土：灰白色 精良 色調：灰白色 貼付け高台 高台接着面に靱殻痕
93	瓦質土器	火鉢	—	—	—	口～体小片 胎土：灰色 砂粒 色調：暗灰色 口縁部ヘラケズリ 口縁部外面 焼成後に磨耗 河野IB類か
94	土器	吉備系 碗	(10.2)	(4.6)	3.5	1/5 胎土：砂粒 白色粒 色調：灰白色 貼付け高台
95	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.4)	(6.2)	2.1	1/4 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色
96	土器	ロクロ かわらけ・小	(9.2)	(7.0)	2.0	1/5 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色
97	土器	ロクロ かわらけ・小	(9.4)	(6.6)	2.0	1/4 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色
98	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.3)	(7.0)	2.7	1/4 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色
99	土器	手づくね かわらけ・小	(8.3)	—	1.0	1/4 胎土：雲母、白色針状物質 色調：橙色
100	土器	手づくね かわらけ・小	(9.2)	—	1.5	1/3 胎土：雲母、白色針状物質 色調：橙色
101	土器	手づくね かわらけ・小	(8.8)	—	1.5	3/4 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色
102	土器	手づくね かわらけ・小	(9.2)	—	1.5	1/4 胎土：雲母、白色針状物質 色調：橙色
103	土器	手づくね かわらけ・小	(9.2)	—	1.9	1/3 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色
104	土器	手づくね かわらけ・小	(8.8)	—	1.6	1/4 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色
105	土器	手づくね かわらけ・小	(9.2)	—	2.0	3/4 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色

遺物 番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
106	土器	手づくね かわらけ・大	(13.0)	—	2.3	1/3 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色
107	土器	手づくね かわらけ・大	(14.0)	—	3.0	3/4 胎土：雲母、白色針状物質 色調：橙色 備考：焼成後に底部穿孔
108	磁器	白磁 口元皿	—	—	—	口小片 胎土：灰白色 緻密 釉薬：乳白色 備考：内外面に気泡あり 大宰府IX類
109	陶器	瀬戸 底御目皿	—	(10.5)	—	底1/6 胎土：黄灰白色 砂粒 白色粒 施釉：灰緑色
110	鉄製品	釘	長さ 7.9	幅 0.8	厚さ 0.4	[10.2]g
111	土器	手づくね かわらけ・小	(9.2)	—	1.5	1/4 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色
112	土器	手づくね かわらけ・小	9.6	—	1.7	完形 83g 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色
113	磁器	青磁 櫛搔文碗	—	—	4.8	底部1/2 胎土：灰色 緻密 釉薬：灰緑色 施釉：薄い 同安窯系 I-1b類か
114	土器	手づくね かわらけ・小	(8.6)	—	1.2	1/4 胎土：雲母、白色針状物質 色調：橙色
115	土器	手づくね かわらけ・大	(13.1)	—	2.8	2/3 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色 備考：内外面 煤付着
116	施釉陶器	褐釉 壺	—	—	—	口へ体小片 胎土：茶褐色 砂粒 精良 色調：茶褐色 施釉：薄い
117	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	5.5	1.1	略完形 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色 備考：底部焼成後に穿孔
118	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(6.2)	1.2	2/3 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色
119	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	6.0	1.6	完形 42g 胎土：雲母、白色針状物質 色調：橙色
120	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(5.8)	1.6	1/4 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色
121	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.1)	(6.0)	1.8	1/4 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色
122	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.6)	(6.0)	1.7	3/4 胎土：雲母、白色針状物質 色調：明黄褐色
123	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.0)	(8.0)	3.2	1/3 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色
124	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.8)	(7.8)	2.9	2/4 胎土：雲母、白色針状物質 色調：橙色
125	土器	ロクロ かわらけ・大	12.2	8.0	2.8	5/6 胎土：雲母、白色針状物質 色調：橙色
126	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.1)	(7.8)	2.6	4/5 胎土：雲母、白色針状物質 色調：橙色
127	土器	ロクロ かわらけ・大	12.2	9.2	2.6	5/6 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色
128	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.7)	(8.8)	3.4	1/4 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色
129	土器	手づくね かわらけ・小	(8.6)	—	1.9	1/3 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色
130	土器	手づくね かわらけ・小	(9.0)	—	1.6	1/3 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色
131	土器	手づくね かわらけ・小	(10.2)	—	1.5	1/3 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色
132	土製品	かわらけ転用 円盤	直径 6.6	厚さ 0.9	—	胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色
133	鉄製品	釘	長さ 6.7	幅 0.9	厚さ 1.2	2本が付着 [8.8]g
出土遺物(4)(図15)						
134	陶器	常滑 甕	—	—	—	胴小片 胎土：灰色 白色粒、長石粒 色調：褐色 外面に菊花文のスタンプ
135	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	5.2	2.1	2/3 胎土：雲母、白色針状物質 色調：明橙色
136	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	6.1	2.2	2/3 胎土：雲母、白色針状物質 色調：明橙色
137	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	6.0	1.7	3/4 胎土：雲母、白色針状物質 色調：明橙色
138	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	5.7	2.0	完形55g 胎土：雲母、白色針状物質 色調：明橙色
139	土器	ロクロ かわらけ・小	8.1	5.2	1.4	3/4 胎土：雲母、白色針状物質 色調：明橙色
140	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	5.7	1.9	完形 66g 胎土：雲母、白色針状物質 色調：明橙色

遺物 番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
141	土器	ロクロ かわらけ・小	8.4	5.8	1.7	5/6 胎土：雲母、白色針状物質 色調：橙褐色
142	土器	ロクロ かわらけ・小	8.6	7.1	1.7	1/2強 胎土：雲母、白色針状物質 色調：明橙色
143	土器	ロクロ かわらけ・小	8.7	7.0	1.7	略完形 胎土：雲母、白色針状物質 色調：明橙色
144	土器	ロクロ かわらけ・小	8.3	6.7	1.8	完形 77g 胎土：雲母、白色針状物質 色調：明橙色
145	土器	ロクロ かわらけ・小	8.3	6.1	1.7	1/2強 胎土：雲母、白色針状物質 色調：明橙色
146	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	6.2	1.5	完形 49g 胎土：雲母、白色針状物質 色調：明橙色
147	土器	ロクロ かわらけ・小	8.6	6.7	1.7	完形 70g 胎土：雲母、白色針状物質 色調：明橙色
148	土器	ロクロ かわらけ・小	8.2	6.1	1.6	3/4 胎土：雲母、白色針状物質 色調：明橙色
149	土器	ロクロ かわらけ・小	8.8	6.5	1.8	3/4 胎土：雲母、白色針状物質 色調：明橙色
150	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	6.0	1.5	3/4 胎土：雲母、白色針状物質 色調：明橙色
151	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	5.9	1.6	4/5 胎土：雲母、白色針状物質 色調：明橙色
152	土器	ロクロ かわらけ・大	8.0	5.2	2.0	完形 62g 胎土：雲母、白色針状物質 色調：明橙色
153	土器	ロクロ かわらけ・小	8.2	5.5	1.5	完形 62g 胎土：雲母、白色針状物質 色調：明橙色
154	土器	ロクロ かわらけ・小	8.2	6.4	1.9	2/3 胎土：雲母、白色針状物質 色調：明橙色
155	土器	ロクロ かわらけ・小	8.7	6.7	1.8	完形 72g 胎土：雲母、白色針状物質 色調：明橙色
156	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	4.5	1.9	完形 65g 胎土：雲母、白色針状物質 色調：明橙色
157	土器	手づくね かわらけ・小	7.7	—	1.7	完形 60g 胎土：雲母、白色針状物質 色調：明橙色
158	土器	手づくね かわらけ・小	8.5	—	1.7	略完形 胎土：雲母、白色針状物質 色調：橙色
159	土器	手づくね かわらけ・小	7.7	—	1.8	完形 59g 胎土：雲母、白色針状物質 色調：明橙色
160	土器	手づくね かわらけ・小	7.7	—	1.9	完形 69g 胎土：雲母、白色針状物質 色調：明橙色
161	土器	ロクロ かわらけ・中	(10.6)	7.1	3.0	3/4 胎土：雲母、白色針状物質 色調：明橙色
162	土器	ロクロ かわらけ・大	12.4	8.3	3.7	完形 224g 胎土：雲母、白色針状物質 色調：明橙色
163	土器	ロクロ かわらけ・大	12.8	8.8	3.3	3/4 胎土：雲母、白色針状物質 色調：明橙色
164	土器	ロクロ かわらけ・大	12.5	8.7	4.0	完形 211g 胎土：雲母、白色針状物質 色調：明橙色
165	土器	ロクロ かわらけ・大	12.2	5.2	3.1	3/4 胎土：雲母、白色針状物質 色調：明橙色
166	土器	手づくね かわらけ・大	12.8	—	3.6	略完形 胎土：雲母、白色針状物質 色調：明橙色
167	土器	ロクロ かわらけ・大	9.0	6.4	2.1	4/5 胎土：雲母、白色針状物質 色調：橙色
168	土器	ロクロ かわらけ・中	(10.0)	(7.0)	2.3	1/3 胎土：雲母、白色針状物質 色調：橙色
169	土器	手づくね かわらけ・小	9.0	—	2.0	完形 86g 胎土：雲母、白色針状物質 色調：橙色
170	土器	手づくね かわらけ・小	9.0	—	2.1	略完形 胎土：雲母、白色針状物質 色調：淡橙色
171	土器	手づくね かわらけ・小	9.0	—	2.1	完形 66g 胎土：雲母、白色針状物質 色調：淡橙色
172	土器	手づくね かわらけ・小	8.6	—	1.9	完形 80g 胎土：雲母、白色針状物質 色調：淡橙色
173	土器	手づくね かわらけ・小	9.0	—	2.0	完形 81g 胎土：雲母、白色針状物質 色調：橙色
174	土器	手づくね かわらけ・小	9.0	—	2.0	4/5 胎土：雲母、白色針状物質 色調：橙色
175	土器	手づくね かわらけ・小	8.9	—	1.7	3/4 胎土：雲母、白色針状物質 色調：淡橙色

遺物 番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
176	土器	手づくね かわらけ・小	9.0	—	1.6	完形 64g 胎土：雲母、白色針状物質 色調：橙色
177	土器	手づくね かわらけ・小	9.0	—	2.0	略完形 胎土：雲母、白色針状物質 色調：淡橙色
178	土器	手づくね かわらけ・小	8.8	—	1.9	略完形 胎土：雲母、白色針状物質 色調：淡橙色
179	土器	手づくね かわらけ・大	(13.5)	—	3.2	1/2弱 胎土：雲母、白色針状物質 色調：赤橙色
180	土器	手づくね かわらけ・小	(10.2)	—	1.9	2/3 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色
181	土器	手づくね かわらけ・小	9.5	—	1.9	完形 83g 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色
182	土器	手づくね かわらけ・小	(10.2)	—	1.2	1/3 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色
183	土器	手づくね かわらけ・小	(8.8)	—	1.6	1/4 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色
184	土器	手づくね かわらけ・小	9.6	—	2.0	2/3 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色
185	土器	手づくね かわらけ・小	(9.6)	—	1.3	3/4 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色
186	土器	手づくね かわらけ・小	(10.0)	—	1.3	1/4 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色
187	土器	手づくね かわらけ・小	9.0	—	2.0	2/3 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色
188	土器	手づくね かわらけ・小	(9.1)	—	1.9	1/4 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色 備考：外面の一部黒変 内底部にササラ状工具痕
189	土器	ロクロ かわらけ・大	12.1	8.2	3.1	完形 171g 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色
190	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.1)	(6.0)	1.7	1/2 胎土：雲母、白色針状物質・土丹粒 色調：淡黄褐色
191	土器	手づくね かわらけ・小	8.8	—	2.0	5/6 胎土：雲母・土丹粒・白色針状物質 色調：黄橙色
192	土器	手づくね かわらけ・小	8.4	—	2.0	略完形 胎土：雲母・土丹粒 色調：黄橙色 歪み大きい
193	土器	手づくね かわらけ・小	8.7	—	1.6	略完形 胎土：雲母 色調：黄橙色
194	土器	ロクロ かわらけ・大	14.3	8.2	3.5	4/5 胎土：雲母、白色針状物質 色調：黄橙色



1. 調査区設定状況（南東から）



2. 調査区設定状況（北西から）



3. II区 表土除去後（南から）



4. I区 表土除去後（南から）



5. II区 上層検出状況（南から）



6. I区 上層検出状況（南から）

図版2



1. I区 上層検出状況（北から）



2. I区 上層 作業状況（北東から）



3. II区 上層全景①（南から）



4. I区 上層全景①（北から）



5. II区 上層全景②（南から）



6. I区 上層全景②（南から）



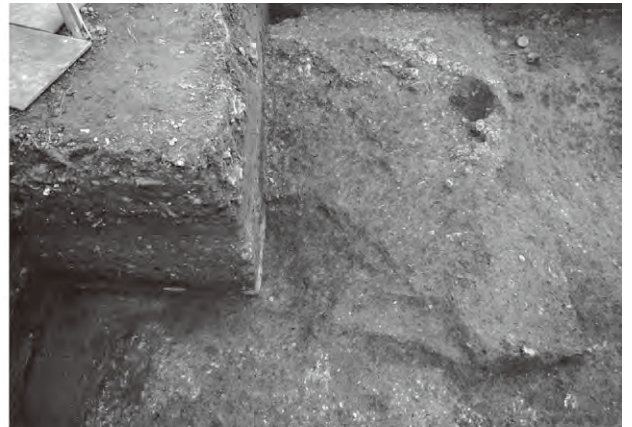
1. II区上層 遺構 81 検出状況 (南から)



2. II区上層 遺構 81 (粘土貼り面:南から)



3. II区上層 遺構 81 (粘土貼り面:東から)



4. II区上層 遺構 81 (粘土面除去後:南から)



5. II区上層 遺構 81 (南部縦断面:東から)



6. II区上層 遺構 81 (北部縦断面:東から)



7. II区上層 遺構 81 (横断面:南から)



8. II区上層 遺構 81 (縦断面:東から)

図版4



1. II区下層 全景 (東から)



2. I区下層 全景 (北から)



3. II区下層 全景 (南から)



4. I区下層 全景 (南から)



5. I区2面 遺構8・25 (東西溝①:西から)



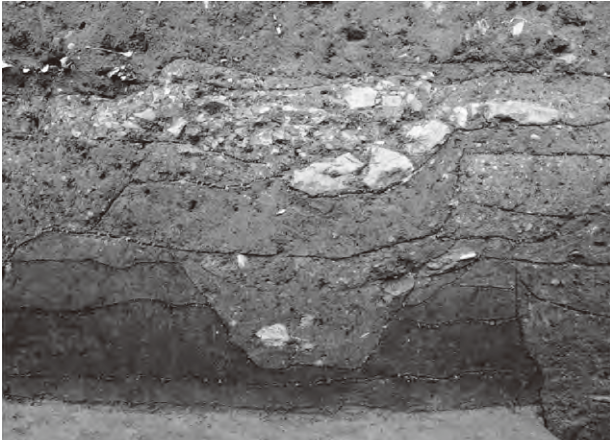
6. I区下層 遺構8・25 かわらけ出土状況(南西から)



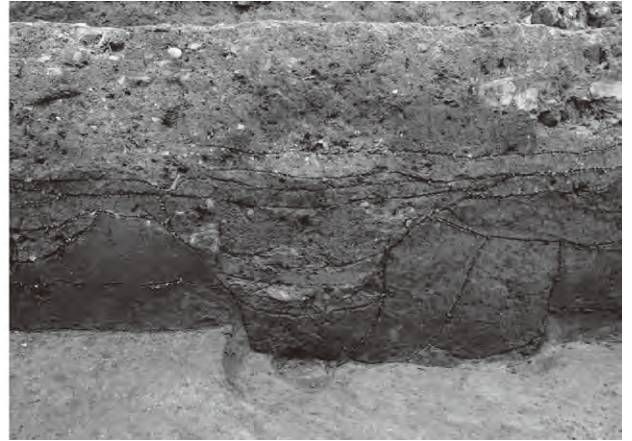
7. II区下層 遺構8・25 (東西溝①:西から)



8. II区下層 遺構8・25 (東西溝①:東から)



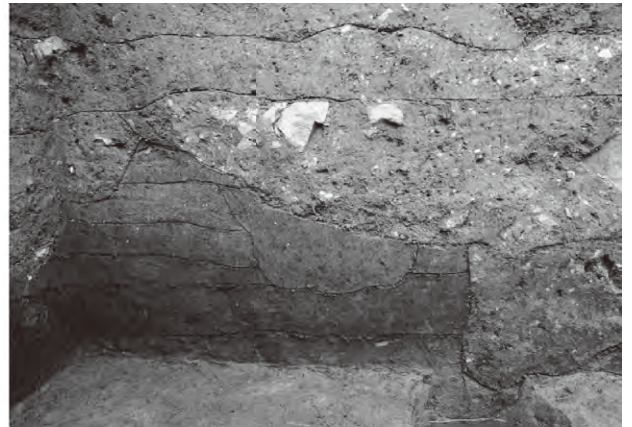
1. I区東壁 下層遺構 8・25 断面(東西溝①:南西から)



2. I区西壁 下層遺構 8・25 断面(東西溝①:東から)



3. II区下層 遺構 34 (東西溝②:東から)



4. I区東壁 上層遺構 34 (東西溝②:西から)



5. I区下層 遺構 34 (東西溝②:東から)



6. II - 拡張区下層 柱穴 182 (東西柱穴列:西から)



7. II区下層 東西柱穴列 (東から)

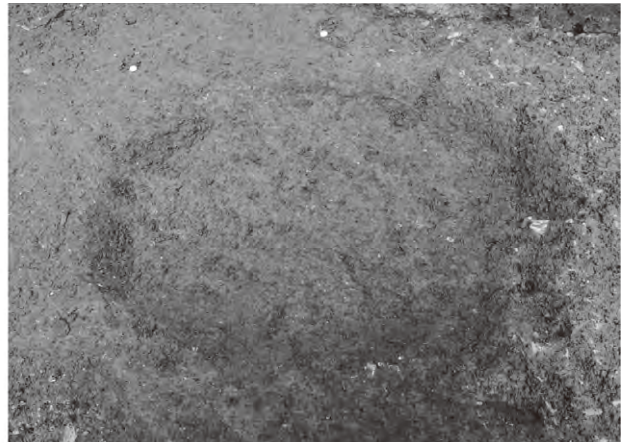


8. II - 拡張区東壁 柱穴 182 断面(東西柱穴列:西から)

図版6



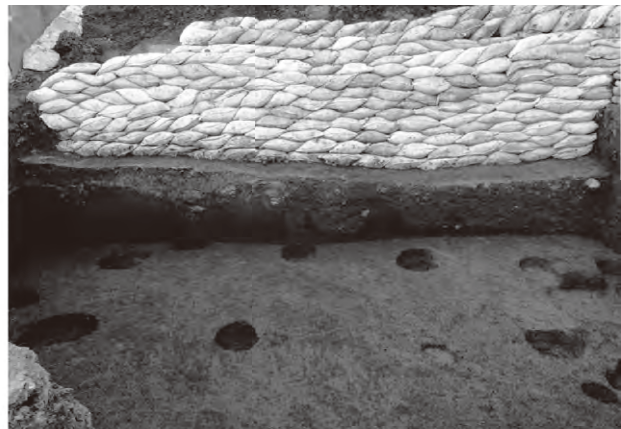
1. II区下層 遺構 99 (かわらけ集積：南から)



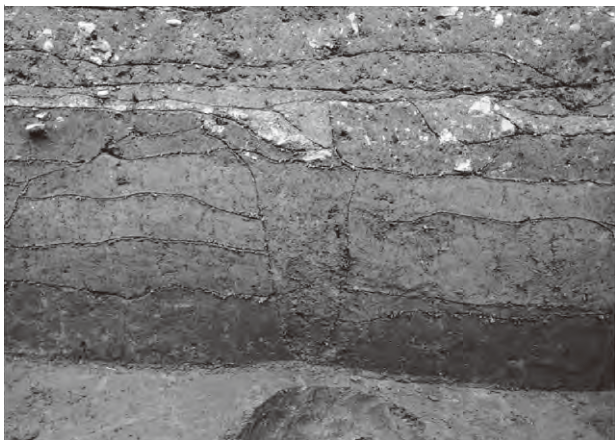
2. II区下層 遺構 99 完掘後 (かわらけ集積：南から)



3. II区下層 南北柱穴列① (Ⅲ b層上面：南から)



4. II区 東壁断面 (西から)



5. II区3面 柱穴 134 断面 (南西から)



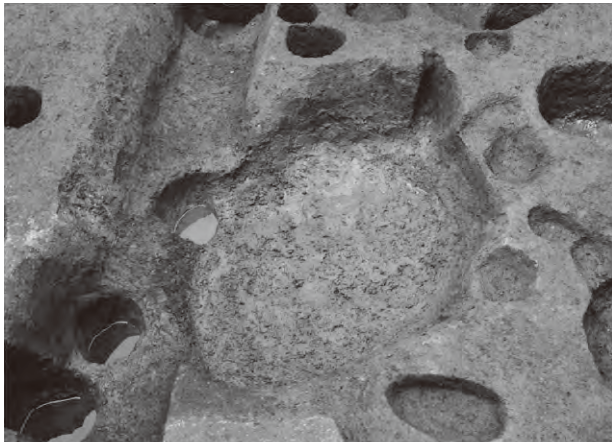
6. II区東壁 柱穴 143 断面 (南北柱穴列①：西から)



7. II区東壁 東西溝①・柱穴 171 断面 (西から)



8. II区下層 かわらけ出土状況 (東から)



1. I区下層 遺構 36 (井戸：東から)



2. I区下層 遺構 36 完掘後 (井戸：西から)



3. II区上層遺構 81・下層遺構 25・151 断面 (東から)



4. II区下層 遺構 151 (井戸：東から)



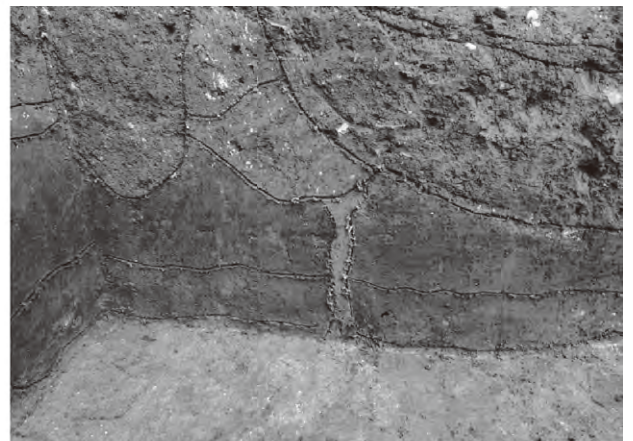
5. II区IIIc層上面 全景 (南から)



6. I区IIIc層上面 全景 (南から)

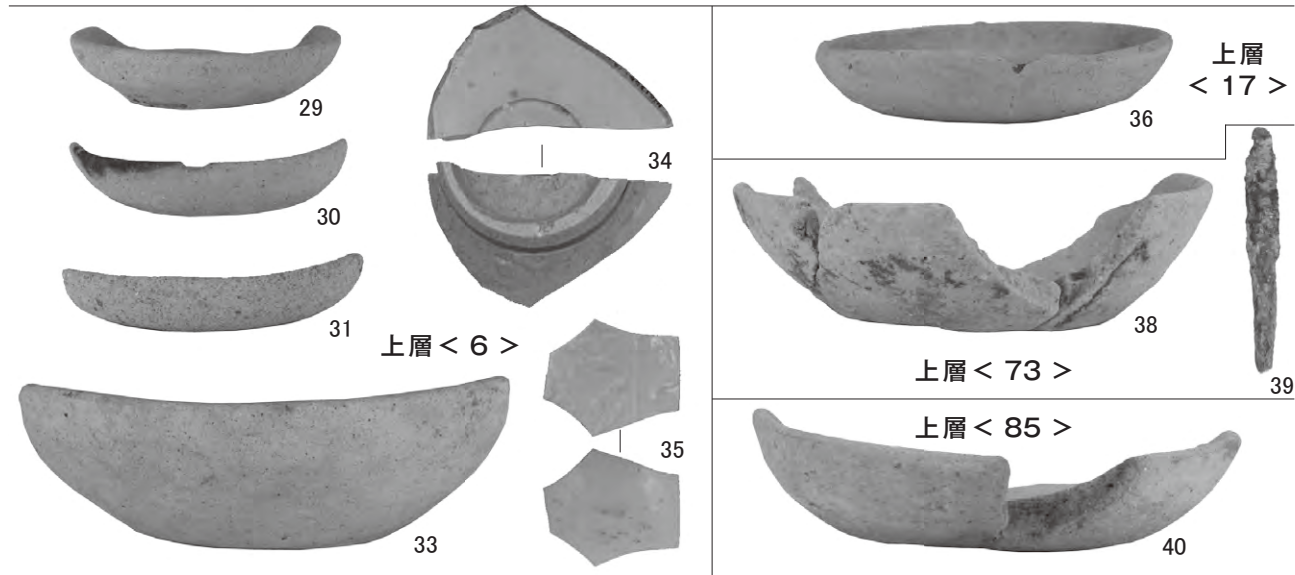
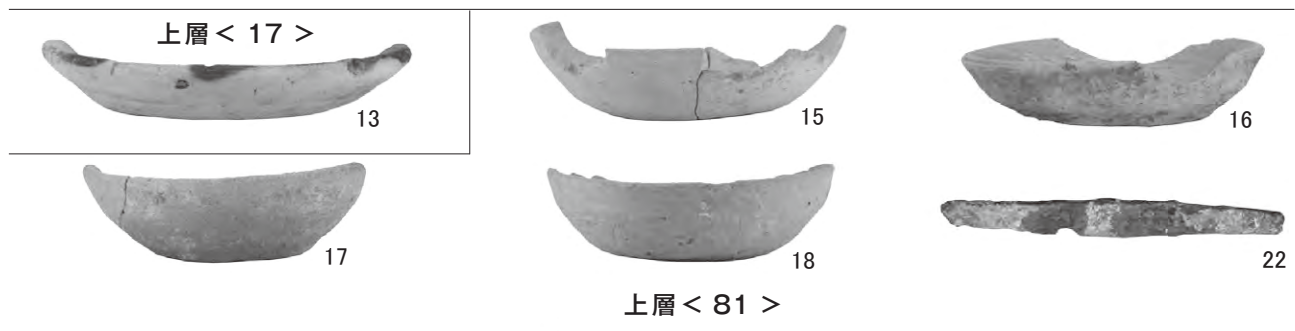
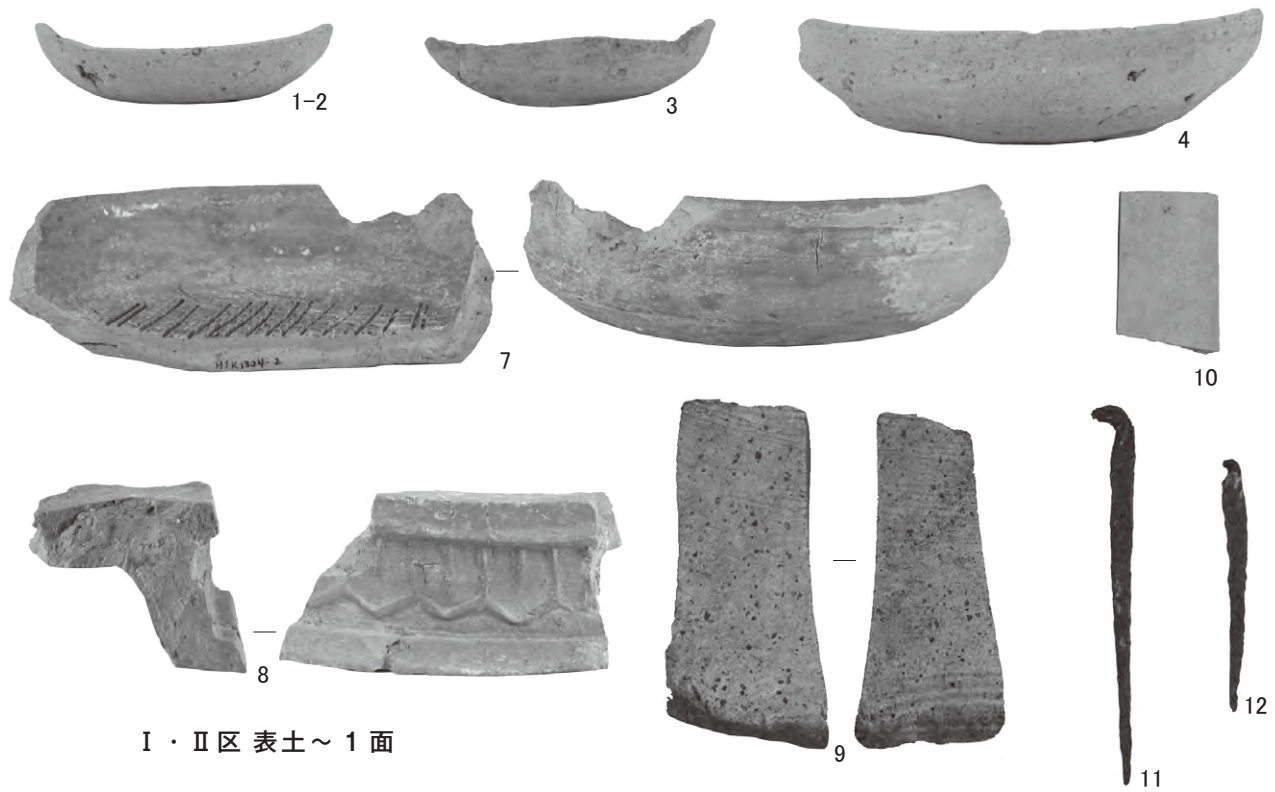


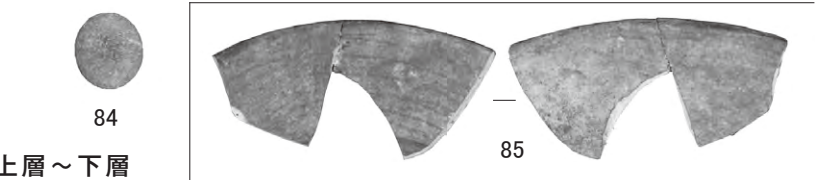
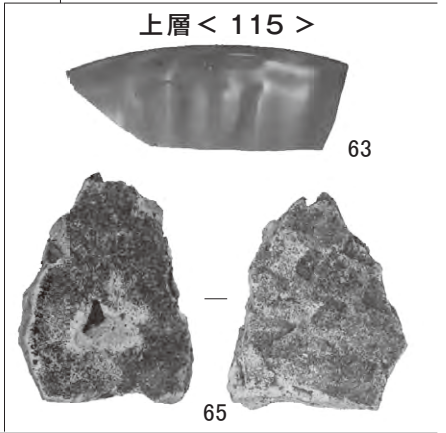
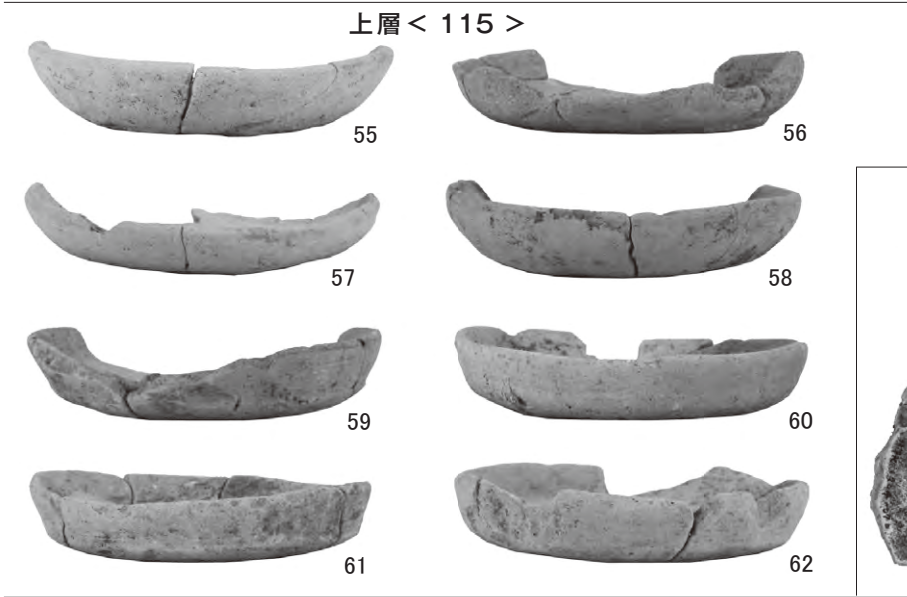
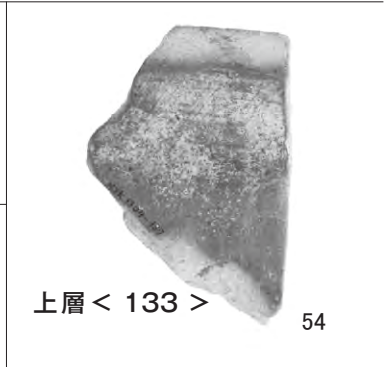
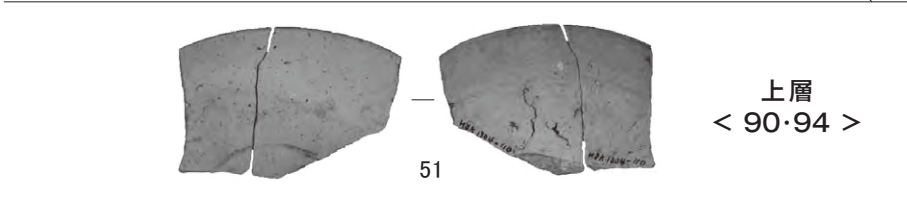
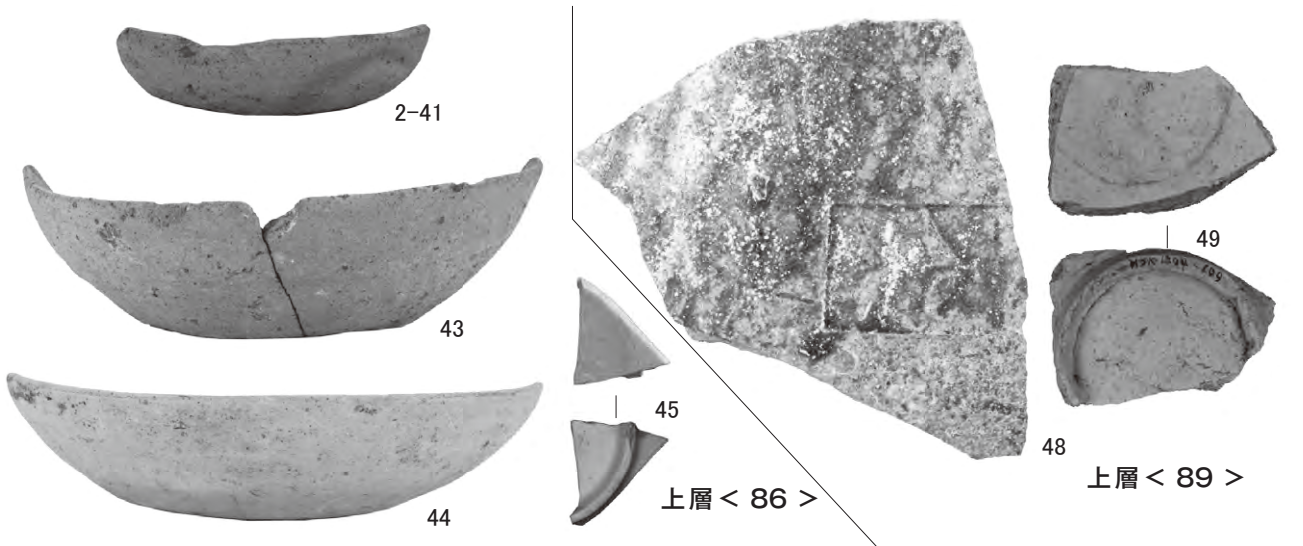
7. II区IIIc層上面 噴砂痕検出状況 (北から)



8. I区南壁 噴砂痕断面 (北から)

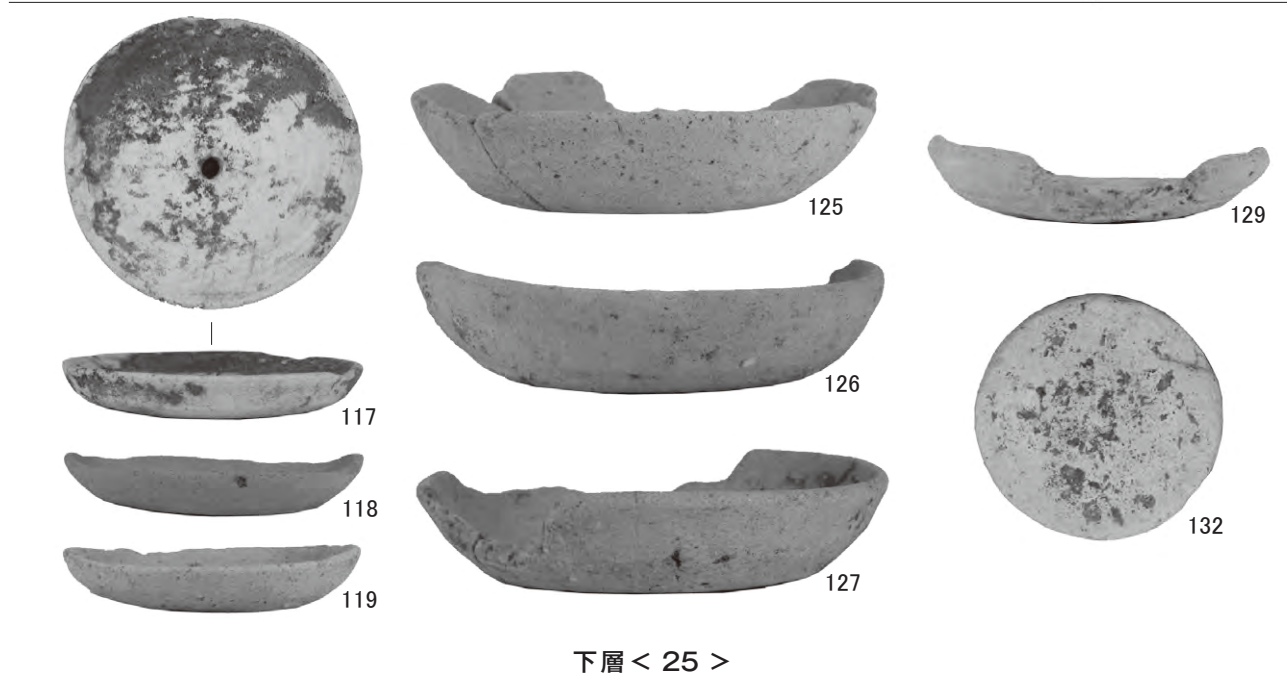
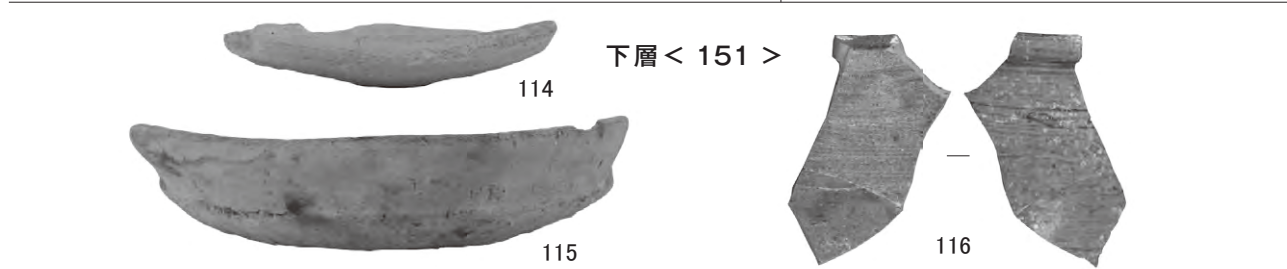
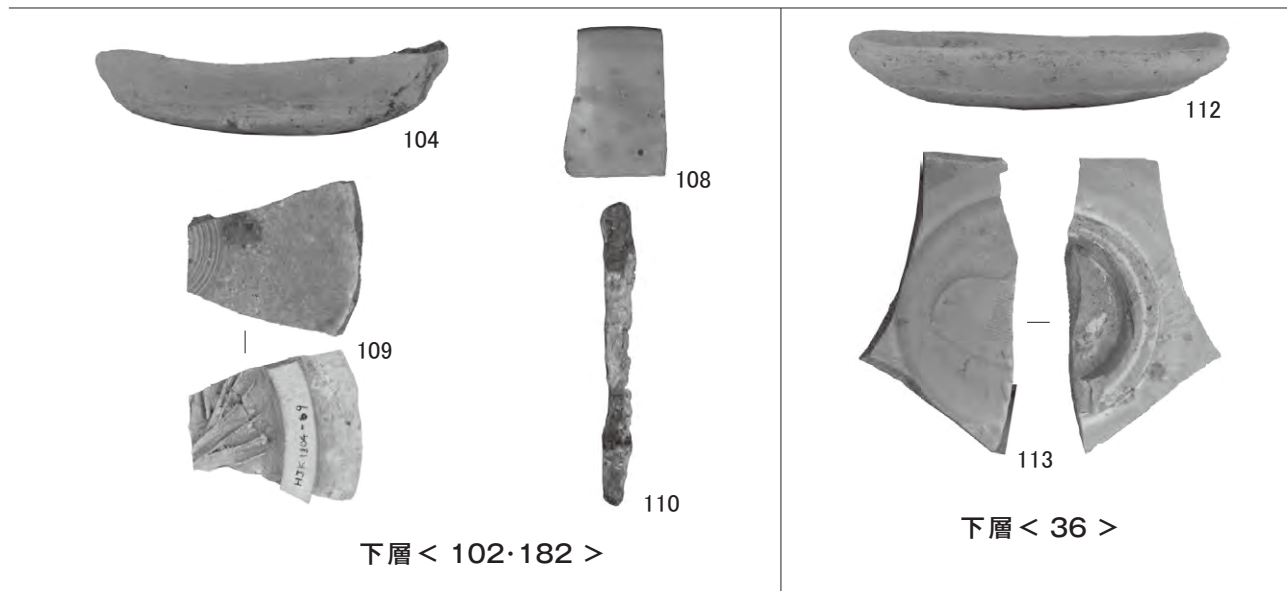
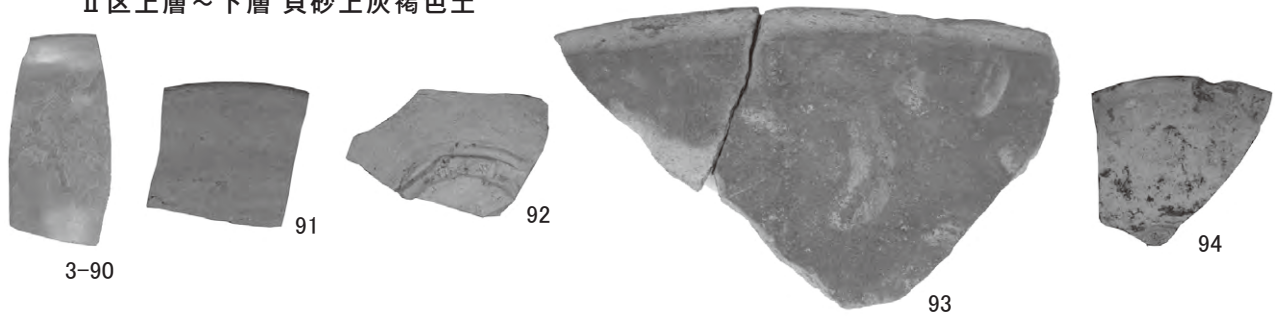
图版 8



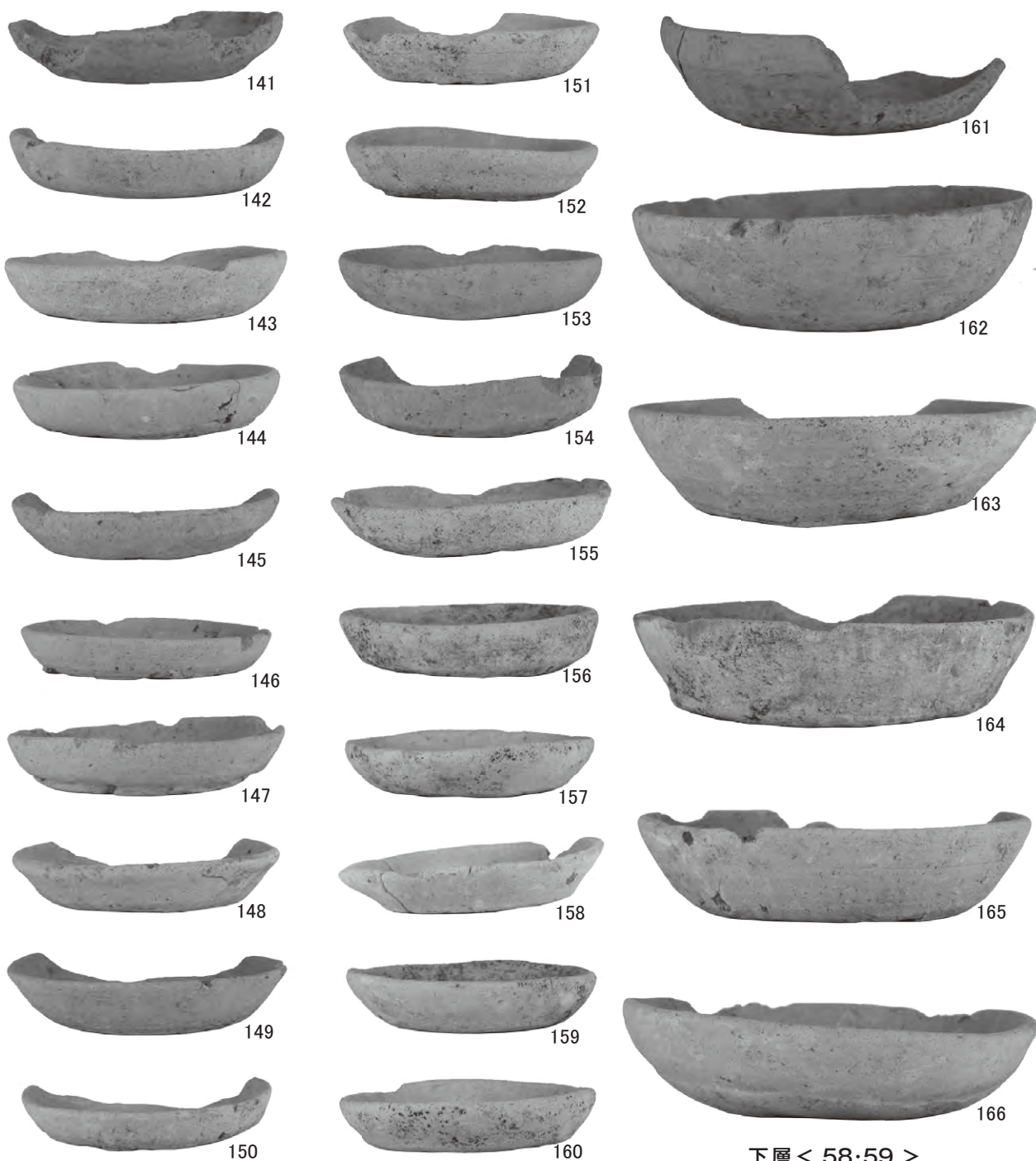
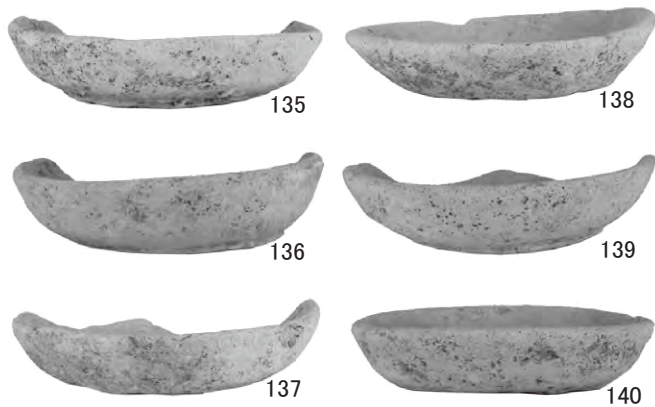


图版 10

Ⅱ区上層～下層 貝砂上灰褐色土



下層 < 34 >



下層 < 58・59 >

図版 12



167



169



170



171



172



173



174



175



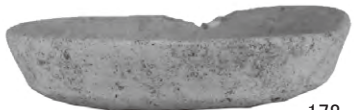
176



177



179



178

下層 < 99 >



181



184



187



182



185

下層 < 87・128 >

下層 < 52 >



189

下層 < 122 >



190



191



192



193

下層 遺構外